

ごまだかく(帥殿ノ如ク)私に上り來るためしなし(思フニ)是れたゞの事
 にはあらじ、公家(公家)をいかにし奉らんごする事を構へたるぞごいみ
 じき事を推しはからせ給ふも怖ろしくして、すべて都の近きがす
 ることなりとて、(近カク)又々も斯くぞあらんごて、此たびはまこ
 この筑紫へごて、檢非違使(檢非違使)ごも送り奉るべき宣旨下りぬ。
ドモ帥殿ノ籠リ給フ西院ニ打ちかこみてごくく(カ)聊か遁れたまふべ
 くもあらずそゝのかし聞ゆ(帥殿ノ)又更なる御けしきごもいへば
 おろかにゆかし。

釋 「おどろくしう」とは驚くべく仰山なる意なり、おほやけに皆さまく云々前々
 より公然と赦免を得て歸洛せし事はわれを未だ此の公の如く私に京に上り來
 りし例なしとの意、すべて都近きがする事なりとは帥殿のかく私に京に上り來
 りしは、都より播磨への道の程、あまり近きが故にする事なりといふ意、又更なる
 御けしきごもとは、斯かる事あるべしとは、豫じめ期したる事なれども、又今更の
 感にうたるゝ様子をいふ。

評 「朝野を擧げて世人の驚きたる状況、現然として、さながら其の場に臨む趣あり、
 此たびの御供には、母北の方の御はらからの、津の守爲基(いひし)
 人の女にて、宣旨とてありし(カ)御車にて、やがて參る。母北の方あき
 れて、やがて物もおぼえ給はず。帥殿は何かは(腫ケベキ)是れはごこわ
 りの事なれば、さるべきにこそはご、よろづ思しめして出でさせ給
 ふに、(雅見)松君は我れも(共ニニカ)我れもご泣き叫びのゝしり給ふ。
 實に哀に悲しういみじかしこくこしらへ留め奉りて、御車引きい
 づる程も、哀にかなしうあさましう心憂く夢のやうなる事にもあ
 るかなご、盡きせずおぼしなげかる(定字)宮の御前の御心地にも、播磨ご
 かは此上なく近かしごきつれば、頼もしかりつるものを、あり
 ごもかゝりごも、母北の方は(ナガラ)おはすべきにもあらざめり。ご
 かくの事の(アラ)をりに、いかに哀に心細う(アルベカ)誰れかは
 やごも、いはんごすらんご盡きもせず思さる。

釋 「松君」とは伊周公の子道雅をいふとありともかゝりともとは俗にドチラニ
テモ所詮なほいふに同じ誰れかはやとあるはやは感動の意。

さても此の御事は、越後守平親守といふ人の子、いご許たありける
中に、右馬助孝義といひて、歌うたひ折りふしの陪從べいじゆうなどに召さる
ゝありけり。それが申出でたる事ありければ、公家の爲めにうしろ
安き事申出でたりとて、加階賜はせたりければ、歡びいひに父が許
に行きたりければ、親信の朝臣、いづこに誰れが許して、此處には
來つるぞ、おほけなくつれなくもあるかな。かやうの事、我等が程の
子なご云ひ出づべき事にあらず、かゝる事はえびす町女マチメなごこそ
いへ。あさましう心憂き事をいひ出で、人の御胸を焼き焦かし、人
の歎きを（我身）負ふよき事なり、（下思）こやとて、いごはしたなく言いの
ゝしりければ、（右馬助）あまへて出でにけり。

釋 「陪從」とは、禁中に管弦の催しなどあるをり、その事に従ふ地下の樂人を稱す加

階の事は、日本紀略に十一月十一日前の帥入京の由密告したる功によりて、孝義
は従五位上に、平倫範といふもの、又従五位下に叙せられたるよし見えたり、おほ
けなくつれなくもわるかなとは身の程に似合はず、心強く薄情にある事上の意
「あまへては過を謝する意なり。」

評 孝義の密告は、公義より云へば勿論正常なれど、普通の人情にては忍びざる行
爲とやいはまし、伊周公の入京は、法を蔑にしたる罪はあれども、又情實の憐むべ
きものあればなり、その父親信が我が子の加階を祝せずして、甚く叱責したるは、
能く人情を得たるものといふべし、されども公義と私情と理窟と情實と、その輕
重の決言ひ難きは、その現場にあるもの、常なり、當時の人々も、大方この伊周公
の處置を見て、又判斷に迷へりしが如し。

世の人、この殿の御有様、（チ）見よあるは、（此）惡しうし給へれば、（カ）
（罪）セラル、（モ）こゝわりなりといふ人あり。

評 此は一途に伊周公の罪案のみを見て、その情を察せざる見なり。

又すこし物の心知りたる心ばへあるは、彼の御身にておはしたる
惡しからず、母（母）の死ぬべきが、我を見て、（サ）死なん、（ク）寢ても
さめてもいはんを、（爾）給ヒ、（ト）身は、（タ）いたづらになるともなご思

す(ニヨリテ)こそは(カク)上リ(タル)ニ(テ)あらめ哀なる

評 此は伊周公の境遇に同感して、その情實のあはれむべきをいへるあり。

(帥殿ニ)かのもこの播磨も、今は過ぎ給ひぬらんかし(陸家卿)中納言こそお

はせずなりにけれ。猶魂(タマシ)はおはする君ぞかしなごぞ聞えける。母(母)

北の方、哀にかなしき事を思しつゝ、今はかぎりになり給ひにけり。

哀に悲し(云)こも世の常なる御有様(ご)もなり。年頃の御念誦いた

づらになりぬべき事を、清昭阿闍梨(ア)くち惜しき事におもひ(き)こゆ、

二位(成忠卿)の新發意(シ)は、唯夜晝(ヨ)御祈(イ)ごもを死ぬばかりしえて、猶懲りずま

に、さるべき法(ホ)ごもをなん行ひける。東宮(三條院)より(ご)淑景舎(ス)に哀にいか

に、(ご)ある御消息(ミ)絶えず(ア)、(ア)いみじう(く)ち惜しう(淑景舎ノ君)こ

ほこりにせしものを(今)いかに物をばすらん(ご)。東宮(ご)ゆかしう

思ひきこえさせ給ふ。東宮より如何なる御消息かありけん淑景舎

より聞こえさせ給ふ。(御歌)

秋ぎりのたえまゝを見渡せば、たびにたゞよふ人ぞ悲しき。遙かなる御有様を思しやらせ給ひて、中宮(ノ)ヨ(マ)セ(タ)マ(ハ)と(ご)ひ(ご)り(ご)ち給ひけり。

評 「魂おはする君」とは隆家殿の事にのぞみて、毅然たる氣象あるをいふなり。此の

卿、一度の過ちは過ながら、晩年刀夷の筑紫に來寇せしとき、大宰の帥にてありし

が、忽ちに撃ち退けて、幸に國辱をとらざりしも、實に毅然たる日本魂のあればな

りけり。この事大鏡、小右記などに見えたり。猶此の卿の事跡は余さきに皇典講究

所講演にのせたる文あり。世の常なりとは、一通りと譯すべし。哀に悲しなど口に

云はんは通例の事にて、此の悲さは一通りの事にあらずとの意なり。年ごろの御

念誦云々とは、年來佛道に歸依して、極樂往生を祈り、讀經しありしかひもなく、今

かく子を懐ふ闇に執着しては成佛もありがたくや。されば、年來の讀經なども、い

たづらごとにならんと残念なることに思ふとなり。いみじう、くち惜しうはこり

かに云々とは、東宮のおぼしめす御心をかけるなり。まづはこりかといふは、淑景

舎の君の元氣よくおはせしをいふ。元來性質の氣勢よかりし人なりしに、残念な

ことよ、今は如何に心配してあるならん。様子を知りたいと東宮の思ひ申させ給

ふとの意あり。本文詞のつゝさまぎらはしげれば、注意し見るべし。秋ぎりの歌、萬代集に出でたり。下の句うきたる雲ぞわはれなりける」とわあ雲のなみの歌も續古今集にあり。

〔師懸〕やうく筑紫ぢかにおはしたれば、國々の驛々使のまうけごもいご眞心に泣くくごいふばかりに仕うまつりわたす。今は筑紫におはしまし着きたるに、そのをりの〔天幸〕大貳は有國朝臣なり。かくごきよて御まうけいみじう仕うまつる。あはれ故殿〔道隆公〕の御心の、有國を罪もなく怠ることなかりしに、あさましく無官にしなさせ給へりしこそ、よに心うくいみじご思ひしかご。〔今思へ〕ご有國が耻は耻ぢかはしにもあらざりけり。〔有國〕哀に泰く、思ひかけぬ方にも越えおはしましたるかな。公の御掟よりは、さしまして仕うまつらんごすなご云ひつゞけ、萬に仕うまつるを、〔師懸〕ご人つでに聞き給ふもいご耻づかしう、なべて世の中さへ憂く

おぼさる。〔有國〕御消息、我が子の良成して申させたり。〔有國〕文ご思ひかけぬ方におはしましたるに、京の事もおぼつかなくなきながら、参り候ふべきに、九國の守にて候ふ身なれば、さすがに思ひのまゝにえまかりありかぬるに、なん、今まで〔有國〕聞こえぬ。何事も唯ご仰せごこになん随ひまつるべき。世の中に命長く候こひけるは我が殿の御末に仕ふまつるべきごなん思ひ給ふる。ごて、さまゝの物ごも、櫃ごもに數知らず参らせたれご。〔師懸〕これにつけてもすゞろはしく思されて、聞きすくさせ給ふ。そのまゝに唯御齋にてすぐさせ給ふ。

釋 〔有國朝臣〕は伊周公の祖父兼家公の家司にて、惟仲と、もに兼家公の左右の眼といはれし人なること、此の物語「さまゝの喜び」の巻に見ゆ。此の人兼家公の次男道兼に心よせたりきとて、伊周公の父道隆〔師懸〕兼家公ノ長男に悪まれたりしなり。然るに、その道隆公の子たる帥殿の、今の身にて有國にあはんは、面伏せなるべし。この意を汲みて、本文を見よ、わはれ故殿の云々とは、上にいへることにて、大方

推量りぬべけれど、なほ委しくせん、古事談第二いはく、大入道殿家被議以關白可讓何子哉之由有國中曰、町尻殿兼可宣惟仲申云、任次第中、關白家可宜乎、國平申曰、何捨兄用弟哉云々、就兩人之評遂被讓中、關白云々、我以長嫡當此任是理運之事也、何足真悅、只以可對有國之怨爲悅耳云々、仍無幾程、及除名父子被奪官職云々、とあるにて察すべし、すゝろはしとは、心も心ならぬ意なり、御齋は精進齋のことより出で、こゝは唯慎みてある由をいふが、此の外は本文に細注せし詞にて了解せらるべし。

評 文章も事實も格別に評すべき點なし、唯々大貳の有國朝臣が故殿道隆公に對する舊怨をわすれて、其子伊周公を厚遇するところ事實とは云ひながら、一層伊周公をして心苦しき感起さしむる力ありて、いとめでたし。

かく云ふ程に、神無月の二十日あまりの程に、京には貴子北の方失せ給ひぬ、入々哀にかなしう思し惑はせ給ふ、二位成忠卿の命長き哀に見えたり。されどそれはむげに老いはて、容易くも動かねば、唯明順、信順なごいふ人々、よろづに仕うまつれり。後の御事ごも例の様にはあらで、櫻本といふ處にてぞ、さるべき屋造りて納めたてまつりけ

る。哀に悲しこ云もおろかなり。

釋 「二位の命長き云々」二位とは、北の方貴子の父成忠卿の事にて、我が女におくれて悲みを見ることの哀なるを云ふ也、むげに老いてとは、成忠卿此の時七十四歳なりしがゆゑにかくいふなり、例のさまにはあらでといふは、當時の制一般には火葬なるを、是れはその例ならずとなり、さるべき屋造りは火葬ならねば、その死屍を納むべき靈屋の事なり。

但馬ナル陸家卿ノ配所には夜を晝にて人參り母北ノ方ノ失セ給ヒタル由告

きたれば、卿ニ泣くく御衣なご染めさせ給ふ、筑紫にも人來りしかど、いかでかは、ごみに參りつくべきにもあらず、後々の事ごも、皆さるべくせさせ給ふ、筑紫の道は、今十餘日といふにぞ使ノき參りつきたりける、サレバ帥殿事ノ由聞キ給ヒテ心ノ中ニあはれ、さればよ、能々こそ見え奉りにけれと、今ぞ思されける。

釋 「泣くく御衣なご染めさせ給ふ」とは、喪服を染めさせて忌服の用意させ給ふよしなり、よくこそ見え奉り云々は、伊周公母北の方の逝去をき、給ひて悲し

御服ミツクなごき奉ること、

そのをりにきてましものを藤衣やがてそれこそわかれなり
けれ。

ごぞごりこち給ひける。

釋 「服は喪服のことなり、そのをりにの歌は、玉葉和歌集雜の部四に見えたり。麻衣も喪服なり。」

總評 「浦々のわかれの巻は、是れにて完了したるにあらねど、此の巻の記事の主とする伊周公及び隆家卿の配流せられたる事蹟は、大やう此の處に盡くるを以て、暫くこの評釋の筆を擱かんとす。そゞゞ讀者は以上の事蹟をよみて、如何なる事どか感したる、おのれは伊周公の半生が、只々に政權爭奪の歴史たりしを知るのみなり、おもふに此の政權爭奪の一事は、彼の公の性質の然からしめたるものあるべけれども、文子兄弟叔姪の偏頗不公平なる愛憎の處置も、之が近因をなりしたると明瞭なり。此の偏頗不公平なる愛憎は、又政權爭奪の一事に由來する

處多かりしが如し。今この評釋の筆を擱かんとするに臨み、是より以前の歴史に溯りて、藤原氏の一族が政權を爭奪せし顛末を略叙して、以上の事蹟の總評を試むべし。

案するに藤原氏が累世專横を逞くし、引きて政權爭奪の種子を播布せし原因は、遠くその祖不比等公がその女を皇室に納れて、皇妃女御となしたる時代に濫觴せしが如し。即ち、不比等公は、四朝の元老を以て、その女を文武及び聖武の二帝に納れ奉り、後に冬嗣公はその女を仁明帝にすゝめ奉りて、文德帝を生ませ奉り、冬嗣公の子良房は、嵯峨帝の皇女を娶りて、その女を文德帝に納參らせ、兄を超越して累進の太政大臣の榮を承くるに至れり、これ藤原氏が朝に立ちて權勢を得るに至りし起因なりけり。

然れども當時は藤原氏の勢力も尚多くは裏面にのみ伏在して、いまた表面にあらはれず、且つまた、不比等、冬嗣、良房等の諸公は、いづれも一世の英傑にして、銳意してよく内外の治を企圖せしかば、さまで著るき弊害も見えざりき。然るに、基臣忠平實賴等の諸公を経て、帥輔公の子伊尹、兼家等の諸公相尋で政を執るに及び、とは、藤原は只一門の榮華若くは、一身の名利を貪るに汲々として、天下の公道をも打忘れ、國家の安危、社稷の休戚は聊かも顧ることなく、専らその女を皇室にすゝめて寵榮を極めんとし、遂には父子相猜み、兄弟相闘き、叔姪相争ひ、互に援引結

托して、争奪の機を熟成せり。されば藤原氏が政權争奪の原因を醸し、は遠くその祖先の頃にありしかども、近くはまた兼通兼家二公の互に官職を争ひしを以て始めとすべし。今その故を尋ねるに、初め兼通公故ありて仕途淹滞し、弟兼家公は、大納言兼近衛大將に至りしも、尙ほ僅かに参議たりしかば、常に不平を懷きて兼家公を忌むこと甚たしかりき。然るにたま／＼その頃の攝政なる兄の伊尹公病むことありき、兼通公即ち此の機に乗じて、政權をおのれに収攬せんと欲し、妹安子の君(村上帝ノ后)今上圓融帝の御母なるにより、御在世の砌請うて、今後攝關の職にして缺くことあらば、長幼の序に隨ひて相及ばすべしと、いふ意の御染筆を得て、天皇に奉りぬ。天皇諸舅において、從來この公を最も疎くせさせ給ひしかども、母后の還命もだし難く、遂に兼通公を進めて太政大臣となし、萬機を關白せしめ給へり。是より先兼家公の長女超子、冷泉帝の女御となりしが、此の頃又次女詮子を圓融帝に進めんとせしを、兼通公我が女の既に皇后たるを以て、之れを沮みしかば、是れより兄弟の軋轢いよ／＼激烈となりたり。さる程に兼通公薨じ、頼忠公その後を承けて關白となりしが、花山帝位を退き、一條帝立ち給ふに及び、兼家公遂に外祖を以て攝政となり、尋で關白太政大臣となりぬ。兼家公晩年豪華奢侈を極め、邸宅の經營總て清涼殿に擬したり。當時藤原氏の専恣察すべし。此の公薨するに及びて、長子道隆公代りて攝政となりぬ。次子道兼公は、嘗て花山帝を

勝ひて出家せさせ奉りたる人なるが、彼の事元來父公の命に基くを以て、心ひそかに父に代りて關白たらんものは、おのれなるべしとおもひしに、兄道隆公職を襲ぐに及びて、意中甚た不平なり。父公の喪に居て、威容なく、客を集めて遊戯を事とせり。この故に道隆公自然に道兼公と善からず、またその弟道長公とも善からざりき。此に於いて道隆公は、常におのれが計圖を翼賛するものを求めて相結托し、同時にその子伊周公をおげて、早く政務に慣れしめて、以ておのが地位を鞏固ならしめんと努めたりき。かくて遂に伊周公等が、叔姪の間に政權を争奪する起因全くなりぬ。

されば伊周公が政權をおのが手に收めんと計りしは、單に父祖が播布せし種子の結果を、こゝに收穫せんとしたるなり。父道隆公の、平素この公を愛し、分に起えて高位を得せしめんとしたるは、一におのが地位を鞏固にせんが爲めなりしも、たま／＼以て彼の叔姪の猜忌憎惡を挑發し、この公の慢心を增長せしめしに止まり、終に伊周公をして、一旦得たる官位は、如何なる事をなしても、再び回收せんと希望するに至らしめたるなり。然れども伊周公は、此の時年齢なほ若かければ、深謀遠慮に乏しきは、さることながら、進みて大に畫策を施さんともせず、退きて時機を見ることを得せず、只女々しき祈禱三昧に萬一を僥倖せんとなし、は、到底失敗の非運を免かれ得ざる程の人物といふべきなり。實に公は、管に其の所

業の女々しかりしのみならず、その性質に於ても、既に多少女々しき點ありき。例へばその結果の如何を思はずして、果敢なき事にも或は悶々として苦惱し、或は奮躍して喜悅せる事ありし如きは、分明にその女々しき性質なりしを證するにわらずや。故に此の公を以て、道長公に對比せんか、かゝる逆境に立ちて事を處する伎倆は、所詮彼の公に及ばざりし事論なし。隆家卿の事に關しては、當時なほ少壯一時の血氣に驅られて、分明をかきたりといへば充分なり。之を要するに、伊周公の舉動は、遠く父祖より相傳せる政權爭奪の結果と、近く父公が偏頗不公平に愛憎せる結果と、相連結して爲さしめたるものなり。東三條院を呪咀し奉り、花山上皇を射奉りしが如きは、極めて重大なる罪過にして、臣下たるもの、道にあらざるは、いふまでもなし。故に彼等の配流せらるゝに至りしも、當然の應報としてその刑尙輕しとす。さはいへ、當時此の勅命を奉行して彼の罪過を裁判し若しくは執行せしもの、必ずしも非議するところなき人々にはらず。彼は勝者たり是は敗者たりし故をもて、その運命を實にするに至りしは、公等の爲めに憐むべく、世の爲めには嘆すべき事といふべし。

文章措辭の如何につきては、挿評において屢々之を記したれば、今はた重ねて記載せず。讀者幸に此の評釋によりて、榮花物語の如何なるものなるかを知り、浦々の別かれの趣致を解し、併せて藤原氏の事歴の一斑を會得するを得ば幸なり。

榮花物語

(花山たづぬる中納言)

小 杉 楯 郵

此一篇は、榮花物語第二帖について、花山院帝の御寵妃、帳子と申奉るが、御懷妊中に、みまかられしかば、帝その御歎きにしづませ給ふあまりに、一夕ひそかに内裏をのがれ出給ひて、花山寺にいたらせ給ひ、御落飾入道し給ふことをかきつづけたり。但しその以前の年月に涉りて、種々の記事あまたあれど、こゝにはこの御一事をのみ摘み出ぬ。

蓋し帝の御品行の事は、大鏡にも品評し奉れるが如く、たゞならざりし御本性なりしも、其實は藤氏のたれかれ、御意を迎へて、かくおとしいれ奉りし御事ども、今ひそかに伺ひ奉りて、悲憤に禁へざるを、榮花の文面のみにては、單に御なげきによりて、一途の寂慮に出で給ふがごとく、幸に大鏡及び古事談の記事に参照して、當時藤氏の専横の實況を憶ひ起すに餘りあり。されば大鏡古事談にてらして評する處もいと多し。さて題號を、かくなづけたる花山は、その花山寺をさし、中納言は、帝の外戚のをちにあたる義懷中納言が、その御ゆくへを、とめ奉る事をもて、かく題名としつるなり。またこの題號、普通本にはただに花山とのみあれど、古本みな花山たづぬる中納言とあるをもて、余はその古き方に従ひて、かくなづ

かくて八月になりぬれば、廿七日御讓位さてのゝしる。其日になりぬれば、帝はおろさせ給ひぬ。春宮は位につかせ給ひぬ。東宮には、梅壺の若宮あさせ給ひぬ。いへばおろかにてめでたし、世はかうこそは見えきこえたり。おりの帝は、堀川の院にぞおはしましける。

かくてとは、上文をうけて、次の文を起す通語なり、かく有ての意なれど、今はその上文の事は皆省きて、こゝに八月とある以下をいはんとす。さて八月は、扶桑略記に永觀二年八月廿七日、天皇春秋二十六、禪位於皇太子師貞親王、同日懷仁親王、立皇太子とあるに即ちこの文よく符へり。日本紀略も、大かた同文意にして、末文に自閑院、第移御堀川院、受禪即日入内裡、先皇留御堀川院とあるなど、いよゝこの文明かにさどらる。〇のゝしるとは、いひさわぐ意、今なほ同じ。〇みかぜはおろさせ給ひぬ、とある帝は、圓融院の御事なり。〇位に即せ給ふ春宮は、即ち花山院と後に稱し奉る。御諱師貞天皇なり、冷泉院の皇子にまして、圓融院の甥君にあたらせ給ふ、御年十七なり。〇東宮には、梅壺の御宮とある、こゝは省筆法にして、今日即位し給ふ帝の東宮にはの意、さて其立ち給ふ東宮懷仁親王、後に一條院帝と申奉

る。即ち圓融院の皇子御年五なり、又梅壺の若宮といへるも省筆にて、梅壺の女御の御腹の若宮の意なり、さて其梅壺の女御は詮子と申して、圓融院の女御、後に皇后と稱し奉りて、大入道殿兼家公の女なり。〇いへばおろかにてめでたし、とは不調の口のはにかけていはんには、倉忽にきこゆべく、その結構のおびたし、との意にして、いふにや及ぶべきとのこゝろなり。〇世はかうこそは、さて世の中のうちつりかはりは、かくこそあれ、其御代々々にあはせて、盛衰のいちじるさまを感じたる言、また見えきこえたりとは、其盛んなる方ど、さびしくなりゆく方を評して、目の前に見、目の前に人々いひかはす意なり、聞えきこゆるは、人に對していひきこえ、人よりも吾に聞入る事をいふ通語、またこゝのてには、こそはとある、其はをうけて、こそその結びなし、多く例なき事なり。〇おりの帝とは、いはゆる太上天皇、また仙洞御所なと稱し奉る意にて、其御位を下り居させ給ふ、前のみかぜをさし奉る御名なり。

今の御かごの御年なごも、おこなびさせ給ひ、御心おきても、いみじういろにおはしましで、いつしかこさへき人々の御むすめごもを、けしきだちの給はず、(中略)

〇今の御かごは、即ち花山帝にまして、御年おとなびさせとは、十七歳にて即位し

給ひ、追すがひて年月を経給ふ意、おとまびのびは形容詞にて、ふるとも活くいはゆる追すがひて、長人ふり給ふとの意味なり、あなから幼少の智慧附のみならず物事に熟練する心ばへをかくいふなり。○御心おきては、御見識なといふはどの意、いみじうは甚しきこと、いろにとは、物ごとにすぎ好ませ給ひ、又その御はどのひの體裁よく、取なし給ふ御ありさまをいふ。そもく色好みといふ語はたゞに男女の情欲のふかきに使ふは末なり、其みちくに、すぎこのひ麻をいひし事、いまでもすぎ者といひ、すぎ屋なといふは高尚なるわざ、その高尚のはとよき建築をいふにても明かなり、もとより男女の情欲にあつきをいふも、其一なりしが、つひに色情に限れる名の如くなりしは、男女の間の情欲は、最も至り極まるものなるが故に、いろといふ語も、すぎといふ語も、なみ情欲につきしなるべし、されど色の字義たる、男女の情に必ずかきらざるは、花色物色など使用するを思ふべし、そのあぢはひのいひ得かぬるばかりの、其物に似合はしき意味あるをいふ語と心得て可ならん。余つねにこのいろの一語を、大鏡に見えたる數事項にこめて解釋せり。さて大鏡五の卷に、此花山院は、風流者にこそおはしましけれ、御所つくらせ給へりし様なとよ寝殿對わたとのなと造りあひ、檜皮ふきはする事も、此院のしいでさせ給へり。昔は別々にて、合ひに樋かけてぞ侍りし、内裏は、今にさてこそは侍るめれ、御車舎りには、板敷を奥は高く、はしはさがりて、大きなる妻戸をさせ

せ給へるゆゑは、御車の裝束を、さながらたてさせ給ひて、おのづからとみの事のをりに、取あへず戸おし開かば、からくとも人の手ふれぬさきに、さし出されんが料ど、おもしろく思食たる事ぞかし、御調度などもなとのけうらさこそ、えもいはず侍りけれ。六宮帝の皇子のたえいり給へりし、御誦經にせられたりし御硯の箱、見給へき、かいふに蓬萊山、手長足長など、こがねしてまかせ給へりしこそ、かばかりの箱のうるしつき、蒔繪のさま、口置かれたりしやうなとのいとめでたかりしなり。又木だち造らせ給ふをりは、櫻の花は優なるに、枝さしの強くして、幹のやうなとにもくし、梢ばかりを見るなんをかしきとて、中門より外に植させ給へる、何よりいみじく思し、寄りたりと、人は感じ申しき。又罌粟のたねを築地の上にかかせ給へりければ、思ひかけず、四方に色々に唐錦をひきかけたるやうに咲たりし、などを見給ひしは、いかにめでたく侍りしかは、とあるなとに思ひ合せらる。○この文に、おのづからとみの事とは、自然俄に事あらん時の意。○からは、車が板敷をはしる音をいふなり。○けうらは、綺羅の字音にして、俗にはなぐしくとか、立派なといふ意。○御誦經とは、僧侶をわづめて、御病氣平癒をいのらせ給はん爲に、經を讀誦させしめ給ふ、その御布施をいふ。これも省筆にして、御誦經の御會釋にの意。○かいふとは、海賦の字音にて、海底の文様をちらしがきにせるものなり。蓬萊山とは、蓬萊の蒔繪をせしもの、又手長あしながなといふ國ありて、長臂國

は手長し、長脚國は足長しとかける山海經、或は荒海の御障子といふもの禁中におかせ給ふ其繪に同一の御意匠をまさるに調しさせ給ひ。○口置かれとは置口といふもの也。今の手匣にもこの製造りていはゆる銀ぶち錫ぶちなどいひて、ふたと身と、共におはせ口に、銀錫などをかぶせかけたるものをいふなり。以下の文は、明かにおぼゆれば解釋に及ばず。

又其續きにあて御繪をそばしたりしさまに興あり、さは走り車の輪には薄墨にぬらせ給ひて、大ききのほごにやなど、しるしには墨をにははせ給へりし、實にかくこそかくべかりけれ、餘に走る車は、いつかは黒さのほごや見え侍る。又たかなの皮を男のおよびごとにいれて、めかうして、ちごをおおせば、顔わかめてゆいしうおぢたるかた、またとく人たよりなしの家の作法など、かゝせ給へりしが、いづれもくさぞありけんとのみ、あさましうこそ侍らひしか、とも見えたり、はじめには、最も高尚なりし御物さぎの御意匠のかたはしをかゝげ、こゝには、その御繪にたくみにわたらせ給ひし事をいふも、とより、御文筆によく長せさせ給ひ、御歌口も御たくみにて、今ものこれる宸翰のかたはしを拜観して、上代様いとよく遊ばされたるを想ひやり奉りても、いとまかしこ御物ごと、にすぎこのませ給ひし御本性、いと明かなりや。○あて御繪とは、一の御戲の御わざにして、かのなぞくの如くに、判定すべき筆意をいふなり。實に此はしり車の圖、かゝせ給ひし

といふ御意匠のたゞならざる、或は奉るにも餘りあり。○目かううしてとは、下臉を引き下ぐることにて、俗間に今も赤目をむくなどいふに同じ意。○とく人とは、有徳人、いはゆる富貴にくらすをいふ。○たよりなしの家とは、貧家不便の家なり。さて富貴の人のありさま、貧家のうちの現象など、よくも見とめ給ふが如くに、かゝせ給ふ其御繪、いづれもくさやうにあるべく思はれて、拜見せし人、あさましくピツクリ驚き入たり。どの事なり、あさましとは、甚だ驚く意味にいふ語なり。凡そこれらの數項は、みないろにおはしまして、ある語に含有せし、よく玩味あらまほし。○本文のつゞきに、さべき人々の御むすめどもを、けしきだらの給はずとある、さべきは、然るべく似合ひころなる上等臣下の人々、誰もくへ其女どもを、妃嬪に供へよと、とりくよき氣色はのめかして、御うながしあるとの意也。さればこの次の文に、女御に立給ふ諸家の女多くまゐり、又即位の禮を行ひ給ふこと、大嘗や御禊やなどの事、しるせれども、此あたりいさゝか中略して要あることどもをかゝげんとす。

一條の大納言は、母もおはせぬひめ君を、わが御ふところにておふしたて奉り給へれば、萬いこつゝまじき世の御心もちあなれば、つゝまじうおぼしなから、今の御かごの御をち義懷中納言は、かの一

條大納言のおほいきみを北の方にて物し給ひければ、それをたよりにて、つねに中納言をせめさせ給ふなりけり。さてやうやうおもほしたつべし、なほ式部卿の宮の女御ぞ、時めかせ給ふ。大殿オホイの女御はじめよりなのめにて、なか／＼様よくおはします、一月に四夜五夜の御このるは、たえず同じ様なり。かゝる程に一條の大納言の御姫君、したてゝ参らせ給ふ。この姫君は、小野宮のおごご、清慎公の御太郎敦敏トクシ少將の御むすめの腹に、男ぎみ女君とおはしけるなり。手かきの佐理サツリの兵部卿の御いもうこの君の御腹なりけり。父の殿は、九條殿の九郎君爲光ツヨミツこきこゆ、いづれも劣り勝りこきこゆへきにもあらず、誰かは其けちめのこよなかりける、いとおごろ／＼しきまでにて、参らせ給へり。弘徽殿ニギハヤヒにすませ給ふ。すべてこれはもろもろにまさりて、いみじう時めき給へば、大納言いみじう嬉しうおぼして、いごご御祈禱をせさせ給ふ。又いかにこもおほしなげくべし。

いご餘りさまあしき御おぼえにて、あまたの月日も過もていけば、かたへの御方々、いごさまあしう、かゝる事は今も昔も、さらにきこえぬ事なり、久しからぬものなりなど、聞にく／＼のろ／＼しき事ごもおほかり。

○一條の大納言とは、爲光の事をさす。一條院に住しが故の通稱なり。拾芥抄に、一條院一條南大宮東二町謙徳公家又爲法住持寺大臣爲光公家也と見ゆ。次下に其傳委し。母もおほせぬ姫君は、祇子にして、即ち花山院の女御に入内する女なり。こゝに母とさすは、少將敦敏の女なり。其腹に、祇子は生れたれど、その先妻若く身まかりしが故に、父のふところにて養育するよしにいへり。○萬いどつゝまじき世とは、萬事に憶しがちにて、はか／＼しからぬ事。○義懐中納言は、本文にいふが如く大納言爲光のおほいきみ、即ち大君の意にて長女を妻としたれば、其便りにつけ、花山院の御をち義懐に周旋をさせしめ給ふ。故に世間萬事つゝしめる爲光もやう／＼女を入内させんと思ひ立むとするなり。○式部卿宮の女御とは、式部卿爲平親王の女、婉子の御事。さて爲平親王は、村上帝第四の皇子にて、一品式部卿の宮とはいふ、圓融院の兄君にわたらせらる。○時めかせ給ふとは、時得たりが故の

意。○大殿の女御とある大殿は、小野宮實頼公の二男、關白頼忠公にして、其女禊子の事なり。○はじめよりなぬめに、なかくさまよくおはします云々とある、このなぬめは、なぬめならずの略言にして、此前後の慣習語なり、よく心をつくべし、さるはおぼろげならずを略しておぼろげとのみいひ、大方ならずを略しておぼろげかたといへるとみな同格なり、此物語の中この詞いと多し、既くも土佐日記廿一日の條におぼろげの願によりてとある詞、おぼろげならぬ願によりてと解かざれば、其意を得ず、又源氏の桐壺に、一宮と源氏君とを比較して、疑ひなき儲の君と、世にもてかしづき聞ゆれど、一宮の御にはひには並び給ふべくもあらざりければ、おほかたのやんごとなき御思ひにて、此君をば秘物に、おもほしかしづき給ふ事限りなし、御事このおほかたも略言にて、大方ならぬやんごとなき御思にて、若宮を秘藏し給ふ事限りなしとなり、舊説は、諸先遣この大かたをナミ大テイと見て、一宮の御事にかけて説くは、淺はかなりとす、猶古くも萬葉集の家持卿の歌に、おぼろかに心盡して思ふらん、其子なれやもますらをや、云々とよめる、そもくおぼろかに心盡してといふ理は、あるべき事は、こまかに心を盡すといふべき理ならずや、さればこれもおぼろかならずの意を、かくいひしなり、此類他にもかならずあらむ、一わたり無かしおくなり。○一條の大納言の御姫君、したて、參らせ給ふ云々、これ即ち上にいふ所の低子にして、この本文に、其傳くは

く見ゆれば、説くに及ばず。○いづれも劣り勝るときこゆべきにもあらず、誰かは其けぢめのこよなかりける。とは其人が、素性における、勝劣あるべからず、誰か其系統に差別すべきや、いづれもこの上なかりける、との意なり、されば繁昌にきは、しう、仰山らしくして、參内させ給へりとなり。○弘徽殿に住せ給ふとは、なみくの人ならぬ御扱ひとし給ふなり、弘徽殿の女御は、みな全盛なる方といひて、其人の居らるゝ所なり。○もろくくにまさりてとは、すべての御方々もろくくにまさりて、時めき給ふからに、父大納言は、嬉しさの餘り、なほ此うへにもと祈願意らす。○又いかにもおぼし歎くべしとは、この全盛の首尾いかゝあらん、若し此後御寵愛のおどろへなば、いかにせんと歎かざるにもあらず、との意味なり。○いと餘りにさまわしき御おぼえにてとは、結句御寵愛の餘り、何事も重りかならず、却りてかろくしきやうなる、御心安だてなぞ、俗間にいひしらがふが如きは、この事も、まゝありて側らいたき有さま、いはゆる傍若無人の御ふるまひにて、過行けば、先登の方に、不面目にして、大に不平をならさるゝ餘りに、古今ためしなさいひ、嫉みつゝ、おどる事久しからず、といふ例をいひしらがひて、聞ぐるしきまでに、のろふやうなる悪口多くあり、となり、是れ人情の然らしむる所にして、いにしへ今めづらしからぬ通弊なり、さてこゝに不審しきは、この御方々の入内の前後なり、まづこの本文は、ことし永觀三年にして、某月に低子まゐらせたる如くか

けるを、紀略には、悌子の掖庭に入るを、永觀二年十月十八日とし、大將朝光の女、姚子の入るを同年十二月五日とし、小野宮頼忠の女、諶子の入内を同年十二月廿五日とし、一品式部卿爲平親王御女、婉子は、寛和元年十二月五日とす。この寛和元年は、永觀三年改元また一代要記にも、悌子の入内を永觀二年十月十八日とする事、紀略に同じ。こはかならず、この物語をかきまとめしをりの失誤なるべくおぼゆれど、いかにせん、既くこの物語の本文となせるを以て、しばらく本文に従ひて訂さず、讀む人の意を體すべし。なほ次下にもいふ

かゝる程に、唯ならずならせ給ひにけり。いさみじうはかなき御くだ物も、安くきこしめさず、只まづく弘徽殿にこのみたまはすれば、御おぼえめでたけれど、大納言もかたはら痛きまで思しけり。三月にて奏して、出給はんとするに、萬にきこめ聞え給ひて、五月ばかりにてぞ出させ給ふ。萬御慎みも、御さこにて心安くおぼすに、今まで出させ給はざりつるに、かく出させ給へば、手をわかちて、萬にせさせ給ふ。始は御つはりごとて、物もきこしめさざりけるに、月頃

すぐれど、同じ様に露ものきこしめさで、いみじう瘦細らせ給ふ。いみきわざに思して、萬にまごひしのことす事なく、祈らせ給ふに、橘一もきこしめしては、御身にもきこめず、あさましうあはれに心細氣にのみ、見えさせ給へば、父殿の胸ふたがりて、安からずうち歎きつゝ、あつかひ聞え給ふ。内よりも修法あまたせさせ給ふ。内藏づかさより、萬の物をもて運はせ給ふ。よる夜中わかぬ御使の繁さに、殿上人、藏人も、餘りにわびにたり。しばしも滞るをば、御簡を削らせ給ふ。御かしこまりなど、様々おごろくしければ、さても六位の藏人なごは、いさよしや、さるべき殿原の君たちなどは、いさ堪へ難き事に思ふべし。はかなき御菓なども、かしこにはつゆかひなうきこしめさねど、まづくご奉らせ給ふを、大納言いさよづかずや、なごうち歎きつゝ、過し給ふほごに、せめておぼつかなく、戀しく思ひきこえ給ひて、たゞ宵のほご、このみのたまはすれど、え思したゝぬに、女御

もさすがに、おぼつかないに思ひ聞えさせ給へれば、大納言殿、たゞ一日二日とおぼし立て、参らせ奉り給ふ。弘徽殿に参らせ給ふこと、御しつらひなごいふ事を、かたへの御方々の口よからぬ人々、ゆゑ、しういまいまじきことなきことゆ。

○たゞならずとは、祇子の御懐妊をいふ。○いみじうはかなき御くだ物も安きこしめさず、只まづ、弘徽殿にどのみのはすとは、帝の御心中を察したる筆意にして、此は、祇子が、只ならぬ御病なるを心配し給ひて、何をがな心にかなへんどの思召より、ツイチョツとしたる菜をだに、御自ら御氣安くめしあがり給はず、まづ、祇子に、どのたまふとなり。○御おぼえめでたけれど、大納言云々とは、父大納言の心底には、其御寵遇はいとかしこけれど、萬事につけて、いはゆる有がたメイワクスルは、迄にまで存じ奉るとなり。○三月にて奏して、出給はんとするとは、すべて妊娠し給ふ妃嬪は、三月めより里邸にさがりて、その御産の御用意をもものする御例なり。○五月ばかりにてぞ、出させ給ふとは、その三月の御さどおりを、萬般おしとせめさせ給ひて、五月まで召置き給ひしかど、最早今は、爲かたなしと、出さしめ給ふとなり。これ御寵愛の餘りなり。○御つゝし、しみも御さどにて

心安く云々は、さてその御産につきて、萬事御身の御つゝし、みを始めて御いのりや何やと、御さど即ち父大納言の住居の家にて、落つき心安くものせんとなり。○今まで出させ給はざりつるに、かく出させ給て云々は、大納言の思はくをいふ筆意にして、三月めに下宿すべきを、かやうに留めさせ給ひ、五月めの御里おりなるが故に、萬事手おくれともいはんばかりなれば、其用意の事をも、それ、一時に手をわかちてさするとなり。○御つはりとは、妊婦にみなある所の兆なり、倭名鈔に、擇食利豆波と見え、また字鏡に、陳孕始兆也豆波利などある、このころなり。○月頃すぐれと、同じやうに、つゆ物さこしめさどとは、始めこそその御つはりどてみなある事なるを、二月三月も、そのほを過ぬれど、なほ始の如く、つゆばかりも物めさど云々となり。○いみじきわざに思して、萬に迷ひしのこと事なく云々は、いみじきとは、こゝにては、いま、しき、ゆゑ、しきなどいふ同語にて、たゞ事ならずと驚きて、諸般に狼狽しつゝ、それにもこれにも氣を配りて、祈禱なせさせすとなり。○橘は今も小柑子などいふものにて、妊婦は、橘類を好みくふもの也、その橘柑類、ひとつをだにめし給ひても、吐逆給ひて、御身の内にどいめすとなり。○あさましう、あはれに心細げにのみ云々、あさましは、甚く驚くばかりのこゝろ、さてかなしう、心細げに見うるまでになり給ふ、祇子を見とめたる父の眞情を察しいふなり。○ひねふたがるとは、其苦しさが一ツハイに胸裏にひろどりて、殆その胸裏を塞

く如くにおもふ意なり。○あつかひは、今もいふと同しく種々意をもちゐる體。○内よりも御修法、あまたせさせ給ふは、帝の宸慮より出て、内裏に於ても、諸山諸寺などの御いのり所々にて修せらるゝとなり。○内蔵寮より、諸色を運搬なさしめて、萬事のこる所なく、御手當あるなり。内蔵は天子の御物ををさめ、又供御の品々を調進さするつかさなり。○夜晝わかぬ御使に、殿上人、藏人も餘りにわびたりとは、此文の如く、追立々々その容體をきこしめさんが爲めなり、これも其情勢さもあるべき御なからひを思ひやり奉らるゝ。さて餘りに頻繁かる往復を、殿上人、藏人等も、わびしく思ふが故に、中には怠りし人もあるをば、逆鱗ましめて其簡を削除かせ、或は勅勘、恐れ入り、謹慎などいと事々しく仰せ渡さるゝ。さて簡を削らせ給ふとは、殿上の簡籍とて、昇殿する諸臣下の名を注せる簡あり、いはゆる出勤の時、其名ふだをかくるなり。それを削除くは、即ち出仕を止めらるゝ義なり。○六位の藏人は云々、さるべき殿原の君たち云々とは、まづ藏人の職掌は、常に殿上に侍りて、すべて御左右の機密にわたり、服御器物などを取扱ふなり。その五位は、名家中にて器量をえらまれて、補せらるゝが如く、然るべき若殿ばらなるが故に、頻繁の奔走、夜中にわたりては、どりどり堪へ難き困苦もあらん。六位は、地上より補する事なれば、もとより身輕になれたるが故に、さやうの御使も、しひてメイアクがましうはなからんと意、さてこの頃の言に、かந்தちめ、殿上人とつらねいふ、其殿上

人は、昇殿をゆるされたる、四位五位をさすはもとよりながら、多くは四位を殿上人といひ、五位は五位の何々といへるが如し、源氏物語も大かたこの定なり、心得おかるべし。○はかなき御菓も、かしてにはつゆかひなう云々は、低子此はどの御備にて、いさゝめの菓をすら、露ばかりもかひなきものと見なして、めし給はぬを帝は例の御苦慮の餘り、まづこれをだにとて、進せられ給ふなり、然るに地盤より其御容體を身にしめて、朝夕に看護し給ふ、父大納言の心には、何もめし給はぬ所へ、まづこれもあれもどしひてすゝめ給ふが如きは、結句イヤガラセをし給ふやうなり、なご過慮て、よづかぬ御ふるまひを歎き思ふとなり、よづかぬとは、世間の人情も知らぬ、人なみはづれといふが如き意味の詞なり。○せめて、おぼつかなく戀しく思ひ給ひて云々は、女御の里おりの後、帝の御心には、しきりに御不安心に禁へさせ給はず、つねに戀しくのみ思召れて、一夕たゞひとめなりとも参れよと御けしきあれど、父大納言は、いかでかどて思ひ立ざりしに、女御もさすが、つねに不安心に心ばそげにのみ思ひ煩らふ餘り、其みことのりを力めく様子に聞ゆるからに、今はいかにせんと、只一二日々らゐはとて、参内させ奉るとなり。○弘徽殿に云々は、帝はその参内せんと、の事を聞召て、いどうれしう思召ても、住給ひし御殿に入らせんとて、どりどりの御修補あるを、例の他の御方々、何かと悪口なぞし給ひつゝ、さきにも有し如く、のろくしくいましき事どもなご歎みそ

ぬいありさまおはかるべし。此あたりの情意みなさもあるべき事を盡せり。
かくて参らせ給へれば、あはれに嬉しう思召て、夜ひるやがておも
のにもつかせ給はで、入りふせ給へり。淺ましう物狂ほしごまで、内
わたりには申あへり。女御は参らせ給へりしをりにもあらず、かく
唯ならずならせ給ひて、後は、内におはしましをりも、こよなく細
らせ給へりしを、まいて此たびは、其人ごもつゆ見えさせ給はず、淺
ましうならせ給へり、いごされをかじうおぼえず、いみじう老めら
せ給ひて、只あへいにもあらぬ歎をのみせさせ給へば、上も泣み笑
ひみ、涙に沈ませ給へり。いみじうあはれに悲しき御事ごもなり。さ
て三日在て、出させ給ひなむごて、御迎の人、御車なごあれご、すべて
ゆるしきこえさせ給はで、今一夜々々ごごめ奉らせ給へるほど
に、七八日になりぬれば、御愼みもよそくにては、いごうしろめた
しごて、大納言いごまめやかに奏し給へば、なくく御暇ゆるさせ

給ひても、御手車ひき出で、まか、でさせ給ふまで、出居させたまへり。
大納言あはれにかたじけなうおぼされて、我御面目もめでたくて、
様々御涙もいでければ、ゆゑしくて忍びさせ給ふなかくわりな
く思されて、上れいのやうにもおはしまさぬを、女房なごも、いごほ
しうきこえさす。

○あはれに嬉しう云々、こは天晴といふ意味のあはれ也。晝夜おものにもつかせ
給はでとは、かの晝は大床子の御膳とて、御式あるなり。朝はあさがれひとて、これ
らみな禁中毎日御定例の御事なるを、それらをもうちすて給ひて、弘徽殿に入り
ふさせ給ふとなり。○物くるはしとは、内わたりの人々、喫驚て、こは御狂氣させ
給ひしにやど、ひそめくとなり、其物の爲に、心をあこがらすを物狂ひといふ。この
ものぐるひを活動せたる語なり。○女御は参らせ給へりしをりにもあらず云々、
低子は、はじめて入内し給ひし時のやうにもあらず、とまづ大體をいひおきて、さ
てかやうに唯ならぬ御身となりて後は、さいつ頃内裏に宮仕へし給ひし時に見
くらふれば、此上もなう細らせ給ひてありしを、此たび入らせ給ふを見れば、いや
ましに露ばかりも、其人と見うけ奉らず、ビツクリヌルホドニ見かへたり。されば

最初のころのいどをかしくシヤレたりし人とも思はれずしめり入たる様子なりとなり此語を以て按ずるに帝のかくの如くに寵遇のあつきは全くこの恠子の本性恰も帝の寵慮にいとよくなふばかりの風流ばめる女房なりけんおほくの女御つかへ奉れどすべて此ころはひの悪弊として藤氏かたみに競進してわが女を掖庭に入れたる事なれば中に就ては其思召にかなはでもやむを得させられぬ勢ひもありし御事諸書にてらして明かなりされどしかすがに皇族をも取まじへ給へるはあなかしこ故實ののこれるなりけり○あべいにもあぬ歎とは有べきにもあらぬ歎にして當時の音便をそがまゝにかきつけし也さて其歎きとはいどくさくゝに、あるにもあらぬくやみだといふはどの意○三日ありて出させ給ひなんとて云々、こは父君のはじめからくも一二日と契り奉りし言を食まで正直に内を出給へよとて御迎を出しつるなりされどうへ即ち帝のすべてゆるし給はず今一夜々々と抑留し給ひてつひに七八日も経ぬこたびは大納言奮發してセツカクの御愼みもかやうによそくしく輕しめ給へるはさて心外千萬なりとて正直嚴重にキツト下げ給へと奏上せしからにうへもせんかたあらせられでかたみになくく御暇を給ふにいけて○御整ひき出てまかでさせ給ふまで出居させ給へりとある手車とはまづ輿に輪をかけたる如き製の車にして手にてひくなり内裏の御門内をのるをゆるさせ給ふすべて此

あたりの文意桐壺の更衣の里第にまからむとする有さまに似たり但し桐壺は更衣なるが故に宣旨ありき延喜雜式に凡乗轝車出入内裡者妃限曹子夫人及内親王限温明殿後凉殿後命婦三位限兵衛陣但嬪女御及孫王大臣嫡妻乘轝限兵衛陣など見ゆ出居させ給へりとは其車を見おくり給ふさまいと御なごり惜しげにし給ふなり○大納言あはれにかたじけなう思されて云々父大納言はかやうに御手あつくあつかはせ給ふを天晴有がたき事におぼされて吾身の面目を施すにつけてもうれし涙のこぼるゝをいましく帝の御覽せられんとおしかくし忍び給ふとなり○うへは此御わかれをいともわりなくただよはしくせんかたなげに思召て例の御有さまにことなるを御側にさむらふ女房もその御心を恐察し奉りてとりくりに御機嫌どるが如くきこえわぐとなりこれ恠子が永き御別れし奉る御前兆なり此一段の御眞情いともくあはれにおぼゆ

一條殿の女御は月頃はさてもありつる御心地にこたび出させ給ひて後はすべて御ぐしももたげさせ給はず淺ましうしづませ給ひて只時を待ばかりの御有様なり大納言泣々よろづに惑はせ給へどかひなくてはらませ給ひて八月さいふにうせ給ひぬ大納言

殿の御有様書つゞけずとも思ひやるべし、うちにもたれこめておはしまして、御聲も惜ませ給はず、いと淺ましきまでなかせ給ふ。御めのさたち、制し聞えさすれど、聞し召いれず、あはれにいみじ。一條殿には、さてのみやはこて、例の作法の事ども、したゝめ聞え給ふも、あさましう心うし。あて出奉るをりなごは、后になし奉りて、御輿にて出し入れ奉りて、見奉らんこそ思ひしか、かくやはこ、伏しまろびなかせ給ふ。内にはさへき御心よせの殿上人、上達部のむつまじき限りは、皆かの御送りに出し立させ給ふ、我がよそにさく事の悲しさを、返々思し感はせ給ふ。夜ひとよ御とのごもらで、思しやらせ給ふ。大納言殿は、御車のしりにあゆませ給ふも、たゞたふれまろび給ふさまいみじ、はては雲霧にてやませ給ひぬ。内にも外にも、あないみじ悲しごのみ、思し惑ふほごに、はかなう月日も過ぎもて行て、さへき御佛經（ホトケキヤウ）のいそぎにつけても、御涙ひるまなし。内にも此御い

みのほごは、絶ていづれの御方々も、つゆまうのぼらせ給はず、宮の女御をば、さやうになごきこえさせ給ふをりあれど、御こゝちなやましなごのたまはせつゝ、のぼらせ給はず。

○月頃はさてもありつる云々は、此月ごろ日ごろ御不快ながらも、さてマアそのまゝなりしに、參内の後出させ給ひてこのかたは、御頭（ミカド）もよくあげ給はず、たゞあさましく臥沈み給ひて、其時を待たまふがやうなれば、父君大に狼狽し給ひて、萬事に心を配らせ給ふかひもなく、御妊娠し給ひて、やつきめといふにうせ給ひぬ。となり、紀略に、寛和元年七月十八日未刻、女御藤原祇子卒、大納言爲光脚女也、懷孕之間、日來病惱、天下哀之、件、喪家、前播磨守藤原共政、室町、西春日、北宅とあり、さてこの祇子入内の事、この物語にては、當年の如くにかきつゞくれど、前條にも論ずる文に、考へ合せられて、この物語の過失なる事いよゝ明けし。こゝにもかける、姪（ミヤコ）ませ給ひて八月とあるをも思ふべし。○うちにもたれこめてどは、内裏即ち帝も鬱々しく御簾をたれこめ給ひて、いとど其御ありさまあしく見奉るばかり、世間體をも耻ぢ給はで、なかせ給ふ、餘りの笑止さに、御めのとたち、心をつけ奉れども、聞入れ給はず、なき沈ませ給ふとなり。○父君は、このまゝにのみさし置がたしとて、例の作法の如く、葬式の事ども準備るも、いとあさましくも悲しき極みなり。○

ゐて出奉るとは、その送葬の車になきからをのせて、ひきぬ出むとするに臨みて、
 父大納言の思はくは云々なりしを、かくなしはてんとは、かけても思ひきやど、な
 きふしまるびなげき給ふとなり。○うち、即ち帝も然べき御心しりの殿上人や、い
 どむつまじみ仕へ奉る上だちめ、皆女御の御葬式をおくりの爲に出さしめ給ひ
 て、御みづからは、たいよそ事のやうにき、なし給ふかなしさを、一夜すがら、御寝
 もあらでおぼしまとひ給ふとなり。○大納言殿はなきからをのせたる御車の後
 に歩行給はむとすれど、倒れまろび給ふさまいと甚しく悲し。○さては雲霧にて
 やませ給ひぬとは、火葬せしさまをたどへしなり、すべて此ころは、火葬をつねの
 作法とせり、其煙は雲かきりかとおもふばかりに、立のぼるをかくいふ、内にも外
 にもとは、たい此事を帝を始て、世間に悲しく、といひまどふ、紀略の文にも、天下
 哀之とあるにかなへり。さて紀略の上のついきの文に、二十二日贈故女御祇子從
 四位上、位記宣命等、藏人式部少輔藤原惟成作之と見ゆ。○然べき御佛經のいそぎ
 云々、こゝも現家のありさまをいへり、大納言を始て、その御中陰中や、何やと御後
 のいとなみに、佛像を畫かせ、また經を寫させなど、御心を盡さるゝも、只御なみだ
 のみ、○内即ち帝も、この女御の御いみの間は、いとさびしくつゝ、しませ給ひて、多
 き女御の御方々、一人も御どのゐる事なし、宮の女御とは、爲平親王の御女、婉子
 は、祇子につゝきたる寵ある方なれば、御けしきなきにあらざるも、御心地なやま

しとて、のぼらせ給はずとなり。

かくあはれく、なごありしほごに、はかなく寛和二年にもなりぬ。
 世の中、正月より心のごかならず、あやしうものゝさごしなご、あけ
 うて、内にも御物いみがちにておはしますに、又いかなるころにか
 あらん、よのなかの人いみじく道心おこして、尼法師になり果ぬこ
 のみきこゆ、これを帝聞し召て、はかなき世を思し歎かせ給ひて、あ
 はれ弘徽殿、いかに罪深からん、かゝる人は、いと罪重くこそあ、めれ
 いかでかの罪をほろぼさばやと、思し亂るゝ事ごも、御心の中にあ
 るべし。此御心のあやあうたうごきをり多く、心のごかならぬ御氣
 色を大きおごし、思し歎き、御をちの中納言も、人知れずたゞ胸つお
 れてのみおぼさるべし、説經をつねに花山の嚴久阿闍梨を召つゝ、
 せさせ給ふ、御心のうちの道心限なくおはします。妻子珍寶及王位
 といふ事を、御口のはにかけさせ給へるも、惟成の辨いみじうらう

たきものにつかはせ給ふも、中納言諸ごもに、此御道心こそうしろめたけれ、出家入道も皆例の事なれど、これはいかにもぞやある御心さまの、をくり出くるは、事異ならじ、たゞ冷泉院の御物の氣のせさせ給ふなるべしなど、歎き申渡るほごに、猶あやしう例ならず、物のすゞろはしげにのみおはしませば、中納言なごも、御さのる勝につかうまつり給ふほごに、寛和二年六月廿二日の夜、俄にうせさせ給ひぬごのゝしる。内のそこらの殿上人上達部、あやしの衛士、仕丁にいたるまで、残る所なく、火をこもして、いたらぬくまなくもごめ奉るに、ゆめにおはしまさず、大きおごより始、諸卿殿上人の、こらず参り集りて、つぼくをさへ見奉るに、いづこにかおはしまさん、浅ましういみしうて、一天下こそりて、夜のうちに關々固めのゝしる。中納言は守宮神、かしこ所の御前にて、ふしまろび給ひて、わが寶の君は、いづこにあからめせさせ給へるぞやと、伏しまろびなき給

ふ、山々寺々に、手をわかちてもごめ奉るに、さらにおはしまさず、女御たち涙をながし給ふ、あないみじご思ひなげき給ふほごに、夏の夜もはかなく明て、中納言や、惟成の辨なご、花山に尋ねまゐりにけり。そこに目もつゝらかなる小法師にて、ついゐさせ給へるものか、あなかなしや、いみじやと、そこに伏まろびて、中納言も法師になり給ひぬ、惟成の辨もなり給ひぬ、浅ましうゆゝしう、あわれに悲しごは、これより外の事あへきにあらず。かの御ことぐさの、妻子珍寶及王位も、かくおぼしごりたるなりけりご見えさせ給う。さても法師にならせ給ふはいごよしや、いかで花山まで、道を知らせ給うて、かちよりおはしましけんご見奉るに、あさましう悲しう、あはれにゆゝしくなん見奉りける。

○世の中正月より、心のどかならず云々は、紀略を参照するに、正月十八日、東京有大失火、一條大路、南中御門北、數町有火と見え、又二月十六日、官正廳戸内、蛇見有占

また三月五日、前大貳菅原輔正家、兩所焼亡なども見ゆ。猶この他にも、天地のあひだの變災もありしなるべし。○御物忌がちとは、陰陽家其道の故實によりて、卜筮などして、御慎みを重くすゝめ奉ることをいふ。○また世の中のひとみじく道心おこして云々は、三月十四日、從三位藤原曉子、於淨土寺爲尼と、臣仲平公長女、廿二日、圓融太上天皇、於東大寺受具足戒、廿五日、侍從藤原相中、於天臺山出家、大納言明光卿、また四月廿二日、大内記從五位下慶滋保胤出家、また廿八日、四品盛明親王出家、十五皇子なりなどあるを古本には、或記云、正月一品内親王資子出家、云々馬助藤邦明出家など、この他にかく書いれおけり。また五月十五日、前齋宮規子内親王薨、村上帝、また六月一日、召神祇官陰陽寮、有御卜、依霖雨也など、これみな世のつねならぬ御事ともなるを、十九日伊勢齋宮濟子、於野宮與瀧口武者平致光密通之由風聞、仍公家召神祇官、令仰祭文、近四日遠七日、祈申此事之實否、といふ事さへ見ゆ、是等あやしき世のありさまなり、すべてかゝる當時内外の實況なれば、推してみだりなるさまをささるべし。○弘徽殿いかに罪ふかからん云々、かの罪をはるばさばやと、思し亂るゝ事御心の中にあるべしとは、難産、或は妊娠の身ながら死するものは、罪障深くして、佛果を得ずなど、今もいふ事なり、これら必本文あるべかめれど、いまだ覺悟せず。○此御心のあやしう云々は、次下の文に見ゆる、花山の嚴久の説經を、いと深く御心にしめまし給へるのみか、藏人栗田道兼等もそゝ

のかし奉る事ありて、をりく御心のすゝるはしげに坐しならんかの元方の靈の御物氣となりて、冷泉院をなやまし奉れる御なごりのやうなことも申ふらせつるなるべし。○おほきおとどは、賴忠公、御をちの中納言は、義懷卿なり。○花山の嚴久阿闍梨は、花山大僧都と稱す、寛弘六年五月廿四日に上表、權大僧都を源信に譲りて、妙香房といひ、治五年と或書に見ゆ、常に栗田の道兼と謀りて、帝をすかし奉りし悪僧なり、さて阿闍梨は、悉曇の原語なるを、漢譯して正行といふ意なり。○妻子珍寶云々は、虚空藏菩薩所問品に云、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、唯戒及施不放逸、今世後世爲侶伴といふ文なるを、この頃のまくらごとにし給ひしとなり。口のはにかけさせ給ふといふ語、今も同じ。また古事談に、此御出家之發心は、弘徽殿女御恒德鍾愛之間、忽薨逝、仍御悲動之所、町尻殿得便宜書世間無常法文、妻子珍寶及王位臨命終時不隨者等文也等奉見、被勸申御出家事、師共出家可御共之由、被僞申云々ともあるを下とめおくべし。町尻は栗田の事なり、さて惟成は、紀略に權左中辨、正五位上左衛門權佐、藤原惟成、先皇藏人侍讀也とも見え、また大鏡にも、義懷卿の傳に、花山院の御時のまつりごととは、たゞこの殿と、惟成の辨として行ひ給へれば、いといみじかりしぞかしともあり、又中納言は、文旨におはせしかば、御心たましひいどかしこく、有職におはして云々なぞかけるを、思ひ合せられて、この二人を、帝もつねにたのませ給ひしならむと、推はかり奉りぬ、こゝにらうたきも

のとある心をつくべし。○寛和二年六月廿二日の夜、俄にうせさせ給ひぬ。云々、扶桑略記には、寛和二年六月廿二日庚申夜半、天皇生年十九、出鳳闕宮、向花山寺、落飾入道法號入覺藏人左少將藤原道兼、僧嚴久陪従となりて、百鍊抄、一代要記、歴代皇紀、編年記も、みなこの本文の如く、廿二日に作れども、この廿二日は誤りにして、是月は戊戌朔なれば、庚申は廿三日なり。紀略に、廿三日庚申、今夜丑刻許、天皇密々出禁中、向東山花山寺、落飾、于時藏人左少辨藤原道兼奉從之、云々とあるに、從ふべし、また古事談にも、花山院御出家、寛和二年六月廿三日事也、于時許、主上私令出御在所、給藏人左少辨道兼、天臺僧嚴久候御共、嚴久候御車、則嚴久車也、道兼騎馬云々と見えたり。こはこの頃の御歎きを奇貨として、嚴久に謀りて、御心を狂はせ奉りし事、略記に道兼と嚴久陪従とあり、古事談に嚴久候御車とあるにて、明なり。道兼父の兼家公としめし合せて、事こゝに及びしは、なほ大鏡をてらして、實に悲憤ありありあり。同書一の卷、この天皇條下に、寛和二年丙戌六月廿三日の夜、あさましくさふらひし事は、人にもしられさせ給はで、みそかに花山寺におはしまして、御出家入道せさせ給へりしこそ、御年十九世をたもたせ給ふ事二年、其後廿二年はおはしましき、おはれなる事は、おろおはしましける夜は、藤壺のうへの御局オノノキの小戸より出させ給ひけるに、有明の月いみじう明かりければ、顯證クハシにこそありけれ、いかいすべからんと仰られけるを、さりとて留らせ給ふべきやう侍らず、神璽寶劔わた

り給ひぬるにはと、粟田どののさわがし申給ひけるは、まだみかど出させ給はざりけるさきに、神璽寶劔手づからとりて、東宮の御方に渡し奉り給ひてければ、かへり入らせ給はん事は、あるまじくおぼして、しか申させ給ひけるとぞ。さやけき影をまばゆく思召つるは、月に月のかほに群雲のかゝりて、少しくらがり行ければ、わが出家は成就するなりけりと仰られて、おゆみ出させ給ふは、なほに、弘徽殿の女御の御ふみの、日ごろやりのこして、御目もはなたす御覽じけるを、思し出て、しばしとて取に入らせ給ひけるは、どぞかし、粟田殿の、いかにかくは思召たちぬるぞ、只今すぎなば、おのづから障りも出まうで來なんと、そらなきし給ひけるは、とあり、其夜の事實、今も目の前に見奉るが如く、此一段をよみて、藤氏の爲に誰か心に不平を抱かざらん、實におそろしき御ありさまならずや、紀略にも、于時藏人左少辨藤原道兼奉從之、先于天皇、密奉劔璽於東宮、出宮内云々、九年十と見え、百鍊抄に、以左少將道綱、献劔璽と見え、古事談にも、令出御在所給之時、弘徽殿ノ手書、取忘ニケリ、還入テ取ラント被仰ケレバ、道兼申云、劔璽已ニ渡春宮御方、今ハカナヒ候ハジト申ケリ、又已欲令出給之時、在明月クマナキ影ヲ、サスガ見所ニ思食テ、立ヤスラハセ給之間、村雲ノ月ノ面ヲ隠シタリケレバ、我願既満ト被仰テ、貞觀殿ノ高妻戸ヨリ、令墮下給テ、自北陣土御門ヲ東へ令渡給之云々など、みないど委し、藤壺といひ、貞觀殿とある、いづれにもはど近きおはひなり、憎むべきは、道兼かくの如く、帝

の出させ給はぬさまに三種の神寶を勿體なくも手づから取出し兄の道綱をして、東宮即ちみづからの妹、詮子の産み奉る懐仁親王に奉りしふるまひなりされど、こは父兼家公と謀りし所ある事は明らかし。さてこの出御、本文にてはかちよりのものし給ふ如けれど、悪僧嚴久が車を迎へに出して、宮門外よりかきのせ奉り、おのれ堅固に陪乗し奉り、道兼は馬上にて、花山寺へいそぎし事ども、古事談の文を以て、その事情にあはせて、今も見奉るが如し。また大鏡のつづきに、さて土御門より東さまにおはしまする、晴明が家の前を渡らせ給へば、みづからの聲にて、手を夥しくはた〜と打つなり、帝おりさせ給ふと見ゆる、天變ありつるが、已になりけりと見ゆるかな、参りて奏せむ、車に装束せよ、といふ聲を聞せ給ひけんは、さりとともあはれには思召けんかし、かつ〜式神一人、内裏に参れと申ければ、目に見えぬ者の戸を押あけていづ、御うしろをや見まらせけむ、たい今これより過させおはしますめりと、いらへけりとかや、其家は土御門まぢかくなれば、御道なりけり、とあるをも思ひやり奉るべし、内裏を出させ給ひて後の、内裏の御有さまは、本文をよみて盡せりといふべし。〇あやしの御士仕丁とは、あやしきさましたる物の数にもあらぬと云意、〇ゆめにおはしますとすとのゆめは、今もいふゆめ〜といふに同義、〇つば〜は、かの梅壺、藤壺、梨子壺、桐壺などいふ、つばと同し、く、つばまりたる中庭、即ち宮殿のあはひ〜の所なり。〇關々固めの〜しるとは、

凡て非常の事あるをりは固關といひて、逢坂、鈴鹿、不破の三關を固鎖する故事なりし也、そのことをいふ。〇守宮神とは、わざはひを告げ給ふ神にて、その頃は、かしの所におはせ祭られたり、大方便佛報恩經、又新譯華嚴經などに見えて、佛意ごちたきときとあれども、くだ〜しければ、わざと〜にはいはず。〇あからめと云語は、景行天皇紀に、倭亡、また續紀の宣命にも、あからめさす事のごとく、などありて、俄にいさゝか外へ目をうつす意をいふ、歌にも多くよめり、こゝも、いづこにチット目を俄にうつし給へりや、どの心なり、紀略にも、外祖右大臣参入、令固禁内警備と見え、また古事談にも、右大臣院法典参、青宮固諸陣禁出入とあり、また花山院御出家之時、天下騒動、人申大入道殿、仰云、ケシウハアラジ、ヨク求ヨ云々、不令騒給云々、とある、いと、憎むべし。〇大鏡にかける、式神といふは、陰陽道に行ふ所の咒詛に、使役せられて、よろづにたちはたらく、一種の神なりとぞ、さて大鏡のつづきに、花山寺におはしつきて、御くしおろさせ給ひて、後に、粟田殿は、まかり出て、おとにもかはらぬすがた、今一度見え、かくとわなにも申して、必参り侍らんと申ければ、朕をばはかるなりけりとて、こそ、泣せ給ひけれ、あはれに悲しき事なりな、日頃かく御弟子には候はんと、契すかし申給ひけんが、おそろしさよ、東三條殿は、もしさる事やし給ふと、あやふさに、さるべくおとなしき人々、何がしかがしといふいみじき源氏の武者たちをこそ、御送りに添へられたりけれ、京のはどはかくれて

堤のわたりよりぞ、打出まゐりける。寺などにては、もしおして人なぞやなし奉るとて、一尺ばかりの刀かたをもを抜かけて、守り申けるとぞ。とあり、前條に引ける、古事談の文に參照し、道兼この御出家を勸め奉り、御代がはりの後、みづから關白となりて天下を掌握せんと、父の意に従ひかく立はたらきし有さま、憎みても餘りあり、義懷中納言惟成の辨など、いかばかりにか心を苦しめて、御出家の御すゝる心をとどめ奉りしかども、すかし出し奉るかたにあやまたれ給ひて、この御わざはひは出来しなりけり、殿人の車にのせ奉り、いそぐさへ來るに、御道すがら武士を要し、なほ寺におとしつけ奉りて後、道兼さまよくいひ遣がるゝにつきて、始めて朕をはかるなりと、なかせ給ひしとの御心地、いかばかりにおはしましけん、こゝにおとゞにもかはらぬ委云々といふおとゞは、父兼家公又わなひとは出家すべき按内をいふ、これ皆帝をはかり奉りし也。父兼家公一時のはかりごとを、もししそこなひたらんにはとて、頼光頼信等のつねに心を得たる武士をかたらひて、警衛させつるを考へわたしても、當時の形勢おもひやられぬ。また中納言辨など、花山寺に尋ねいり奉りたる、其真情いかなりけん、紀略に、翌日招權僧正尋禪、剃御髮、御僧名入覺、外舅中納言藤原義懷、藏人權左中辨藤原惟成等、相次出家、義懷法名悟真、惟成法名悟妙、皇太子嗣祚とあり、また古事談に、權中納言義懷、權右中辨惟成等、後朝尋參、花山寺同以出家とあり、また中納言法師云、御在位之間、浴無涯之朝恩、

今遇、辭退之時、若改奉從之誠者、本意相違歟、仍所出家也、爾趨朝市、更無其益歟、云々、惟成所陳、同之云々、とも見ゆ、〇目もつゝらかなるとは、字鏡に、肝況俱反愛也、張目之貌、目豆々良加爾須とあるが如く、ことさらうれひにしづめる如き御容體にて、法師すがたとなり給へりとなり、また古事談に、義懷惟成の出家云々のつゝさの文に、未時許、頭中將實資參入、即候御前、仰云、是已遂宿念也、全不知世間誹謗、但尊號及封等事、更不可受容、暫可住、横川者、また紀略にも、廿八日乙丑詔書、太上天皇尊號不奉、辭書給とあるなど、實にけしかる御もてなしなるをや、よし尊號御封の事は、受容したまはぬよしみことありぬとも、今上然るべく奉り給ふべき、御おきてならずや、いかにも失敬を極められ給ふ御事をつねにいとかし、こつ憤激に禁へず評し奉るをや、但しこの不奉辭書給の五字は、山崎知雄の校正本に、扶桑略記一代要記、歷代皇紀、皇年代略記などには、花山上皇、固辭太上天皇尊號、不受云々、とあるが故に、この五字は固辭不受給などの誤ならんと訂したれども、そはなかなか、時に時勢を思ひたらぬ憶想なりと、余は思ふ、凡ての情勢を味ふべし、あなかしこ評し奉るもさしくまれぬ、但し紀略一條院の條下には、太上天皇尊號奉るよしあるは、いとあやし。

かくて、廿三日に、東宮位につかせ給ひぬ。東宮には、冷泉院の二宮あり

させ給ひぬ。みかごは御年十七にならせ給ふ、東宮は十一にぞおはしける。東宮も、この東三條のおごとの孫にこそはおはしませ。いみじうめでたき事かぎりなし、これみなあへいことなり。

○廿三日は同じく寛和二年六月廿三日なり、位につかせ給ふ東宮とは、上文にかゝりける懐仁親王にして、一條院と申奉る。御母は兼家公の女、梅盞女御詮子といふ、上文にかゝりける如し。また東宮には、花山院の御弟居貞親王たち給ふ、後に三條院と申奉る。扶桑略記に、一條天皇即位、寛和二年六月廿二日、生年七歳受禪、同廿三日有太子授位宣命、七月十六日、以居貞親王立皇太子、年十一と見えたり。○東宮も、この東三條のおごとの御孫云々は、この母を院の女御超子といひて、兼家公の女、詮子の姉なり。此卷のはじめ、天元五年正月廿七日、庚申の夜の曉がた、頓滅し給ふ冷泉院の女御なれば院の女御といひき。○いみじうめでたき事とは、みなこの兼家がたのそろはせ給へるをいふ。○これみなあへい事なりは、是みなかやうに有べき事なりとなり。凡ての有さま、比前後の卷のあるやうに、紀略略記、また百練抄古事談及び大鏡などの書どもを参照して、よくその事實をわきまふべし。此次に本文に、花山院の佛道にいらせ給ひて、いよく御行ひすませ給ふよし、かきつけられたれど、こちたければ筆をおきぬ。大鏡にも御駿いみじうつかせ給

ひて、駿くらべし給ひし時、讓法の法師、御屏風にひきつけられし事など、あれど、みなこゝにはいはず。又同書道兼得に、この殿父おごとの御いみには、土殿などにもあさせ給はで、雲さにことつけて、御簾どもをわけ渡して、御念誦などもし給はず、さるべき人々よびあつめて、後撰古今ひろげて、興言しあそびて、つゆなげかせ給はざりけり。其故は、花山院をば、我こそはすかしおろし奉りたれ、されば關白をもゆづらせ給ふべきなり、といふ御恨みなりけり。よつかぬ御事なりや、といひ、また粟田殿、花山院すかしおろし奉り、左衛門督小一條院すかしおろし奉り給へり。帝、東宮の御あたり近づかで、有ぬべき御族といふ事、いできにしどかし、いと稀有に侍りきな、誰も聞しめし知たる事なれど、ともいへり、實にかゝる所爲を、ほこりかにうけぱりし其人、いかでか其身の本意のどかに達せらるべき、其身のはて、いとあはれなりしぞかし。土殿とは、此物語の様々のよるこびの巻に見えて、東三條院の廊渡殿を、みな土殿にしつゝ、宮殿原おはします、とある。倚壁の事なり。されば奥にこもるさまをかくいひしなり、また左衛門督とは、道兼の男兼隆は、東宮教明親王をすべらせ奉りて、小一條院とならせ給ひき。されば父子にして、帝と東宮をすかしおろしたる系統なればとて、當世にその惡逆を彈指されて、帝東宮などの御あたりへは近つけ奉らぬ名を流しつるよとなり。實に稀有といふべきのみ、蓋しこの父子の逆意は、そも誰が結構ぞや、藤氏の宿横にくひべし。

此物語は、多年よみなれたるが故に、いさゝか見出る所なきにあらで、こたび此巻を摘み出るに就ては、總評めくものもいはまほしく思ゆれを、さいつ頃關根ぬしが、いとこまかに釋評せられて、いとよく心づかれたるゝさゝく、かゝりければ、今はみなそれらにゆだねて、別に注さず。又この段も、釋と評とをとりわきたらんには、餘りに長くなるべきを厭ひて、たゞ一わたりすぢかきといふものに似て、其體裁をなさいるは、いとみだりなり。さはいへを、解釋に於ては、其大なる失錯あらじと思ふ。

十六夜日記

(發端)

本 居 豊 穎

此書につきては、高田興清の殘月鈔ありて、考證は精しく遺憾なきが如くなれど、尙その文意歌意等を解く方は、懇切にあらす。依てこの記文中おもしろしと思はるゝ條をぬき出して、解釋及評語を加へ試みんとす。
昔かべの中よりもごめ出たりけん、ふみの名をば今の世の子は、ゆめばかりも身の上のことゝは、しらざりけりな。

「昔かべの中よりもごめ出たりけんふみ」とは、古文孝經の事にて、孔安國の序に「魯恭王使人壞夫子講堂於壁中石函得古文孝經二十二章」とあるによりて、ことさらに、其書名を匿していへるなり。さてその「ふみの名」とは、孝といふことなり。今の世の人の子とは、方今にある世間の子たる者といふ意にて、人の子といふ語は、人の親といふ語に對して、單に「子」といふに同じ。人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまごひぬるかなといふ歌も、人の親とはたゝ親といふ意なり。人のといへば、我に對して、他人の親また他人の子といふやうに聞ゆれど、然るにはあらす。ゆめばかりも身の上の事とは、しらざりけりな。ゆめばかりは、いさゝかの意に

て夢と云ふ物ははかなきものなれば、其夢はともいへるにて、塵ばかり露ばかりなぞいふに同じ。今俗の言にも知らぬ事を、強くいふとて夢にもしらぬといふが如し、身の上のことゝはしらざりけりなは自身の關係ある事とは、知らずて在りけりにて、なといふ歎息辭をそへて、深く歎じたるなり。さて是は此日記を書くとして、下心に深く憤れることの條を、擧げて、冒頭としたるにて、爲家の没後阿佛の生める爲相、未だ幼稚なるを以て、異腹の兄爲氏後見したるより、遂に父爲家より爲相に譲り與へたる播磨國三木郡細川庄を謂なく、強奪せられたるを、鎌倉に訴てんとして、出立つ旅なれど、爲氏が父爲家の意に背ける不孝を、慨歎せるを直接に指さずして、廣く世間の道德地におちて、不孝者の多きさまにいへるなり。さて中古の詞に夢をかべといふ事ありて、後撰集の歌に、まどろまぬかべにも人を見つるかなまさしからん春の夜の夢とあり、其後歌詞に、此文の壁と夢とを對としましたかべの中と、身の上との詞に、上中をむかへて文をなせり、意を注ぎて味はふべし。

みづくきの岡のくず葉、かへすくもかきおくあさ、たしかなれどもかひなきものは親のいさめなり。

「みづくきの岡」は地名なりとする説もあれど、尙「みづくき」は岡の冠辭なり、其説は

玉勝間十丁一に出たれば、披き見るべし、又後には筆をみづくきといふことありて、筆を以て書き記したるものをみづくきのことといへば、此所のみづくきといふ詞には、其義をもかけて、次の「かきおく」といふにひびかせたり、をかのくず葉は、岡に生たる葛の葉にて、「かへす」といふ詞の序となせるなり、「かへす」は、反覆といふ意、かきおくとは、書き置く跡にて、父爲家が爲相に、播磨の細川庄を譲り與ふる由の讓狀の事、かひなきものは親のいさめなりとは、子の爲に親たる者の遺しおく訓誡も、孝子の是を遵守してこそ、其効もあれ、是を守らざる子にしては、何の効力もなきものなりと、長息したる文にて、發端の孝といふ事をしらぬ世の中なれば、いかにせんと照應したり、いさめは此所にては、訓誡又は、いさめといふに當れり、普通諫を請みて、君主に對する諫言の事のみ、いひ慣ひたれど、雅言にては、甚た汎く使へり、神前にて神樂など奏するを、神をいさむといふ、是亦同言にて、元來勇ましむる意、勇ませを約めて、いさめといふは、令慰をなぐさめ、令惱をなやめなどいふと同じ、依ていさめは、元來其人をして、精神を發動せしむる義より起れる詞なり、借此條の「みづくき」の岡のくず葉かへすくもといへる言は、前にもいへる如く、表面はた「かへすくも」といふに、いひかけたる序詞ながら、「みづくき」に筆の事をこめ、又葛の葉のかへれば、裏を見るより、恨みといふいひかくる常の例もあれば、吾心に恨とする意をも、含ませたるにて、最も巧みなる

また賢王の人をすてたまはぬまつりごごにも、れ、忠臣の世を思ふなさけにもすてらるゝものは、かずならぬ身一つなりけり。おもひしりながら、またさてもあらで、なほこのうれへこそ、やるかたなくかなしけれ。

「また」は前條の慨歎の外に、わが一身上につきて歎くべき事のあるを、いはんとし、て文を起せり。「賢王の人をすてたまはぬまつりごご」は、當時の聖代の恩の普きをいひ、「忠臣の世を思ふなさけ」は、鎌倉の幕府の民政に仁なるを稱したるにて、此の文は賢王と忠臣とを對へ、人をすてたまはぬ政と世を思ふ情とを對へて對句とし、其君臣の政にも情にも、吾一身の漏れたるを歎くなり、「かずならぬ身」は、人の數にも入らぬ吾身にて、阿佛自らの謙遜なり、さて「數ならぬ」と「身一つ」を對へて文としたも、さてしもあらで、斯の如く吾身の拙劣なるより、不遇なる理はよく心得てありながら、其まゝに安んじても得在らざるをいひて、「しも」の「し」は例の助字

さらにおもひつゞくれば、やまごうたの道は、たゞまことすくなくあたるすさびばかりと思ふ人もやあらん。ひのもこの國に、あまのいは戸ひらけし時、よもの神だちのかぐらのことばをはじめて、世をよさめものをなくさむるなかだちとなりけるこそ、この道のひじりだちはしるしおかれたりける。

「さらにおもひつゞくれば」は、更に思惟すればにて、「ソモ」オモンミレバ」といふが如し、さてこれよりは、又吾が家の歌道に名譽ある事をいはんとて、先づ歌といふもの、次に價値ある謂を陳べたり、やまごうたは、和歌にて歌を和歌といふは、

にて、然もあらずしてなり「なほこのうれへこそ、やるかたなくかなしけれ」は、やはり此の愛情は、散する事能はず悲しにて、「このうれへ」は、細川庄の一件にて、「この」といふ詞には「子の」といふをも含めたるなり「やるかたなく」は、心中の鬱結したる念を、他へ散じ遣る事なりがたきをいふ、愛は「うれひ」「うれへ」の二語ありて、いづれも古書に證あるを「うれひ」といふは、自心に愛る方「うれへ」は、其愛を他人に訴る方ならんと、山口栗にいへり、さて如此いへるは、阿佛の今回訴へを起して、鎌倉までゆかんとする事の、已むを得ざる情實を陳べたるなり。

詩に對したる事にて、單に歌をさすには和歌といふまじき事、先哲の論もあれど、古今集の序よりはじめて、如此稱する習慣となりたるなれば、此時代にしては、答ひべきにあらず、まとすくなくは、實意の乏しき事、わたなるすさびは、浮華なる小事といふが如く、世間の人の歌といふものを、採るに足らざるものと、度外視するをいふ、人もやあらんは、右の如く思へる人、或はあらんの意なり、日の本の國にあまのいは戸ひらけし時云々は、歌のはしめをいへるなれど、此時代には古事記日本記等をよく讀み心得たる人もなく、たい昔よりいひ慣れたる言によりて、いへるなれば、此の條は、甚た無稽にして、事實は適はず、あまのいは戸ひらけしときは、天照大御神の天の石屋戸を出て給ひしことをいへりと思はるれど、日の本の國にといへるもいかになる上に、よもの神たちのかぐらの言葉といふ事も甚無稽なり、八百萬神といふ事はあれど、よもといふ事はなく、神樂の詞といふも、殘月鈔には、阿波禮阿那於茂志呂云々といへるなごにてもあるべしとあれど、これを歌のはしめとはなしがたく、これより以前に伊弉諾伊弉册三神の唱和の言ありて、古今集の序にも、これを歌のはじめとしたるが如く、いかにもこれと歌といふも、濫觴といふべきなれば、此文なる天のいは戸開けし時といふは、天地開闢といふ事を混同したるよりの誤なるべし、依りて此の條の事は委しく辨へず、世をいさめ物をやはらくるなかだちとては、古今集の序に、男女の中をもやはらけ、たけき

ものゝふの心をもなくさむるは歌なりといへるを指したるなり、この道のひじりたちとは、實之をばじめとして、代々の撰集の序をしるし、又歌學の書に、これらの事をいへる、清輔基俊顯昭などの人々をさせるなり。

さても又しうをえらぶ人は、ためし多かれど、ふたゝび勅をうけて、世々にきこえあけたるは、たぐひなほありかたくやありけん。

前條に歌といふものゝ貴重なるよしをいひたるを受けて、是よりは又勅撰集の撰者の事に及ぼして、爲家の名譽ある事を陳べたり、しうをえらぶとは、即ち撰集の撰者にて、古今集以來の撰者をいふ、ふたたび勅を受けて、世々にきこえあけたるとは、定家卿の新古今と、新勅撰との撰者となり、爲家卿の續後撰續古今の撰者となりたるをいひて、世々とは、定家爲家二代うちつゝきたる事にて、きこえあげは、其集を撰定して朝廷へ上申したる事なり、たぐひなほありがたくやありけんは、右の如く父子打續きて、兩度の撰者となりたるは、他に比例もなく、希代の名譽といふべしといふ意を、やありけんとわざと疑ひいへるなり。

そのあごにしもたづさはりて、みたりのをの子どもも、ちのうたのふるほぐごもを、いかなるえにかありけん。あつかりもたること

あれど、道をたすけよ、子をはぐぐめ、後の世をこへとて、深きちきり
をむすびおかれし細川の流れも、ゆるなくせきこめられしかば、あ
こふのりのこもし火も、道をまもり家をたすけんおや子のいの
ちも、もろこもにきえをあらそふ年月を経て、あやふくこころばそ
きものから、何ごもして、つれなくけふまでにはなからふらん。

「そのあとにしもたつさはりては、前にいへる名譽ある定家爲家兩卿の後に、關係
しての意にてたつさへは、携を訓ひ如く兩人互に手を執り交る事なれば、たつさ
はりといふは、其事の自然の形状なり、みたりのをのこ子どもは、阿佛の子の男子
をさせる事なるを、此人の所生は五人ありて、長女紀内侍は父異なり、慶融源承は
僧となりて、あとは爲相と爲守にて、此記中にも五人の子の事をいへり、然れば
此所に三人のをのこ子とあるは不審にて、ふたりの誤りならんと、殘月鈔にいへ
る宜なり、二人とかきたりけんか二を三に寫しあやまりたるなるべし、依て此所
は爲相爲守の二人の事とすべし、も、ちの歌のふるはぐは百千の歌の古反古に
て、代々の撰集の草稿類をいふ、いかなるえにかかりけんは、いかなる因縁ありし
事ならん、の意にて、縁の字音エニといひ又エト一言にもいへれば、縁かの義にて

も聞え、縁にかの義にも聞ゆれど、殘月鈔にえの字の傍に、縁字を書きたるは、えの
一言縁と見たるなるべく、右にて可なるべし、あつかりもたることわれど、預り
持ちてはあれども、さてこの文はいさゝか紛はしく聞ゆれど、二人の男子どもと
百千の歌のふるはぐはどもとを並べて對にいひたるにて、其二種共に阿佛の身に、
預り有したりとの意なるべし、道をたすけよ、子をはぐぐめ、後の世をこへは、三事
にて、道をたすけよは、歌道を贊助して、此道の隆盛を量れの意、子をはぐぐめは、爲
相爲守等を養育保護せよの意、後の世をこへは、爲家の死後に、後世の福を祈りて
吊ひ修せよの意にて、皆阿佛の爲に爲家の委嘱しかれたる箇條なり、深き契をひ
すびおかれし細川の流とは、前件三事を履行すべき爲の資本として、深く慮り約
して譲り與へ置かれし、播磨の細川庄といふことを細川といふ名より、深きとい
ひ、むすびといひ、流といへるなり、むすぶは、水をむすぶといふ事あればなり、ゆる
なくせきとめられしは、爲氏のために奪はれたる事にて、ゆるなくは何の謂も無
く、其の理由なき事、せきとめは、川といふよりの文なり、あどふのりのともし火
は、前文の後の世をこへとあるによりて、其の後の吊ひをなすべき法會の料の燈
火にて、佛書に法燈といふ事あるより、次の消といふことをいはん爲なり、道を守
り家をたすけんおや子のいのちは、歌道を保守し二人の子を養ひて、諸共に家計
を立て、命をも繋ぐべき事にて、これ又前文の道をたすけよ、子をはぐぐめとある

を受けたりもろどもにきえをあらそふ年月を経て、右の法のともし火も親子の命も諸共に殆ど消えんとする。近年の因若を重ねての意にて、きえをあらそふとは二物孰れか前に消ゆるか、二物共に争ひ急ぎて消果てんとする形状をいふ、あやふくこゝろばそきものからは、右の如く消えかゝりたるさまの危く、且つ心細くありながらにてもものからは、例のものなからの意なり、何としてつれなく、けふまではながらふらんは、右の次第なれば、阿佛吾身は疾くにも死ぬべき身なるに、今日までも碌々として、生存らへ居るは、如何なる事ならん、我心ながら不審なりといふ意にて、つれなくは死ぬべき命の死なざるをいへり。

をしからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子をおもふこゝろのやみは、なほしのびがたく、道をかへりみるうらみは、やらんかたなく、さてもなほあづまのかめのかぐみにうつさば、くもらぬかけもやあらはるゝとせめておもひあまりて、よろづのはぐかりをわすれ、身をえうなきものになしはて、ゆくりもなくいさよふ月にさそはれて、いてなんごぞおもひなりぬる。

「としからぬ身一つは、やすく思ひすつれどもは、阿佛の一身は、捨てんとすれば捨

て易くして、更に死ぬるは難しとせざれどもにて、他に捨てがたき理のあるをいはんとするなり、子をおもふこゝろのやみは、なほすてがたくは、後撰集なる「人のおやの心はやみにあらぬども子を思ふ道にまどひぬるかな」といふ歌の詞によりて、子を愛し子の爲に心をつくす親の心をいふ、しのびかたくは、堪忍し能はざるにて、思はじとして、子の事は思はでは得あらぬなり、道をかへりみるうらみは、やらんかたなくは、歌道の盛衰如何を顧慮すれば、甚だ遺憾多くして、其慨歎の念は晴らし慰むる事能はぬにて、子の爲と歌の爲との二事あるが故に、惜しからぬ吾が一身をも得捨てずとの謂にて、前なる「をしからぬ身一つは云々」といへるを受けたり、さてもなほは、俗言に「ソレデモヤハリ」といふ意にて、さてもは上文にある如く、頼みとする財産を失ひて、親子諸共に殆んど命も消えんとする場合に臨みては、あれども意なり、あづまのかめのかゝみにうつさば、關東鎌倉の政断を仰ぎ、裁決を請は、いゝの意にて、龜鑑といふ語をそのまゝに、かめのかゝみと譯せり。鏡といふより、又うつすともいへり、くもらぬかけもやあらはるゝは、明白なる裁決にて、正理の立つ事も、或はあらん意にて、是又鏡といふよりの文にして、其實は讓狀の確證ありながら、無理に略奪せられたる所有權を取戻さんとするも、到底京都にては力及ばず、依りて此の上は鎌倉の政府に訴へたらば、或は明白なる裁決にて、正理の行はるゝ事もあらんかといふ意なり、せめて思ひあまりては、深

く切に思ふ念の心に溢れてといふ意なり、せめては迫りてにて古今集の歌にいとせめて戀しき時は初廣のなきてわたると人はしらすやとよめる如く、切迫する意なるを、後世に轉じて俗言に「セメテ云々ナリトモ」と其の一端を望む場合にいふ事あれば、此所も其の意に聞ゆるか如き傾きなきにあらねど然らず、よろづのはいかりをわすれは種々嫌憚すべき事は多けれども、そは皆放棄してといふ意にて、婦女の身には萬事柔順に謹慎を守るべきなるを、遙かに鎌倉にまで出で向ひて、起訴せりとするは甚不相應なる事なれば、必ず世上よりは悪しくいはるべき事とはしりてあれど、それらのことは、悉皆念とはせずしてなり、身をえらなきものになしはて、は要なり無益無用といふに同じけれども、益字ならば「やうと書くべく、用字ならば「よう」と書くべし、えう」とある以上は、無要の字を充べきなり。さて此詞は伊勢物語に「其の男身をえうあきものにおもひなして、京にはあらず、東の方にすむべき國もとめにて、ゆきけり」とある文に據れり、ゆくりもなくは不意にといふ意、突然と譯してもよし、「いざよふ月にさそはれていでなんとぞおもひなりぬる」は十六夜の月の山を出づるに誘はれて、我れも都を出で離れんと思ふ心になれりにて、後宇多天皇の建治三年十月十六日に、京を發したるをいふ。さて此詞は源氏物語夕顔巻に「いざよふ月にゆくりなくあくかれんことを女はおもひやすらひ云々」といへるによれり。さて前條の「あどふ法のともし火

もといふより、以下此所までの文中には、憂若慷慨の情溢るゝが如く、又阿佛の活潑なる精神も、凜乎として顯れたりといふべし。

さりごとふんやのやすひでが、さそふにもあらず。すむべき國もむるにもあらず。ころはみふゆはじめのさだめなき空なれば、ふりみふらずみ、時雨もたえず、あらししにさほふこの葉さへ、涙さふもにみだれちりつゝ、事にふれて心ほそく、かなしけれご、人やりならぬ道なれば、いさうしごとでも、ごごまるべきにもあらで、何ごなくいそきたちぬ。

「さり」とは前文をうけて、右の如く旅立つとの意、ふんやのやすひでがさそふにもあらずは、古今集に、文屋康秀が三河のぞうになりて、あがた見にはえいてたゝじやど、いひやりけるかへりたせに、よめる小野小町、わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなんどぞおもふ」とあるに據り、すむべき國もとむるにもあらずは、伊勢物語に「昔男ありけり、京やすみうかりけん、あづまの方にきて住所求むとて、友とする人ひとりふたりしてゆきけり」とも、京にはあらじ東のかたにすむべき國もとめにて、ゆきけり」ともあるに據りて、この三事いづれも歌

人の上にして、東の方に行く旅の事なれば、對句の如く引き出でおもしろくいへり。ころはみふゆたつはじめは、時は冬の始めにて「みふゆ」は萬葉集に「民布由都藝芳流波吉多禮登云々」とありて、眞冬の義にて、たい冬といふにおなじ。此時十月なればなり。さためなき空とは、即次きにいへる時雨のふりみふらすみするにて、次に引く後撰集の歌詞による「ふりみふらすみ時雨もたえず」は、後撰集の歌に神無月ふりみふらすみさだめなきしぐれぞ冬のはじめなりける」とある詞によれり。「ふりみふらすみ」は、俗言に降たり晴たりといふに同じ。「み」は見の意試るにて、はれみくもりみなどもいへり。あらしにきはふ木の葉は、嵐に散る木葉にて、きはふとは盛に散り亂るさまをいふ。ことにふれて心細くかなしとは、時雨につけても見る物聞く物、毎にわはれを催すをいふ。人やりならぬ道なれば、いさうしどもといまるべきにもあらで「は、古今集の歌に「人やりの道ならなくに、大方はいさうしといひて、いさかへりなん」とあるによりて、いささかひひさまをかへたるなり。人やりの道は他人の命令して遣る旅路の事にて、自身の心より發して行くを人やりにあらざる道とするなり。阿佛が今度の旅行は、素より自身の意より發して、行く事なるか故に、人やりならぬ道といひ、いさうしは、往愛しにて、俗言に「イキトモナイ」といふに同じ。なにどなくいそぎたちぬは、何故といふ事もなく、そゝるに急ぎて出立せりととなり。さて此記文の總體に付つきてつらくおもふに、當時亂

世打續きて、道義といふ事は、地を拂ひたる状思ひやられ、又子の爲家の爲に、一身を放棄して、東下の逆旅を思ひちけん慈母の真情、退懷感慨するに餘りありとすべし。さて其憂苦の中にして、しるせる實記なれば、文勢にも自然氣韻あるを、又所々に古歌古文の詞を引用し對句を構へ、縁語を挟みて、文章の雅をも具備したるは、爲家卿の室たる當時の女史の作といふべき。

式乾門院のみくしけごのさきこゆるは、久我の大政大臣の御むすめ、これも續後撰よりうちつづき、二たび三たびの家々のうちぎにも、歌あまたいりたまへる人なれば、御名もかくれなくこそ、今は安嘉門院に御かたごて、さぶらひたまふ。

式乾門院は後高倉院の皇女にて、御名は利子と申し伊勢の齊宮に奉仕したまひしが、御歸京の後、四條院の御准母となりて、皇后宮の御稱を帯したまひしは、拾芥抄に「御櫛笥殿、在、眞觀殿、中、以上藤女房、爲別當」といひ、禁秘抄に「御連殿別當是非女御更衣之儀、只御所中、沙汰人也、上古、不絶有之内藏寮、外御服裁縫所也」とありて、元來は御理髮の爲めに御櫛笥の調度を置れたりけんも、後にはまつたく御服を裁縫する所となり、其所の別當になるは、上藤の女官なれば、陛下の御手をふれさ

せたまふ事もありて、更衣に似奇りたる事となれり。更衣といふ名稱も、元來陛下の御衣の事に奉仕する謂なれば同義なり。さて拾芥抄禁秘抄に出でたるは、禁中の御櫛箆殿なれど、後には禁中のみならず、他所にても、裁縫所と稱し其所に居る人をもいへるにて、源氏物語帶木卷に「わがみくしげどのにのたまひて、さうぞくなどもせさせ給ふ」とあるは、源氏君の二條院の中なるみくしげどのなり。此所なるも、式乾門院の御殿にてみくしげどのを勤めたまへるをいふ。久我大政大臣は通光公なり、續後撰は深草院の御時の勅撰續後撰和歌集、事うちぎといふは、私に撰ひ集むる歌集の稱にて、時々聞きおける歌を書き集めたる謂なり。御名もかくれなくこそ、その下に、あれといふ結語を省けるなり。安嘉門院は、前なる式乾門院の御妹にて、邦子と申し、これも後堀河院の御准母となり、皇后と稱し奉れり。御かたといふは、其の人をや、敬して、指す稱にて、北の方奥方などいふに同じ。源氏物語玉かつらの卷に「御方ははやううせたまひき」とあるは、母上を指す。落窪物語に「君だちともいはず、御勞とは、ましていはせたまふべくもあらずともあり、此所にては、久我大政大臣の御娘が、以前は式乾門院の御殿にて、みくしげ殿と稱して仕へ居給ひしを、今は安嘉門院の御殿にて、御方と稱して仕へ居給ふとなり。

あづま路おもひ立ちし明日ごとて、まかりまうこのよしに、北白河

のへまゐりしかご見えさせたまはざりしかば、こよひばかりのいでたちものさわがしくて、かくこだに、聞こえあへず、いそぎ出こにも、心にかよりて、おこづれきこゆ。

「あづまちおもひたちし明日とては、阿佛尼が東行の發念を以て、いよく發途せんと定めたる日の、明日となれる前日にてといふ意にて、立ちしの下に詞を省けり。まかり申しのよしに」とは、暇乞の故にといふ意にて、まかり申しは、京都を退きて他所へ行く事を申し陳ぶるを、一の名詞としたるにて、暇を乞ふ事を、いとまごひといふ名詞とするにおなじ。北白河のとは、安嘉門院の御殿をさせるにて、京の北白河に、安嘉門院の御殿のありしが故なり、見えさせたまはざりしかばは、御かた即けみくしが、其御殿に、居らざりしに依りてといふ意なり。こよひばかりのいでたちものさわがしくては、既に明日發足なれば、其出立の準備は、今夜一夜のみなるが故に種々繁雜なるをいふ。かくとだに、聞えあへずは、明日發足して、東行すといふ事だけでも、報知する暇なくといふ意、いそぎいでしにも、大急ぎにて京を出立したりし事につけてもといふ意なり。こゝろにかゝりておこづれ聞こゆは、其の事が氣に係りて、安からねば文通したりとなり。

草の枕ながら、年さへくれぬる心ほそき、雪のひまなさなごかきあ

つめて、

消えかへりながむる空もかきくれてほごは雲居ぞゆきになり
 ゆくなごきこえたりしを立ちかへりそのかへり事たよりあらば
 こころがけまゐらせつるをけふはるはすの二十二日ふみ待ち
 得てめつらしくうれしさまづ何事もこまかに申したくさふらふ
 にこよひは御方たがへの行幸の御うへごてまぎるゝほごにて思
 ふばかりもいかゞほいなうこそ御たびあすごて御まゐりあり
 ける日しも峯殿の紅葉見にこて若き人々さをひにしほごに後に
 こそかよる事ごもきこえぬひしかなごやかくごも御たづね候は
 ざりし

ひごかたに袖やぬれまし旅衣たつ日をきかぬうらみなりせば
 さてもそれより雲になりゆくこおゑはかりの御かへりごごに
 がきくらし雪ふる空の眺にもほごは雲居のあはれをぞしる

あればこのたひはまだたつ日をしらぬごある御かしへばかりを
 ぞきこゆる。

心から何からむらん旅衣だつ日をだにもしらすがほにて

草の枕ながら云々雪のひまなごまでは前にいへる京への文通の消息文の大意
 をいへるにて阿佛尼が旅のまゝにて一年の暮とさへなれるが心細くかなしき
 事又日々雪のふる事杯を書き記したるをいふ消えかへりなむる空もかきく
 れての歌の消えかへりは魂も消え失するが如くかなしきさまにて此類のかへ
 りは熱湯のにえかへる又人身の死ぬやうに思はるゝをしにかへりなごいふに
 同じく反覆の謂にて其事の甚たしきをいふ詞なりかきくれては雪氣の爲めに
 空の暗くなるに年の暮たるをかけたなりほごは雲居といふ詞は伊勢物語の歌に
 忘るなよほごは雲井になりぬごも空ゆく月のめぐりあふまでとあるに據りて
 都を遠く隔て其間の雲居といふばかりなるをいひて空の雪景色になりゆく
 につけたるなり立ちかへりその御かへりごとは前の如く阿佛よりいひ送り
 しに直に引返して都よりの返翰ありしをいふたよりあらばごよりは都よりの
 返書の詞なりたよりあらばごころがけまゐらせつるをは鎌倉の阿佛の方へ
 の便あらば書を贈らんとかねて心に思ひ居たりしにといふ意にてあらばの下

に、數句を省けり、けふはしはすの廿二日、ふみまちえてめづらしくうれしきとは、今日十二月廿二日に、阿佛の書を得て、久しぶりなれば、珍しくもうれしくも思ふといふ意にて、うれしきの「さ」は「ま」といふ義、うれしき形状をいふ言にて、其詞には幾分かの餘意を含めり、まづ何事もこまかに申したく候には、たま／＼書を得たるうれしさに、萬事はさしおきて、かねていひおくらんと思へる事をも、細密に書きておくりたく思ふにの意にて、次きの文へかけたり、こよひは、御方たかへの行幸の御うへとは、今夕は、陛下の後宇多御方違への爲めの行幸あるに關しての意、方たかへといふ事は、中古以來の習慣にて、天一神中神といふものゝ居る方角へ行くを忌む爲めに、一旦他の方角へ行きて、其方角を轉ずる謂にて、陰陽師のいひ出でたる事、中古の書に多く見ゆ、今俗に、フサカリといひて、忘む是なり、此の時陛下方違への爲めに、安嘉門院の北白河殿へ、行幸あるべきよし、御沙汰ありて、繁雜なりしなるべし、御うへとは、といふ詞は、少しいひ足らざるやうなれど、行幸の事にてといふが如し、まざるほどにて思ふばかりもいかゞ混雜の時にて、我が心に思へるほどの事を申さんとするも、いかでか申し得んにて、いかゞの下に申しのべんなといふ詞を省きて、含めたり、はいなるこそは、本意なくこそ思へを例の省けり、御たびあすとは、御まわりありける日しも、阿佛の旅出明日なりとて、其の前日に當御殿へ御出でありし其の日に限りてといふ意にて、前條に

「北白河殿へまわりしか」とある時の事をいふ、峯殿の紅葉見にとて、若き人々をそひにしほほには、光明峰寺道家の邸なる紅葉見んと、若き女房たちが誘引せしに、同伴せし間にての意にて、光明峯寺殿といふを略して、峯とのといひしにて、峯殿の稱増鏡其他の書にも見えたり、さて此殿下の別業は、北白河に在りしか故に、安嘉門院の御殿より近れば、見物に行きたるなり、後にこそかゝる事をもきこえ候ひしかは、後日に致りて、阿佛が旅行の事及び暇乞ひに來りし事なぞを聞きたりの意なり、ことども「の下」とを、殘月抄には、濁りて事をもとよめり、但し是は「事」といふにも、を添へたるを見るを可なりとす、又「さこえ」といふ詞も、此所には少し分ならざるやうなれば、さゝえにて聞えと書きたるを、讀み誤りたるには、あらざるか、なぞやかくとも御たづね候はざりし、旅行の一件を、何故に豫め御しらせ下されざりしと答めたる意なるべし、なぞいふ下は、必ず「か」といふべきを、なぞやといふは、誤りなれど、此の時代は既にかくもいひしなり、たづねといふ詞も、此所には少し當らざるやうなれど、其の事を告ぐる爲めに、阿佛の訪問すべきに、然らざりしをいへるにもあるべし、ひとかたに袖やぬれまし旅衣云々の歌意は、三四五一二と句をつらねて聞く意にて、阿佛の發足の日をきかずして、別れしならば一方にのみ、なみしく思ふべきを、其發日は聞きながら逢すして、別れたれば、一方ならず歎くといふ意にて、深く甚しき事を一方ならずといふより、其反にて、ひとか

たに袖やぬれましといへり袖といひうらみといへる皆衣の縁語なるはいふまでもなしさてもそれより別の事は其通りとして其の後の意雪になりゆくとおしはかりの御返事は前の阿佛の歌にほゞは雲居を雪になりゆくとする意の御返歌けて漸々時候も移りて今雪降る空となりゆくを推測りまゐらす意の御返歌といふ意か又は前の歌に阿佛が推しはかりにいへる其歌のかへり事といふ意か少しまさらはしされど次の歌に雪ふる空といへるは京の事の如くなれば後の解釋の方ならんかかきくらし雪ふる空のなかめにも云々の歌は空暗く曇りて雪の降る空をながむる物思ひにつけても遠方の旅にある人の感情を思ひやるといふ意にてながめは空を見るに物思の事をかけほゞは雲居といふ詞は前の阿佛の歌詞によりてほゞは雲居とよめる人のあはれといふが如くなれば京よりも趣かに遠き鎌倉の空を思ふ意をもかねたりさて此歌までが京よりの消息文なりとあればは古の如くいひおくられたればなりこのたびは又とは更に阿佛よりいひおくるにはなりたつ日をしらぬとある御かへしばかりをぞきこゆるは前の書面の中にてたつ日をきかぬうらみなりせばといふ歌の返事のみを申し送るとなり心から何うらむらん旅衣云々心から何うらむらんは自身の心よりして恨みといふは何故ぞと咎めたるにて下句のたつ日をだにもしらず顔にては阿佛の旅立する其日をも知らぬよりしての意にて京を出で立つ事は前

日に北白河殿へ参りし時明日發足のよしは申し置きたるか故に必ず聞きたまへるならんを發足の日に來訪もせらるべきを其事もなくして今日に到りて恨みがましくいはるゝは何ゆゑを過ちは自身の上におりながら一方ならず袖ぬるゝなどいはるゝは心得がたしとなじりたる意なり五句のしらす顔は知りたる事知らず顔して來らざりしをいへり此の段の歌をも四句ともにいづれもたくみにておもしろし

あかつきたよりありさきゝて夜もすがらおきゐてみやこの文ごもかく中にここにへたてなくあはれにたのみかはしたるあね君にをさなき人々の事さまぐにかきやるほゞれいの波風はけしくきこゆればたゞ今あるまゝの事をぞかきつけける

夜もすから涙もふみもかきあへずいそこす風にひこりおき居てまたおなじさまにて戀ひしのぶおごうこの尼上にもふみたてまつるこていそものなごのはしばしもいさゝかつゝみあつめて

ま
人

「あかつきたよりありとき」ては、明日の曉に鎌倉より京都への幸便有りと聞き
てなり、夜もすがらおきぬて都の文をもかく中に終夜寐ねず起き居て、京都へお
くる書翰等を書く其中になり、ことにへだでなくおはれにたのみかはしたる姉
君には、殊更に隔意なく感情を以て、互に深く頼み合ひたる姉君の許になり、この
阿佛の姉は中院中將とも、三位入道ともいへるよし、下文にあり、をさなき人々の
事さまざまにかきやるほどは、吾が子の幼稚者の身上の事を、種々に頼み遣す事
を書きて居る間に、をさなき人々とは、爲相爲守なとの事なり、れいの波風はけ
しく聞ゆれば、いつもの通りに海上の波風の音烈しくひき来ればなり、たい
今あるまゝの事をぞかきつけけるは、目今見聞して居るありのまゝの事を書翰
に書きしるしたりとなり、夜もすがら涙も文もかきあへず云々は、終夜起き居て
文を書けども、書き終へかたく、又袖におつる涙も拂ひ果つる事を得ずして悲し、
それは海岸の磯を越ゆる波風の音かなしければといふ意にて、此歌は一四五二
三と句をつらねて聞く意なり、かきあへずといふ詞は、文の方にはよくきこえた
れど、涙の方には少し遠けれを涙を掻き拂ふといふ事あるが故に、涙の方にては

いたづらに、めかりしほやくすさびにも、こひしやなれし里のあ

「かきあへずは拂ひあへずといふ意にいへるなり、又おなじさまにて前に、ことに
へたてなくおはれに頼みかはしたるといへるを受けて、同様にといふ意なり、古
郷には戀しのふおとうとの尼上」とは、古郷の京都にては戀ひしく慕ふ妹の尼と
いふ意にて、昔は女兄弟にても次きなるをおとうといへること、諸書に多く見
ゆ、尼上と敬していへるは、妹ながら佛門に入りて、尼になりたるが故なり、文たて
まつると敬していへるも同じ、いそものなごのはし、は、海岸の磯にある物の
一端といふ意にて、次の歌に、めかりといふ詞あれば、海藻をひさか書翰中へ入
れたるなるへし、いたづらにめかりしほやくすさびにも云々は、今阿佛が鎌倉の
海邊にありて、用もなく海藻もかりもし、また鹽を焼きなごして、居る手わざにつ
けても、かねて馴れ交りし京の尼上が戀ひしき事なりといふ意にて、現に阿佛は
海藻を刈り鹽を焼く事なごせしには、あらざれば、海岸に居るによりて、かくいひ、
又尼の言の海土に通ずるより、尼上を海土人といへり、さて、めかりしほやくとい
ふ詞は、萬葉集の歌に「しかのあまのめかりしほやきいとまなみ」といふがあるに
よれり。

ほごへて、おごゝひふたりのかへりこごいさあはれにて見れごあ
ねぎみ、

たまづさをみるに涙のかゝるかないそこす風はきくこゝちし
てこの姉君は、中の院の中將さきこえし人の上なり。今は三位入道
ごかをなじ世なから遠ざかりはてよ、おこなひ居る人なり。其おこ
うこの君もめかりあほやくごあるかへりごご、さまぐにかきつ
ゝけて、人こほる涙の海は都にも枕の下にたゝへてなご、やさしく
かきて

もろごにもめかりあほやく浦ならばなかく袖に波はかけじ
をこの人も安嘉門院にさぶらひしなり。つゝましくする事ごもを
思ひつらねて、かきたるいごあはれにもをかじ。

「はとへては前に書をおくれるより月日過ぎてなり」このおとゝひふたりのかへ
りごといとあはれにては、此兄弟二人の返事ありしが甚だ感情ありてといふ意
にて「おとゝひは兄弟のなり、兄弟姉妹を古くは「おとゝひ」といひしが、後にはおとゝ
ひといへり」見ればは、其返事を抜き見ればにて先づ姉の書中にある歌を出たせ
り「たまづさをみるに涙のかゝるかな云々」は、阿佛より送れる書翰を見るにつけ

て落涙す、磯こす風をよみて、おこせたるその波風の音は、現に聞く如き心ちして
といふにて、此歌は玉づさを見るに、磯こす風はきく心ちして、涙のかゝるかなと
いふ詞の順なり。さて「みる」といふ詞は、海松の事にも通へば、その海松に涙のかゝ
るといふ詞のあやなるべし「たまづさ」といふ詞は、萬葉集に使といふ事の冠辭に
置たるより出て、後世は書翰をさして直にたまづさといへり、此詞は甚だ解しか
おたき事にて、おのれ既に古今集講義にいひおけり、其の説は長くして煩らはし
ければ、今は略す「このあね君は」といふよりは、この人の身上の事をいへるなり、中
院の中將と聞えし人の上なり」とは、其稱を中院中將といひて、世に其名聞えし人
なりの意なり「うへ」とは身、上の義なり、今は三位入道とかは、近來は三位入道と稱
すとか聞くといふそにいへるなり「おなじ世ながら遠ざかりはてよ、おこなひゐた
る人なり」とは同じ今の世に在りはすれども、佛門に入り尼となりて、普通の世の
中には遠き身にて佛道を修行して居る人なりとなり「遠ざかる」とは、別世界に居
る意なり「そのおとゝひの君は右の三位入道に對して、妹君の義これよりは、妹よ
りの返事のとをいふなり」めかりしはやくとある返事さまぐにかきつけては
前に阿佛よりめかりしはやく云々の歌をおくれる其返事を御々書きてといふ
にて、其返事の文は、はぶきたるなり「人こふる涙の海は、都にもまくらの下にたゝ
へては、返事の中にある文にて、人戀る涙の海」とは、妹が阿佛を戀しくおもふより、

こぼるゝ涙の海をなせるをいひ「都にも枕の下にたゝへて」とは阿佛の鎌倉の海邊に居て、海藻刈り鹽やきなどして居るといふに對して、吾居る京都にても涙の海といふ海は、枕の下にありとなり「やさしくかきて」は右の文のおもしろきをほめて、風流に書きたりといふ意なり「やさし」は古言にてははつかしき意なれど、此時代になりては、後世の意を以てつかへり「もろどもにめかりしはやく浦ならば云々」は姉阿佛と共に鎌倉の海邊にあらば、却りて袖に涙のかゝらじを、獨京都に分れ居るが故に、涙に袖をぬらす事なりといふ意にて、海邊に居る身は袖に涙のかゝるが當然なれど、姉と共に居らば、歎く事あらじといふ意にて「なか〜」といへるなり「この人も云々」は前條に、久我太政大臣の女の安嘉門院に仕へたる事をいへるを受けてこの妹も同じく同院に奉公したる者なりといへるなり「つゝましくする事どもを思ひつらねてかきたるもいとあはれにもおかし」は其書翰中に書きたる事を評したるにて「つゝまし」ははづかしく遠慮ある意なれば、此人何か世に憚り遠慮ある事情ありて、其事を思ひつゝつけたる文ありしなり「いとあはれにもおかし」とは、其心情を察して、感然にもあり、また文言のおもしろくもありと、兩方にいへるなり。

此段、當時婦人社會にしての交際、及び文通の様現に見るか如く、互の戯ふれもあり、實情もある趣き味はふべし、又姉妹の間の心情のこまやかなるさまも、見るべし。

きふしありなは文章のみならず、おもしろければ、拔萃して解釋を加へたり。卯月のはじめつかた、たよりあれば、またおなじ人の御もごへ、こそ夏のこひしさなごかきて、

見し世こそかはらざるらめくれはて、春より夏にうつる梢も、なつ衣はや立ちかへて都人いまやまつらん山ほこゝぎす、そのかへりこそまたあり、

草も木もこそみしまゝにかはらねごありしにも似ぬ心ちのみして「さてほこゝぎすの御たづねこそ、

人よりも心つくしてほこゝぎすたゞ一こゑをけふぞきよつる、

「卯月のはじめつかた」は、前に出だせる條より年かはりて、建治四年即ち弘安元年の四月の初なり、たよりあれば、鎌倉より京都への幸便あるをいふ、またおなじ人の御もごへは、この前文に出でたる爲教の女爲子といひて、大宮院に仕へ、權中納言の君と稱せる人の許へなり、こそ、その春夏のこひしさなごかきては、去年の春夏の頃は、阿佛もいまだ京都に在りし事なれば、右の權中納言にも常に逢ひ談らひ

しを思ひ出で、其の時を戀しく思ふよしを書翰に認めたるをいへるにて、其の文言は略して意をいへるなり。さて、其の書翰の末にかける歌を次ぎに出だせり。「見し世こそかはらざるらめ」の歌は、三四五句より初二句へかへる意にて、既に今年も春は暮れはて、四月となれるが、この春より夏にうつる空のけしき及び花散りて若葉にかはりゆく木々のけしきなども、去年京にありて我が見し時と、今年此頃と別に變はりたる事なくて、其の野山の風景をも君は相變はず見たまふならんといふ意にて、われは、今鎌倉に在りてその京のけしきをも見る事能はずと歎く意を含めたり。初句の「見し世こそ」といふ詞は、少しいひ足らざる方なれど、見し世のさまこそといふ意なり。さて春より夏にうつるは物の變化する事なるを、二句のかはらぬといふ詞の反對としたるが、此の歌の趣向なり。夏衣はやたちかへて「の歌は、專、夏の方のみをもてよみて、都人は今は既に衣服をも夏の式に着かへて、郭公の初音などを待ち居るならん、さてくうらやましき事なるかな」といふ意を含めて、鎌倉に居る我が身は然る事もなしと下に歎きたるなり。さて都人といふは權中納言を指したる意なり。そのかへりことまたありは、右のとどくいひ送りたる返事ありといふを、この前條に同人よりの返書ありし事をいへるに對して「また」といへるなり。草も木もこそみしまゝに「の歌は、前の「見し世こそ」の歌の返歌にて、前の歌に、春より夏にうつる梢はかはるも見し世のさまは變

はらぬといへるを受けて、草木のありさまも去年の春夏に少しも變はらざれど、猶去年には似ざる心ちのみするといへるにて、阿佛の京に居らざるが故にさびしく思ふといふ意なり。此歌の爲に新古今集の小町の歌を殘月抄に引出でたれど、これは引歌に及ばず、さてほとゝぎすの御たづねこそは、前の歌に、都人今やまつらぬ山時鳥とあるを受けて、次ぎの歌にいひかけたる詞にして、この返歌には一の寓意あるを、ことさらにあらはさん意を以て、わざとかくいへるなり。人よりも心つくしてほとゝぎす云々は、他の人々も時鳥は待つなれど、その人々よりも我れはことに心を盡くして、時鳥の一聲を今日聞得たりといふにて、さるは眞の時鳥の事にあらず、阿佛よりの書翰を得て、その歌を聞得たるをよるこそよといふ事を、時鳥にかけていひなしたるなり。故に前文に「ほとゝぎすの御たづねこそ」を念を入れていへり。

さねかたの中將の五月まで時鳥きかて、みちのくにより、都にはさよふるすらんほとゝぎす關のこなたの身こそつらけれ、こかや申されたるこの候な、そのためしと思ひ出でられて、この文こそここにやさしく、なごかきておこせたまへり、

これより以下も前のついきにて權中納言の返書の中にある詞のことなりこの實方朝臣の歌は、續後撰集夏部に出で、はし詞に、みちのくにの任に侍りけるころ五月まで時鳥きかざりければ都なる人に便につけて申つかはしける藤原實方朝臣とありて此の歌あり、但し二句はさゝふりぬらんとあり、關のこなたとは函根關より此方の意にて所謂關東の謂なり、とかや申されたるこの候なは、右實方が云々の歌をよめりし事ありしやうに存候といふ書翰の文にて、なといふ言を添へたるは人に對ひて語る時のさまにて、今、俗の言にナ一といふ言を附するに同じ、書翰文に「候」といふは、中古より始まりて、諸家の記録東鏡の類に多くみえたるを、是の如き女のかな消息文にも、此頃より用ゐしなり、そのためしと思ひ出でられて此文こそことにやさしくは、右の實方朝臣の先例同様の事と思出で、今阿佛よりの書翰は殊に優美風流にうけたまはれりとの意にて、やさしくの下に思ひ侍れといふ詞を省きたり、さて此所まで權中納言よりの文言を擧げたるなり故に「なぞかきておこせたまへり」といひそへたり

さるほごに、卯月の末になりければ、ほごぎすの初音ほのかにも思ひたえたり、人づてにきけば、ひきのやつといふごころに、あまた聲なきけるを人ききたり、なごいふをききて、

るのびねひひきのやつなるほごぎす雲るに高くいつかなのらん、なごひごり思へごも、そのかひもなし、もごよりあづまちは、みちのおくまで、昔より時鳥まれなるならひにやありけん、一すぢに又なかずばよしまれにもきく人ありけるこそ、人わきしけるよごころづくしにうらめしけれ

「さるほごに卯月の末になりければ、前文を受けて既に四月の末になれるをいふ、さるほごにといふ詞は、然有る間にといふ意なれど、後世は甚だ軽く發語の如くいへるもありて、此所なるも、さてといふほごのさまなり、時鳥の初音ほのかにもおもひたえたりは、此の鎌倉にては、時鳥のなかざるやうなれど、尙、四月中はさりとともと思ひたりしに、四月も末の頃となりぬれば、到底かすかに聞くこともかなはざる事と斷念したりとなり、人づてにきけばは、或る人のかたるまきけばなり、ひきのやつといふごころに、あまた聲なきけるを人ききたりは、其の人傳に聞きたる趣きにて、ひきのやつは、鎌倉の地名比企谷にて、元來比企は武藏國比企郡より出で、比企判官能員といふ人あり、其の人が住居したるより比企谷といふ地名出たるよし、鎌倉志に記して、殘月抄にも引出でたるが如し、谷をヤツといふ

は扇谷月影谷など多く類ありて當時相模國の方言なるべし。わまた聲は鼓聲の文字をよめる一の名詞なり。人さゝたりの人阿佛に語りし人とは又別人なり。しのびねはひさのやつなる時鳥云々のしのびねは時鳥は五月になくものど定めて古歌におのか五月ともいふ如くなれば四月鳴くをしのび音といふ。さて其のしのび音は高くはなかなぬものとして低しといふ意に比企谷にいひかけたり。雲むに高くいつかなのらんは、その忍音に低く鳴く時鳥の大空に公然と聲高く鳴くは何時ならんと待つさまにいへるなり。さて此の歌は表面は時鳥をよめるなれど、下の意には我が身の上を寓して、阿佛が例の告訴の件の本意達して公然と其の事を口に唱へん時節はいつならんと待遠に思ひ歎くよしをたとへたるなり。故に次のなほひとり思へどもそのかひもなしといふ詞も時鳥の事のみには非ざるなり。もとよりあづま路はみちのおくまで昔より時鳥まれなるならひにやありけんは、前に權中納言よりいひおこせたる實方朝臣の故事を思ひ合はせて、單り鎌倉のみならず、元來、東國は陸奥かけて昔より時鳥の少なき習慣なりしならんとなり。一すぢに又なかずはよしは、時鳥なかずとならば一向に鳴かぬ。まらばそれにて可なりなり。まれにもさく人ありけるこそ人わきしけるよと心つくしにうらめしければ、前にある人傳の語を以てみれば、比企谷邊にて聞きたる人もあるなれば、斷じて鳴かざるには非ず。たまさかにはなくなれば、人物を監

別して我が身にはさかせざるやうに思はれて遺憾千萬なりとなり。また和徳門院の新中納言ときこゆるは、京極の中納言定家の御むすめ、深草のさきの齋宮ときこえしに、父の中納言のまゐらせおきたまへるまゝにて年經たまひにける、この女院は、齋宮の御子にしておまつりたまへりしかば、つたはりてさふらひたまふなり、うき身こがるゝもかり舟、なごよみたまへりし、民部卿のすけのせうごにてぞおはする。

「和徳門院は仲恭天皇の皇女にて御名は義子と申し内親王にて准三宮にまじけるが、弘安十年尼となり給ひ法名を眞如覺と申せり。新中納言ときこゆるは云々」はその和徳門院の御方にて新中納言と稱して奉仕し居るは、定家卿の女なりといふにて、御むすめの下に「にて」といふ詞をそへて聞くべし。深草のさきの齋宮は後鳥羽院の皇女にて、御名は瀬子と申し伊勢の齋宮に奉仕したまひしが、寛喜二年尼となりたまひ深草齋宮と稱し奉れり。齋宮は既に退き給ひし後より、さきのことはいへり。きこえしには、さきこえし御許にの意なり。父の中納言のは、父、定家卿がなり。まゐらせおき給へるまゝにて年經たまひにけるは、其の女を參勤せしめ置

きたるが、それなりに數年を経たるなりの意にて、けるの下に「が」といふ言をそへてきくべし。此の女院は齋宮の御子にしたてまつり給へりしかばは和徳門院義子を深草齋宮熙子の御子分になしたまひてありしが故にの意、つたはりてさふらひたまふなり」とは右の緣故によりて齋宮の御方より門院の御方へ移り、引續きて新中納言の奉仕せるをいふ、うき身こがるゝもかり舟は、續後撰集戀五に出でたる歌にて、濁り江にうき身こがるゝ、藻荇舟はてはゆきゝのかけだにも見ず」といふ歌の事なり。民部卿のすけは、これも定家卿の女にて、續後撰に後堀川院民部卿典侍とありて後堀川院に仕へて民部卿と稱し典侍となりたりしにて、典侍はないしのすけなるを略して、たゞすけといふ例なり。さて前にいふ新中納言は、この民部卿の姉なりとなり、せうとは、兄人の義にて多く男子にいふ例なれど、此頃は姉といふべきをもせうといへり

さる人の子にて、あやしき歌よみて、人にはきかれじと、あながちに
つゝみたまひしかご、遙かなる旅の空おぼつかなさ、あはれなる
ことどもをかきつゞけて、

いかばかり子をおもふ鶴のさびわかれならはぬたびの空にな

くらん、ご文のこごばにつゞけて、歌のやうにもあらずかきなした
まへるも、人よりはなほざりならずおぼゆ、御かへりごごは、
それゆるゑにさびわかれてもあしたつの子をおもふかたはなほ
ぞかなしき、ごまごゆ、

「さる人の子にて」は然有る人の子にしての意にて、然有るとは前文にいへる詞を
受けたるなれど、其の意は有名の定家卿の子といふ意なり、あやしき歌よみて人
にはきかれじは、變なる歌をよみて世間の人に聞かるゝ事はななさじとの意にて
「あやしき」とは、歌の不良なるをいふなり、あながちにつゝみ給ひしかごは、強ひて
遠慮して歌はよまさりけれどもなり、つゝみは包藏する意にて、遠慮して慎むを
いふ、遙かなる旅の空おぼつかなさには、今阿佛が遠く鎌倉に在る旅行中を如何
と案ずる心にての意、あはれなるといふもをかきつゞけては、感慨有る言どもを文
に書列ねてといふ意にて、其の文言は出ださずしてその文意の大概をいへるな
り、いかばかり子を思ふ鶴のさびわかれ云々の歌は、鶴の子を思ふといふ事ある
を以て、阿佛の幼児を京に残し置きて鎌倉の旅に在る情を鶴にたとへてよめる
にて、いかばかりは俗言にドノクラ井ニといふ意にて、此の句は子を思ふといふ

に係りたれど、下句の旅の空になくらんといふ詞にも自然かゝれり、とびわかれは鶴の空に飛別かれたるを阿佛の鎌倉に別かれ居るにもたとへたり、ならばぬたひは、馴れざる旅、なくは鶴の鳴くに阿佛の泣くをかけたなり、文のことはにつけて歌のやうにもあらずかなしとは、歌を書くには文章と別を立て、書くが普通なるを、書翰の文言にかきつけて歌とも思はれざるやうに書きなしたりとなり、枕草子に、御めのどのたゆふけふ日向へ下るに云々といふ條に、あかねさす日にむかひても思ひ出でよ都ははれぬながめすらんとといふ后宮の御歌を記して、ことばに御手づからかゝせたまひしといへるも、歌とはみえざるやうに書きしるしたまへる事にて、このさまに同じ、人よりはなほざりならずおぼゆは、普通の人よりは勝りて等閑ならず非凡なりとはめたるなり、それゆゑにとびわかれても云々の歌は、前の歌を受けて、それゆゑには其の通りなればの意、とびわかれてもは、目今鎌倉に別かれ居てもにて、あしたづの子を思ふかたはなほぞかなしきは鶴の我が子を戀思ふ海邊の子漏は悲しといふ意にて、前の歌のまゝに鶴を我が身にたとへいへり、さて「かた」といふ詞は漏と方との二義をかねて、みやこの方はやはり戀じく悲しくおもふといふ意によめるなり

そのついでに、故入道大納言のまくらにもたちそひて、ゆめにみえ

させたまふよしなご、この人ばかりやあはれともおぼさん、こて、かきつけてたてまつる、

都までかたるも遠しおもひねにしのおむかしの夢のなごりを、はかなしやたびねの夢にまよひきてさむればみえぬ人のおもかけ、なごかきてたてまつりしを、又あながちにたよりたづねて、かへりこころしたまへり、さしもしのびたまへりしも、をりからなりけり、

あづま路の草のまくらは遠けれごかたれば近きいにしへのゆめ、
いづくよりたびねのゆかにかよふらんおもひおきつる露をたづねて、なごのたまへり、

そのついでには、前にある京都への返書のことになり、故入道大納言は阿佛の夫、爲家卿をいふ、草のまくらにも立ちそひてゆめにみえさせたまふは阿佛の夢

に爲家卿の事を見たることありしをいひて草の枕にも立ちそふとは旅寓の枕の邊にも立ちそひ離れずといふ意なり、この人ばかりやあはれともおぼさんどては、他の人々は此の類の事をいひおくりても格別感ずる事あるまじきをこの新中納言といふ人は實意深き人なるが故に、この人一人は同感ならんと思ひてといふ意にて、それゆゑに返書の序に此の事をも書きしるしておくれりとなり、都までかたるも遠し云々の歌は、三四五句より初二句へ反る意にて、我が思ひ寐に慕ふ昔の人の見えたる夢の後の談を、都の人の許までいひ送るもその距離の遠きを感じといふ意にて、昔しの遠きに合はせて都の遠きをいへるなり、依りて「都までかたるも」ともを加へたるに意を注ぐべし、はかなしや旅ねの夢に云々の歌は、二三四五句より初句に反る意にて、まよひきてとは爲家卿の靈の迷ひ來れるよしを、阿佛も鎌倉まで迷ひつゝ來りしにかけていへり、夢中には逢ふとみしも夢さむればあどなく消えたるその人の面影を思へば、實にははかなしといふ意なり、又あながちになよりたづねては、前にも懇切なる文通ありしに、又今度も其の返事を速かにおくられたりとの意にて、あながちは強て無理にといふ意なれば、鎌倉への便りは多くもあらぬを、無理に骨を折りて便りを探り求めて、返書を送られたりといふことにて、これ即ち此の人の眞實深切なる所なり、さしもしのびたまへりしをりからなりけり、は、新中納言よりの文通の詞なり、さて

此の詞の意は、あまり簡短なるいひやうにて明らかならざるが如し、按ふに兩義に解釋せらるれば、甲乙二説を擧げて衆評を乞ふべし、甲説を以ていはい、さしもしのびたまへりしとは、爲家卿の靈が然か阿佛の夢に通ふ如く慕ひ行き給ひしもといふ意をりからなりけり、は、訴の爲に鎌倉までも下りしをりからなればなりけり、の意にて、次ぎなる歌の「おもひおきつる夢をたづねて」とある意詞を合はせ考ふるに、しか聞てゆるなり、又乙説を以ていはい、さしもしのびたまへりしとは、阿佛が然ばかり爲家卿を慕ひしもにて、をりからなりけり、は、恰も其時なりけり、の意にて、新中納言も夢に爲家卿の事を見たるが同時なりしをいへる事とす、然るは、次なる一首に「かたれば近きいにしへの夢」とあるは、同じさまの夢を此方にてもみたりといふ事とおもはるればなり、尙、次ぎの二種の解釋を合はせてよく、味ひ考へられん事を人々に望む、東路の草の枕は遠けれを云々の歌は、上句は阿佛の鎌倉の旅寓は、京よりは遙かに遠くわれをもにて、夢の事をいふによりて草の枕といへるにて、かたれば近きいにしへの夢とは、交通を以て其の事を語り合へば、親しく近く思はるゝ爲家卿の夢の一條なりといふ意にて、遠近を對へて歌の趣向としたるは、勿論なるを、此の下句を按ふに、此頃京にて新中納言も同じやうなる夢を見たる事ありしが、故に「かたれば近き」といへるならんか、但し此歌のみにては、同じ夢をみたりといふ事は、其の證なければ、ただ文通にて夢

の趣きを語れるをきけば、目のあたりには逢ひて談話するが如しとの意と解くべきを前文を合はせて考ふるより、前説の如き説をなすなり、いづくより旅ねのゆかにかよふらん云々の歌の上句は、爲家卿の靈が阿佛の旅ねする床に通ひて見えたりしは、いかなる所より行きたるならんの意にて、下句の「おもひおきつる」はかねて爲家卿の存生中に後年の事を思ひ置きたりし意にて、即ち阿佛所生の子の爲に庄園の讓狀を書きおかれしをいふ、おくといふ詞より靈にいひかけて旅ねは草枕ともいひて露に縁あればなり、一首の意は、爲家卿の阿佛の夢にみえたるは、豫て後年の事を深く思ひ置きたりし故に、今其の事の爲に訴へを起こして阿佛の鎌倉に下り居れば、其の縁故を以て旅宿の床にも通ひゆきたりしならんか、遙かに遠き鎌倉までゆかれしは、いづれに處より行かれつらんの意にて、いづくよりといふことは、強ひて用もなきことなれど、此の時節は佛教盛んに行はれし世にて、爲家卿の靈も今は天に生れたりや、又何方に居らるゝ事なるか、今日の所在の知りたきを思ふやうの意よりいへるなるべし

夏のほごは、あやしきまでおとづれもたえて、おぼつかなさも一かたならず、都のかたは、志賀の浦波たち、山三井寺のさわぎなどきこゆるもいさよおぼつかなし、

「夏のはご」は夏の間にて前に初夏の頃、京の文通ありし事をいへる、其の後の夏中は往復もなかりしなり、おぼつかなさも一かたならずは、京の事を思ひて常に心ははれずおぼつかなく思ふも、此の節は手翰の往復も絶えられれば、その憂苦の情も一通りに非ず思ひ亂るゝよしなり、志賀の浦波たち、山三井寺のさわぎなどきこゆとは、残月抄に引きたる如く、帝王編年記に、弘安元年五月十二日己時日吉神輿三基入洛是依園城寺金堂供養也、十六日日吉神輿各歸坐とある時の事にて、志賀の浦波たちとは、近江の湖水近邊の物騒がしきをたとへ、山とは、例の比叡山の事なり、いとどおぼつかなしは、文通の絶えたる上に右等の風聞あればいよゝ心配するをいふ

からうじて、八月二日ぞ使ひまちえ、日ごろよりおきたりける人々のふみごも、とりあつめて見つる、侍従の宰相の君のもごより、五十首の和歌をよみたりけるごと、きよがきもしあへずくだされたり、歌もいさをかしくなりけり、五十首に十八首てんあひぬるもあやしく、心のやみのひがめこそあるらめ、その中に、
こゝろのみへだてずこてもたび衣、山路かさなるをちの白雲、

ある歌をみるに、旅の空を思ひおこせて、よまれたるにこそは、心
をやりにあはれなれば、その歌のかたはらにも、じちひさく、かへり
ことをぞかきそへてやる、
こひしのぶこゝろや、たぐふあさゆふに、ゆきてはかへるをちの
白雲、又おなじ旅の題にて。

かりそめの草の枕のよなく、を、おもひやるにも袖ぞ露けき、こ
あるところにも、またかへりことをぞかきそへたる、

秋ふかきくさのまくらにわれぞなく、ふりすてよこし鈴むしの
音を、又この五十首の歌のおくに、こゝばをかきそふ、おほかた、歌の
さまなごあるしつけて、おくに、昔の人のうた、

これを見ば、いかばかりか、おもひつる人にかはりてねこそな
かるれ、こかきつ、

「からうじては辛くしてにて、久しき月日を待ちわびてやうやく其の時の到れる

をいふ、使ひまちは、京よりの使の來るを待ち得たるなり、日ごろよりおきた
りける人々の文どもは、先日以來、間をおきて中止せりし京の人々の書翰類なり
とりあつめて見つるは、多き人々の書面を一時に集めて見たるにて、八月二日ぞ
といへる係りを此所にて結べり、侍従の宰相の君は爲相なり、きよがさもしわへ
す下されたりは、其の詠歌を清書もなす事能はず草稿のまゝにて送れりにて、下
されとは京都より鎌倉へなれば、下すといへり、歌もいとをかしくなり、けりは
爲相の詠草を見たるに、其の歌も上達してよくなれりとなり、五十首に十八首て
んわひぬるは、五十首の歌の中に十八首はよき歌なるよしなり、但してんわひ
ぬるといふ詞は古くはものにみえざる如くおぼゆ、歌を閲覽して點をかくる事
は、殘月抄にも引出でたるが如く、やゝ古くよりわれを、點あふといふは心得ざる
いひさまなるを、下學集辭門に「合點言、同心之義也」とあるは、今、俗にも合點を、
合點がゆかぬなといふに同じく合點は合格といふとにて、點をかけて良しと定
むる法に合へるをいふより起りて、合點の文字を再び訓讀にてんわふといひ
そめしなるべし、此の下條にも爲守より、これにてんわひてわろからん事をこま
かにしるしたべといへる詞あり、こゝろのやみのひかめこそあるらめは、例の子
を思ふ親の心の間より、おしき歌をもよしと見過ちたるがあらん意なり、心の
みへたてずともたび衣云々の歌は、心ばかりは通ひて隔て無きも山路を遠く

隔てたる地のありさまはいかなるらん知るよしもなしといふ意にて、しら雲といふ詞に不知といふ意をかけ、衣といひ雲といふ詞の縁に、隔重なと、いひてあやとなせるなり。さてこれはたゞ旅の歌としてよめるなれど、次ぎの詞にいへるが如く、全く爲相が母を慕ふ心より鎌倉の旅を思へる意なり。よまれたるにこそは「の下に、あらめ」といふ語を省きたり、心をやりてあはれなればは、思ひやりて可憐なればなり。戀ひ忍ぶこゝろやたくふ云云の歌は、朝夕に京の方へゆきもし又鎌倉の方へかへり來る雲には、わが京都を慕ふ心が共にゆきかふならんの意にて、結句をちのしら雲を前の歌詞のまゝにおけり、かりそめの草の枕の云云の歌は、爲相の作にて、上句はやはり下の意に母の旅宿を思ひよせて、下句は自分の袖の涙にぬるゝよしにて、草の枕の露けきは勿論なるを、それを思ひやる者の袖も亦露けしとなり、秋深き草の枕にわれどなく云云は、前の歌に「思ひやるにも袖を露けき」とありて、京にして泣くといへるを受けて秋も深くなれる草枕の床に我こそ泣けといへるにて、より捨て、こし鈴虫とは我が子爲相を京に残して出で來しに譬へて、終の音を「いふ詞は、三句のなく」といふに反る意なり。初句の「深き」は草にもかゝり、よりは鈴の縁なること勿論なり、五十首の歌のおくにとばをかきそふ」といふことばは、即、次ぎの「おほかた歌のさまなど」といふ、これにて「おほかた」は大體總體の意、歌の「さま」は歌をよむ事の心得方、歌の體裁の事なり。これ爲

相への教訓なり、むかしの人のうたとあるは爲家卿の歌といふが如くにて、次ぎの歌爲家卿の歌ならば子細なれど、此の歌は爲家卿の家集にもみえず、素より爲家卿の歌ならずして今阿佛のよめる歌なる事、明らかかなり、依りて考ふるに、此所の「うた」といふ文字は全く衍りにて、むかしの人の「といひさして歌につけたるにて、故人爲家卿がこれを見ば」といふ意なり。さてこれを見ばいかばかりかと云云の歌は、少し解しがたき歌なれど、初二句は故爲家卿がもし今尙存在してこの歌をも見たらばいかばかりうれしきよるこばれんかとの意にて、いかばかりかの下に詞を省きて、と受け三句以下はかねて子のゆく末の事を案じ思ひたりし其の人に代はりて、哭泣する事なりの意にて、泣くはうれしさに悦びの涙を流す意なるべし。三句の「思ひつる」といふ詞は、少しいひ足らざる方なれど右の如く聞く外はなかるべきなり。

侍従のおさうさ、ためもりの君のもこよりも、三十首の歌をおくりて、これにてんあひて、わろからんことを、こまかにあるしたべ、いはれたり、こごしは十六ぞかし、歌のくちななれば、やさしくおぼゆるも、かへすく心のやみこ、かたはらいたくなん、これもたびの歌に

は、こなたを思ひてよみたりけり見ゆ、下りしほどの日記を、この人々のもごへつがはしたりしを、よまれたりけるなめり、立ちわかれふじのけふりをみてもなほ、心ばそさのいかにそひけん、またこれもかへしをかきつく、かりそめに立ちわかれても子をおもふ、思ひをふじの烟りこそ見し、

「侍従のおとうとためもりの君は、爲相の弟爲守なり、これにてんあひて」これには此詠草になり、てんあひの事は、前にいへるが如し、但し此所は爲守より母へ點を乞ふなれば、あひてといへるはいかゞ、あへてとあるべきが如し、わろからんとをこまかにしるしたべは、詠草の中に思しき所々は細かに書入れ給へなり、ことしは十六ぞかし、殘月抄に、常樂記に、嘉曆三年十一月八日、曉月房逝去終焉歌、ひとせあまりよとせの冬のながきよにうきよの夢をみはてぬるかな、これによれば、弘安元年は爲守十四なり、諸本十六とあるは誤りなるべしといへり、曉月房は爲守の法名、むとせあまりとあるはむそぢあまりの誤りにて、嘉曆三年六十四にて卒せるなり、然るに弘安元年十六にて、丁度嘉曆三年六十四に合へるを、殘月抄の説

は不審なり、歌のくちは、歌よむに得意なる口つきにて、今俗にいふに同じ、やさしくおぼゆるは、閑治に愛すべく思はるゝ事かへす、心のやみどかたはらいたくなんは、上文に爲相の歌をほめたる所にも、親の心の間なるべきよしをいへるを受けて、また爲守をも如此いふが故なり、こなたを思ひては、鎌倉の母の事を思ひてなり、下りしほどの日記を、この人々のもごへつがはしたりしをよまれたりけるなめり、阿佛が京を發ちて鎌倉に下向せし間の日記を、爲相爲守等の許へ送りしを見て、それによりて詠みたりと思はるとなり、即ちこの十六夜日記の草稿の鎌倉へ着くまでの分を、これより以前京へ見せにやりし事ありしなり、立ちわかれふじのけふりを見てもなほ云々、たちわかれば、京を立ち別れにて、こゝろはそさのいかにそひけんは、心細くかなしと思ふ心は如何さまに加はりつらんと母の心を察したる意なり、立ちといひ細さといへる、皆烟の縁なり、前に出でたる阿佛の富士をみたる時の歌に、たか方になひきはて、かふじのねの烟りの末のみえずなるらんといふがあるを思ひてよめるなり、かりそめに立ちわかれても子をおもふ云々、爲守の歌に、立ちわかれ云々とあるによりて、かりそめに立ちわかれてもといひおもひのひを火にかけて烟とぞみしとよめり

また權中納言の君、こまやかに文かきて、くだりたまひし後は、うた

よむ友もなく、秋になりては、いさゝ思ひいできこゆるまゝに、ひ
さり月をのみながめあかして、なごかきて、

あづま路の空なつかしきかたみだに、しのお涙にくもる月かげ、
この御かへり事、これもふるさこのこひしさなごかきて、

かよふらし都の外の月みても、空なつかしきおなじながめは、都
の歌ごも、このゝちおほくつもりたり、またかきつくべし、

「權中納言の君は既に出でたり、こまやかに文かきては、深切に書翰を書きてにて、
即、次ぎの文その書中の詞なり、くだりたまひし後は、阿佛が鎌倉へ下向の後は
にて、秋になりては、いさゝ思ひいできこゆるまゝに、は、秋の季となりては、ものさ
びしきならひにいよゝ阿佛の事を思出づるまゝになり、ながめあかして、ま
か其書翰の中の文章なり、あづま路の空なつかしきかたみだに云々、かたみは即、
月にて、十六夜の、にうかれて京を出でたりし阿佛の記念としてみる、その月も
なは涙にくもりてさやかに見る事を得ずとなり、通ふらし都の外の月みても
云々は、結句より初句へ反る意にて、都には非ざるこの鎌倉の月を見てもなつか
しくおもふ物思ひの心は、都の空にも通ふなるべしといふ意にて、空なつかしき

といふ詞は、前の歌の詞なるをそのまゝに用ゐたり、又かきつくべしは、此の他の
歌ごもは再び後に書きしるしそへんと、此所にて筆をどいめたるなり、
附云此の段、權中納言新中納言の二人阿佛の親戚にして尤もむつまじかりし中
の往復のさま、歌の贈答、當時の實情、察せられて感慨あり、又爲相爲守二人より母
の許へ詠草を送れるに、その歌の漸次に進歩せるを阿佛のよろこべるさま、親子
の情愛のこまやかなるを味はふべし、又鎌倉邊に時鳥のすくなかりし事を知る
に足り、歌ごも、おもしろく、おぼゆれば、拔萃して評釋を加へたるなり、尙右の中
なる、さしものびたまへりしもをりからなりけり、といふ文の意、及び、その次ぎ
なる歌の解はいかゝあらん、其の他にも説あらん人、だちは示し給へかし、

十訓抄

本居豊穎

白河院は、花ざかり、雪の朝、かならず御覽じてもてなさせおはしましけり。ある時、雪の夜中ばかりよりかきくれてふりければ、上達部殿上人、われさきにご参りて見る所にいらんご、いそぎ参りあはれけり。

「白河院は、御諱貞仁と申して後三條天皇の長子にます、山城の白河に法勝寺を創建したまひし事あり、遺詔して白河院と稱し奉るよし、中右記に見えたり、花ざかり、雪の朝は、春の花の盛りと、冬の雪の朝と、二つなり、もてなさせは、もてなしといふ語を延べて敬語にいへるにて、此所は賞翫の意なり、がゝる所は、もてはやしといふべきにて、もてなすといふ語は所爲の義にて、物語文などに多きを、後にはもてはやすといふ詞と、同じさまにつかふ事と、なれるなり、拾玉集に、賤の男が片岡しめてすむ宿をもてなすものは、夕顔の花、山家集に、なかくに時々雲のかゝるこそ月をもてなすかざりなりければ、なぞある皆是なり、おはしましけりは、平常右

の如くにてましくたりにて、以上は、白河院の御行狀の總體をいへるなり、ある時より一の事を談る文なり、雪の夜中ばかりよりかきくれてふりければ、の雪のは、雪がにて次のふりければへ係るなり、夜半頃より空曇りて甚しく雪の降りしをいふ、上達部は、三位以上の人、所謂公卿の事、殿上人は、四位五位の殿上に昇り侍候する人々、我さきにご集りては、競ひて急ぎ参内するをいふ、見る所にいらんごは、御所にて雪を觀賞し給ふ其の御場所内に入り加はらんと欲する意なり、集りあはれけりは、参會せられたりなり

御隨身敦季まゐりてみれば、御車さしよせて、人々深沓はきておりあへり、敦季おもふやう、雪は北に深くつもれば、疑なく北さまへぞ御幸はならんずらん、ご思ひて、小野皇太后宮へ、時々参りければ、從者を走らせて、御幸既に成候、定めて北さまへぞ候はんずらん、ご申たりければ、宮の女房の中に、紅のうすやう着たるが、三人候ひけるを、其衣せなかよりさきわけて、三間に出せご、宮の仰ごごありけるを、女房申すやう、院入らせおはしまして、御覽あらんに、見ぐるしく

候なん、ご申ければ、雪御覽ぜんに、内へ入せたまふ事更あるまじ、ご仰こそありければ、ごきて三間に二具づゝ出したりけり。

「御隨身敦季は此の御時隨身にて仕へ奉りし敦季といふ者にて隨身は近衛府の官人内舍人等にて、弓箭を帶し御車の左右に隨ふ警衛者なり敦季は其姓詳かならず、御車さしよせて人々深沓はきておりあへりは、既に御車の準備整ひて御車寄に引寄せあり又、供奉の人々も其用意して庭上に下り立居たる状にて深沓は淺沓に對する名にて、雨雪の時用ゐる沓なり、今時の長沓をはくに同じ、おりあへりは、人々多く庭に下り立居たる状にて、一人ならねばあへりといへり、おもふやうは、古くは、おもひけらくとか、おもふにとかいふ所にて、此頃より此詞つかひ出來たり、雪は北に深くつもれば疑なく北さまへぞ御幸はならんすらんは、雪は多く北の地に深く積もるものなれば、觀雪の御幸は、必ず北方の地にあるならん、意にて、北さまは北の方向といふ事ならんすらんは、ならんとすらんの約訛なり、御幸の文字は、上皇に申す慣ひにて、此事何年に在りし事ともわからねど、下に引きたる著聞集の文中に、上皇と記したれば、既に院とせ給ひて後の事なるは明らかなり、さて、御幸ならんすらんのならんは、御幸なるといふ詞あるより、出でたるにて、如此場合に用ふる、なるといふ語は一種の用法にて、元來、其の事の成就

したるをいふより出で御幸なるといふは、御幸あるといふが如き意なり、下文に、御幸既に成候、また、ほどなく御幸ならせたまふともあると、同言なり、小野皇太后宮は、關白藤原教通公の三子歡子にて、後冷泉院の女御となり、後、皇后となり給ひ、天皇崩後、皇太后となり給ひ、尼になりまして、小野に住給ひければ、小野皇太后と稱す、時々参りければ、敦季が平常をり、此の宮へ参りし事ありければなり、從者を走らせて御幸既に成候、定て北さまへぞ候はんすらんと申たりければ、敦季が從者を小野宮へ急きやりたるにて、御幸既に成候云云は、敦季が從者を以て小野宮へ申上げたる詞にて、御幸既に成候とは、御幸の準備既に整ひたり、意にて、御幸あるに定まれるをいふ、候はんすらんは、あらんとすらんの意にて、候といふ語の上に御幸といふ文字を入れてきくべし、宮の女房の中には、皇太后の御殿の侍女中にてなり、紅のうすやう着たるが三人候、ひけるをは、紅色の薄き衣を着用したる女房が三人在りしをいふ、うすやうとは紙の薄きをいふが常なれど、こゝなるは絹のことなり、源氏物語なごに、うすぎぬ、うすものなごいへるに同じ、その衣せなかよりとき分ては、女房三人が着たる紅の薄絹の衣を、背より半分づゝに解き分けてなり、三間に出せは、皇太后の御殿の三間に、其の紅の衣の袖口を出だせにて、三間とは柱と柱との間を一間といへば、其の三箇の間にて三所といふに同じ、出せは、命押言にて、昔の習慣に簾の下より女の装束の袖口ばかりを外

より見ゆるやうに押出し置く事なり。これを打出ともいへり。女房申すやう云云は、其の時に在りし女房の一人が申すには、唯片袖づゝを打出になし置き、萬一院が殿内へ御入あらん時、露顯しては甚だ見苦しき事なるべしと危みて申せるなり。雪御覽せんに内へ入らせたまふ事更あるまじは、皇太后の御詞にて、院陛下の此所へ御出であるも、雪のけしきを御覽遊ばさるゝなれば、殿内へ入り給ふ事は必ずなかるべし。庭上にて御覽あるべき事なれば、簾内の不都合は苦しからざるべしと、なり。但し、更あるまじといふ詞はいかゞなり。これは、更に「とありしが」に文字を脱せるべし。三間に二具づゝ出したるけりは、三人の着たる衣を半分づゝにして都合六箇とし、それを二箇づゝ三所の簾より出し置きたるなり。さて、此の事は古今著聞集にもありて、其文大同小異あり。今此所に其文を出だして本文と差あるを示す。著聞集には

白川院、深雪の朝、雪見に御幸あるべしとて、御供の人少々めさるゝ事ほのきこはしほごに、やがて出御ありて、おもしろき雪かな、いづかたへかむかふべき、小野皇太后宮のまゝらせて、かゝる事に、既に、御車奉りて候なり、御用意候べしと申候たりければ、紅の衣五具ありけるを、せわりにつまきりて、寝殿十間になん出だされたりける、みづから入りて御覽する事しあらば、いかに申す人ありければ、皇太后宮雪見の人、内へ入る事なしとて、さだきたる御けしきなく、なんおはしましける、云云

とあり合はせ考ふべし。紅衣三具と五具との異あれど、半分づゝにまたる事は同

ほごなく御幸ならせたまふ、雪は北さまがめでたきなり、小野のかたへご仰せありければ、殿上人上達部うちむれてつかうまつる、皇太后宮の御方へご仰せあれば、人々つかうまつりて、門の外にあり立ちたりければ、御車をばかきはづし門より引入れて、中門に御榻たてゝ、庭さまを御覽するに、寝殿の南面に、紅打出を、三間に出だされたり、

「ほごなく御幸あらせ給ふは問もなくして出御になれりの意にて、ならせ」といふ詞のこと前にいへり。尙また序にいはん、鎌倉足利時代に將軍の他へ行くを、オナリといひ別業を、ナリドコロと訓する事あるなごは、貴人の他所へ行く事を、ナリといひ慣へるにて、甚だ理なき語なれど、元來は此の文にあるが如くつかひしより、又一轉して「なる」とのみいふ事になれる也。雪は北さまがめでたきなり。小野の方へは、此の時に院の仰せられし御詞にて、方への下に、ゆかんといふ語を省けり。「うちむれてつかうまつる」は、人々群をなして供奉したりなり。門の外におり立ちりければ、既に小野皇太后宮の御殿に到りて、御門外にて供奉の人々足を停め

たるにして騎馬の者は馬より下りたれば、おり立つといへり、御車をばかきはづしは、院のめされたる御車の牛をはづしたるをいふ、門より引いれて中門に御榻立ては、御車を表門より人々の手して、引入れ庭口にある中門の所に榻をすゑて御車を引居たるなり、昔の殿舎の構造には、中門といふもの必ずある事、寢殿圖を見て心得べし、榻は車の轆をかくる臺なり、庭さまを御覺するには、御車の中より庭の方を院の御覽あるになり、寢殿の南面に紅の打出を三間に出されたり、寢殿は、正殿の謂には表座敷の事、武家にて書院といふ場所にて南面なり、紅の打出は、前に出でたる女房の袖口の事にて、これ打出と稱すること前にいへるが如し、何にかくはまうけられたりけすぞと御覽するほどに、童の十七八ばかりなるが緑青にて色ざりたるをしきに、金の御盃すゑてこんりの御皿に、銀にてしたる葉餅をもちたり、葉をば青く色ざりて、今かたつかたは、同じ御皿にざくろをもられたる、右の手にもちて、左の手に扇さして、雪の上にかざみ長く引ちらして、はしよりおりたるしにも、おなじ様なる童、御銚子にみさいれて、又扇さして、つゞきて庭の雪にならびてまゐりて、御車の前よりまゐらすれば、御盃

をざりて、みきを入れさせてすこしきこしめして、御盃をばをしきにおかせおはしましぬれば、二人ながらはしの上へのぼりぬ、

「何にかくはまうけられたりけるぞは、何故に如此設備の整ひたるかと、院の驚き感し給へるさまなり、豫め敦季より内報し奉りし事は、院はしろしめさず、急に御出でになりたるに、右の如く御持受けありし體なりしが故なり、右のみにても意外の事なるに、又次の如く童女二人をうるはしくよそはせて、御もてなしのありしに再び驚きおもはしめしたるさまなり、緑青にて色ざりたるをしきに金の御盃すゑて、緑青は今もいふ、ロクシヨウにてこれらの色合は雪の白き中に映あるやうにどの御心しらひなり、こんるりの御皿に銀にてしたる葉餅をもち云々、こんるりは、紺瑠璃にて此の文字は佛經に出で青色の寶玉をいふ、それを以て造りたる皿なるべし、銀にてしたる葉餅は銀を以て製したる葉餅にて、葉餅はうづば物語及源氏物語に出でたるつばいもちの類なるべし、つばいもちは餅を楀の葉にて包みたる物なり、葉をば青く色ざりとは、其の銀製の葉餅の葉の所を青く塗りたるなり、今かたつかたとは、折敷の上に皿を二つ置きたる其の一方をいふ、おなし御皿は、これも紺瑠璃の皿なり、ざくろをもられたる、ざくろは石榴の實なるべし、但しこれも眞物には非ずして、金銀の類を以て製したるなるべし、これらの

物も、著聞集の文にては、次に引出でたるが如く、大いに遠へり合はせ考ふべし、扇さしては、扇をさしかざして、顔を覆ひたるさまなり、扇とは、檜扇をいふ、かざみ長く引ちらしては、童の装束の汗衫といふ物は、水干の如く、後の方長く垂れたる物なれば、其の裾を後の方へ引延ばしたるさまなり、はしよりおりたるは、御殿の階より下りたるにて、しもには、其の後に、て童女二人つゞきて出来たるなり、同じ様なる童云云は、別に解をまたざるべし、御車のまへよりまゐらすれば、右の童女二人院の御車の前面より進みて、盃を差上げたるなり、御盃をとりて、みきを入れさせて云云は、陛下御みづから、盃をとり給ひ酒を注がせて、いさゝか御口をつけ、又、其の盃を折敷の上に置き給ひしなり、二人ながらはしの上へのぼりぬは、童女どもはもと下り來りし階の上に入り歸れるなり、さて此段も著聞集には、
御車ヤリいれて階階の間にさしよせておはしましければ、みきをなんすゝめ奉られる折葉のかざみきたる童二人ひざりは沈のなしきに玉の盃しるかれの皿に金の橋一ふさをもちられたるをもちたりけり一人はかたくちの鏡子に酒をいれてもちたり二人の童腰殿の前へて階の子をなよめにおり下りて御車へまゐりけるさまいみじういふになん見え侍る酒はうるはしうならせたまひける橋は季通御供に候けるに賜はせけり云云

とあり

とばかりあるほごにも、からきぬ着たる女房の扇さしたる、又はし

よりおりてまゐる、いかにと思へば、松の枝に何にか綿につゞみたるものをつけたるをもちて、庭の雪の上に袴ふみちらして御車へ参る時、しもあは雪かきたれふりて、物がたりなどのやうなり。

「とばかりあるほごには、暫時そのまゝにてあるうちになり、もがらきぬきたる女房の扇さしたるは、裳背子を着たる女の、檜扇をかざし持ちたるがの意にて、裳背子は、女の大禮服の如く、君前に出づる時の禮服にて、殊更に装ひたるさまなり、又はしよりおりて集るは、前の童女の如く、これも階より下りて御車の方へ参るなり、いかにと思へばは、如何なる事ならんとあやしみ思ひ居たれば、意、松の枝に何か綿につゞみたる物をつけたるを持ては、右の女の持ちたるは、松の枝に綿以て包みたる物を附けてあるにて、何にかの下に、あらんを省けり、袴ふみちらしては、排袴の裾を雪の上に引きつゞ歩み來るをいふ、時しもあは雪かきたれ降ては、右の女の静かに歩み來る時しもあは、雲來又多く降來りて、頭の上に降りかゝれるさまなり、あは雪は、元來、ア、ワ、ユ、キにて、沫の如くみゆるよりの名にて、はのかなには非ざるを、中古より淡雪の義として、春の消え易き雪をば、あ雪と歌によむ事始まれるなるが、此所は春のさまに非ず、雪も多く降りたる時なれば、淡雪にては、かなはず、尙、わのかなどして、沫雪の方とすべきが如し、かきたれは、こきたれども

いひて、雨雪などの止間なく頻りに降る状をいふ形容詞なり、物がたりなぞのやうなりは、昔の物語文に書きたる事のさまに似ておもしろしとなり。

かの小野の尼のかきくらす野山の雪をよめるを、おもひ出づる人もありけり。女房御車へ参りて、もこのやうにかへり上りたれば、院の御車引出まゐらせて、かへらせおはしましぬ。雪は内にて御らんずるやうはなきぞと、宮仰せられけるに、たがはざりけり。

「小野の尼のかきくらす野山の雪をよめる」とこの小野の尼といへるは誰なるか、又「かきくらす」の歌も詳らかならず、女房御車へ参りてもこのやうにかへり上りたれば、此の時手に持ちて出で来る松の枝につけたる物を御車へさしげをへて、又階を上りて歸り入りたるさまなり。院の御車引出させては、御供の人々の奉仕する方よりいひ、かへらせおはしましぬは、院の御上につきていへり。雪は内にて御らんずるやうはなきぞとは、前に皇太后の女房どもにむかへて仰せられし御詞をいふ、たがはざりけり。果たして院は御車のまゝに雪を御覽じ、殿内へは入らせたまはざりしゆゑ、皇太后の御豫言の通なりしをいへり。

この宮は、後冷泉院后、大二條關白の御女なり。入内の夜院かくれさせたまふによりて、やがて尼になりて、小野にこもりぬさせたまひ

て、後かすかなる御ありさまなりけれども、御もてなし、いうに、用意深くまし〜けり。

「大二條關白とは、教通公を大二條殿といへればなり、入内の夜院かくれさせたまふによりてやがて尼になりは、はやく永承二年に入内ありて、同三年に女御となりたまへりしも、當時頼通公の女寛子皇后にてまし〜ければ、憚りて宮中には住み給はず、父教通公の第に居たまひ、又御兄の靜圓僧正の小野の山房に移りたまひて、専ら佛道を修め居たまひしが、天皇の御寵は變せず、遂に治暦四年四月に皇后寛子を中宮と稱し奉りて、更に歡子皇后となりたまひ、四月十九日に入内ありけるが、天皇の御病は甚だ重らせ給へる時にて、つひに同夜崩御まし〜けるなり、かくて尼になり給ひしは、承保元年の事にして、六年ばかり過ぎたる後の事なり、小野にましけるも、御兄靜圓僧正の由縁ありしが故なり、御もてなし、いは、平常の御所爲優美なりしをいふ、用意深くも、諸事につきて御思慮の周到なりしをいへり、もてなしといふ語の事、前條にもいへるが如くにて、此所にある方正しきなり。さて、又著聞集には

上皇かへらせおはしましけるまゝに、ゆかしくなつかしき世にてこそおはしましけ

れきて、庄一所まぬらせられたりければ、たゞ今御幸なるよしづけまぬらせたりける
御隨身になんあづけたまひける。
とあり

附言 白河天皇は、御父後三條天皇の御氣風をうけまして、頗る英邁の聖徳ましまし、御讓位の後も天下の機務は専ら院中に出で、人皆これを恐れ嘗てのたまへる御言に、朕が意の如くならざる者は、たゞ鴨河の水と雙六の采と山法師との三のみなりと仰せられしことあるばかりなりしに、又風雅をも好み給ひし御事、此の一事を以ても察し奉るに足る前に引きたる著聞集の文に、ゆかしくなつかしき世にてこそおはしましければ、とは、小野皇太后宮の御上を賞し給へるなれど、如此事にはまた深く感じ給へりしのみならず、庄園をさへ奉らせ給ひしを以て、聖慮の御餘裕ありしほどを仰ぎ奉るべし。また小野皇太后宮も、既に尼とならせ給ひ、専ら佛門に歸し給へれど、風流の方には、尙人に後れ給はず、殊に雪見る人は、内へ入る事なしと、斷乎として動かす紅衣を折半して急の準備を命じ、其の他童女等を使用して大に院の御雪見の興をそへたまひし機敏なる御策略は、尋常の婦人のなし得難き事といふべし。又後に白河院より庄一所をおくらせ給ひしを、御幸の事をつけ奉りし隨身に賜ひしは、然ばかりかすかなる御ありさまなりしにも、かゝはらず、寡欲にましけると、人をめぐみ給ふ御心の篤かりし程とを察し奉

るに足れりといふべくこそ。

吉野拾遺

本 居 豊 穎

辨の内侍御かたちいごめでたくさふらびしを、武藏守高階の師真
 いかなりけんをりにか見そめけん、心にかけて思ひけるに、みかご
 かくれさせたまひて後、ひそかに御ふみ奉りて、しのび出てさせた
 まへ、御迎をまゐらせてんと、たびく、いひこしけれご、御返しもし
 たまはざりければ

「辨の内侍」は右少辨藤原俊基朝臣の女にて、後醍醐天皇に仕奉り、内侍なりしを以
 て、父の官によりて、辨内侍といへるなり、「かたちいごめでたくは、容貌甚だ美にな
 り」とふらひしは、めでたくありしの意にて、正しくは、めでたかりしを」とか、めでた
 くおはせしを」とかあるべき所なり、但し、めでたくて宮中に侍候せりし意と見て
 も聞こゆべし、人に對ひて言ふ詞ならば、中古の侍るといふに同じく、「云云候」とい
 ふ語、此の時代には常にいへり、「武藏守高階師直」は、普通に高師直といふ、高階を略
 稱せるなり、「いかなりけんをりにか見そめけん」は、宮中にのみ在る辨内侍なれば

師直の容易くは見得まじきに、如何なる時に見初めたりしかとなり、「こゝろにか
 けて思ひけるに」は、好機會を得ていひよらんと、豫て思居しになり、「みかごかくれ
 させたまひて後」は、後醍醐帝崩御の後、「ひそかに御ふみ奉りて、内密に匭書を内侍
 の許へ贈りて、しのび出でさせたまへ御迎をまゐらせんと、たびく、いひこしけ
 れ」とは、内侍に宮中をぬけ出て來り給へ、然らば當方より迎の者を出して途中の
 奉護をなさしむべしと勸めて、數度書を贈りていひ來りければなり、「いひこし
 は、正しくは、いひおこせ」とあるべき所なるを、此の時代となりては、如此いひ慣へ
 るにて、後の書翰文に申越と書く是なり、「御返しもしたまはざりければ、内侍より
 は何の返事をもなさず棄て置きて在りければなり。

ねたく思ひて行氏卿へかよひける女のありけるをも、ごめ出て、北
 の方に、かゝる事なん侍る、ごもにはからはせたまひて、本意ごげな
 んには、しらせたまはん所をもあまたつけ侍りなん、三位ごの官
 位をもすゝめてなご、いひおこすれば、さらぬだに、世の中の人のお
 それぬはなきに、いごたのもしく聞えければ、御ふみをこゝのへた
 まひて、内侍の君にも、ごつかうまつりし、梅が枝さいひし女をそへ

て、ごもにはからはせたまへかし、ご聞えけるに、いごよろこびて、命をかけて契りける侍二十人がほごえらびて、梅が枝にそへて、吉野につかはしけり。

「ねたく思ひて」は、師直が憎く思ひてにて、内侍の返事をもせざるを恨みて強ひて計略を以て内侍を奪はんと思ふ念を發したるなり。行氏卿へ通ひける女のありけるをもとめ出て、行氏卿は俊基朝臣の兄にて、内侍の爲には叔父なるが上に、俊基朝臣の死後は、内侍この行氏卿の許に寄寓したりし事、此段の前文にも出でたるが如くなれば、其の縁由を以て圖らんと、其の行氏卿の方へ出入する或女を探り、求め出して計策を施したるなり。北の方に「は、行氏卿の奥方の許へ、其の女を遣りて説かしめたるなり」かゝる事なん侍る「いふよりは、師直の彼女を以て、行氏卿の北の方に告ぐる詞にて、かゝる事とは云云の事といふに同じく、辨内侍を得んと欲する事の次第にて、當時の實際にては委しく其の事を陳べたるなれど、この記文には略していへるなり」ともにはからはせたまひて本意とげなんには「は、北の方に、諸共力力を合せて内侍を得るやうに取計らひ賜ひて、本意師直達して内侍を得たる以上はの意」しらせ給はん所をもあまたつけ侍りなん「は、行氏卿の知行所、即ち領地所、即ち領地をも多く増加するやうに、師直が取計らひ進上すべし

にて三位どの、官位をもすゝめて「は、尙又行氏卿の官位をも昇進するやうに取計らはんにて、當時師直は足利方に於て威權專に恣なれば、右の如く利欲を以て欺き引入れんといひ廻らしたり、いひおこすれば「は、師直より彼女を以て行氏卿の北方へいひ來りたればなり、さらぬだに世の中のおそれぬはなきに」は、かくの如き事無くても、師直には當時の人々皆恐懼せざる者なき時節なるに、其の師直より今かくいひ來れることなれば、これを承諾せざる以上はいかなる目にあはんもはかり難く、又一方には行氏卿の一身の爲に幸福となる事がらなればにて「いと頼母しくきこえければ「は、行氏卿の爲に、最も深切なるが如く、利益あるが如く、申し陳べたればなり、御ふをど、のへたまひて「は、北の方が内侍へ贈る書翰を認められて「内侍の君にもどつかうまつりし梅が枝といひし女をそへて「は、辨内侍に昔奉公したりし梅が枝といふ名の女を、彼方より來りし使の女にさしそへてなり」ともにはからはせ給へかし」とは、北方より師直への詞にて、今此梅が枝といふ女をさし出すにより、此の者と諸共に協議して事を行ひ給へとなり」と聞えけるに、いとよろこびて「は、右の如く北方より申したれば、師直甚だ喜悅して「命をかけて契りける侍二十人がほごえらびて「は、師直が豫て腹心の侍にて、其の者どもは、師直の爲には一命をも惜まずと約しけるを、二十人ばかり選抜してにて「梅が枝にそへて吉野につかはしけり」は、北の方の書翰を梅が枝に携へさせ別に二

十人ばかりの侍を附従せしめて、吉野山なる辨内侍の方へやりたりとなり。」
 内侍の君に、梅が枝が、北の方の御文もちてこそ、といひ入れけるに、御戀しう思ひて過しつるに、こなたへこめされて、御文奉るに、はるかにこそさぶらはせたまへ、山里の御住居さこそ思ひやらるゝごに袖をこそしぼりあへたまはねば、御戀しさのいとせめて、すみよしへまうで侍りしほごに、道のたよりもしかるべければ、あひ奉らんことを思ひて、河内の國さかや、高安のほごりに、しりたる人のさふらふに、まありてこそ、まぢ奉れ、はかなき世の中の、ましてみだれかはしければ、このたびならではいかであひ見ん、なごかきてあひみんごおもふころをさきだて、袖にしられぬ道芝の露

〔内侍の君に梅が枝が北の方の御文もちてこそは吉野へ至りて案内して御熱知の梅が枝が京都に住給ふ行氏卿の北の方よりの御文を持参せりと辨内侍へ申入れたるにて、もちてこそ下のに、参り侍れなといふ語を省ける也、御戀しう思ひて過しつるにこなたへこめされては、右の事を聞いて内侍の詞に、梅が枝には久

しく逢はず戀しくなづかしく思ひて月日を送りたるに、珍らしく來れるかな、速に内へ入れと梅が枝を召入れられて、御文奉るには梅が枝より北の方の書翰を内侍へさし上げたるになり、遙かにこそさうらはせ給へ、よりは、北の方の文中の言にて、内侍は吉野に居る故に京都よりは遠く遙かに離れ居給へりと也、山里の御住居さこそ思ひやらるゝごに、は吉野の山里の、内侍の住居さこそさびしがるらめと思ひやらるゝ、度毎にの意にて、さこそ下のに詞を省けり、まひといふ詞は元來生を延べたる者にて、すまひすまふと波行四段に活く詞なるを後に、は住居の文字によりて、ひをひと誤れるなり、但し、此の時代には既に住居の意につかへるなれば、すまひのかな也、袖をこそしぼりあへ給はねば、は涙絶えずして袖をしぼりあへず、しぼる間もなき意なり、但し、こそと係りて、給はねば、にて結びたるなれば、ばと受けたるはいかになり、此のばは、無き本もあれば、衍字なるべし、然るに、給ふといふ敬語あるも少しいかに、此所は北の方自身の事をいへるなれば、侍らねどあるべきに、給ふといへるは、或は行氏卿の上にかけていへるかと思へど、然らば今少し其の詞あるべく、いづれにもいふかし、御戀しさのいとせめて、は、戀しき情の甚だ切迫しての意なり、いとせめて、といふ詞、古今集なるいとせめて、戀しき時は初雁のなきてわたると人はしらすや、の歌、其の外なるも、皆古くは甚だ迫りての意なるを、後世に至りては、セメタ云、ナリトモといふやうに、萬

一を希ふさまにつかへり、但し此所にあるは古き方の意なり、すみよしへまうで侍りしは、こゝに攝津國なる住吉神社へ參詣せしを以てなり、道のたよりもしかるべければ、あひ奉らんことを思ひては、内侍が吉野に居るゆゑに、其の程近き邊へゆきたらば、出逢ふに便宜なるべく、幸ひ河内國の高安に知已あれば、住吉より廻り行くに、道の順序も宜しからんとてなり、河内國の國とかや高安のはどりと、河内國高安郡にて、北の方も委しくは知らざるをおぼめきいへり、しりたる人のさふらふに參りてこそまぢ奉れば、知己のある其の家に參りて内侍を侍つとなり、はかなき世の中のみしてみだれがはしければ、此たびならでいかで逢見ん、人世は常無く頼み難きものなるが上に、況んや方今は亂世にて安く他行もなり難ければ、此度の住吉參詣の序に逢はずしては、再會の期おぼつかなしとの意にて、内侍に是非吉野を出で河内まで來らん事を促がせる文言なり、なごかきては草子地の詞にて、右の如く消息文をかきて其の末に次の歌をしるしたりとなり、あひみんと思ふ心をささだて、は内侍に逢見んと思ふ意を先に立て、主としていふ意、袖にしられぬ道芝の露は、道芝の上に置く露は深く、それを分行く袖は苦しき事ながら、單に逢はまほしき意の強きが爲に、道路の困苦は何とも思はれずといふを、袖にしられぬと、さへるなり。

御使も御ふみのこゝろにかさくごさきければ、まことの御母君にす

てられまゐらせしよりは、それにもまさりておもひたまひし御情の忘れで朝夕こひしう思ひたてまつれとて、君に御いごまを啓したまひて、こりあへず出でさせたまへば、女房二人、青侍三人、御供にはつかうまつりけるに、道に人出あひて、高安にまたせたまひければ、人も多くてむつかしければ、住吉までまかるにこそ、もし御出も候はゞあれまでくし奉れと仰せおかれて候へばとて、人あまた出てこりこめ奉る

「御使も御ふみのこゝろにかさくごさきければ、御使とは梅が枝にて、御ふみのこゝろは、北の方の書翰の趣意、かさくごさきは、懇々説得する意にて、梅が枝がいふ所も書面の同趣意を以て、内侍に吉野を出でん事を勧めたりと也、くごといふ詞は、俊頼朝臣の歌に、はしめなき罪のつもりのかなしさを、ぬかの聲々くごさつるかなと、みえ宇治拾遺源平盛衰記等にもありて、口説の義なり、まことの御母君にすてられまゐらせしよりは、内侍が眞の母の既に世を背きて見棄てられし以來は、なり、それにもまさりて思ひたまひし御情の忘れで、眞の母にも勝りて馴

れ睦ひ恩を受けし行氏卿の北の方なれば、それを戀ひ慕ふ心情が忘るゝ事能はずしてなり。朝夕こひしう思ひたてまつれど、は内侍が詞にてとてはといひての意、北の方の事は毎日戀しく逢ひたく思ひ居たりの意なり。但し、たてまつれといふ詞は、上にこそその係なくといかくなり。一本には、まつりつれとあれど、是亦同じ此の文こひしうこそ思ひたてまつりつれとかこひしう思ひたてまつりぬとかあるべき所なり。君に御暇を啓したまひては、君上に暫時の御暇を請ひ奉りての意。君とは此の時は後村上天皇の御時なれば、この天皇を指せるなるべし。啓すとあるはいかゞにて、奏す」とあるべきなれど、此の書中、奏すといふべき所をも啓すとあれれば、記者もどより混同して記せるものとみゆ。皇后皇太子等に啓すといふ例なれど、然らざる人の上にも啓すとかける所ありて、甚だみだりがはし」とりあへず出でさせたまへば、は何事何物をも取認めあへず、急ぎて吉野を出立すればなり。女房二人、青侍三人、御供にはつかうまつりけるには、供づれも少なく、下女なり。青侍といふは、青女房などいふ類にて、青は生々しく熟せざる意にて、確實ならぬをいふ稱なり。道に人出あひては、途中にて人出で來り行遇ひて、高安にまたせたまひければ、人も多くて、ひつかしければ、其の出來たる人ども、内侍に對していふ詞にて、北の方は、約の如く河内の高安といふ所にて、内侍の來るを待居ら

れければ、其の邊は他の人々多く在りて混雜すれば、といふ意。ひつかしは、俗にゴタゴタトシテ面倒ナリなどいふ事なり。住吉までまかるにこそもし御出も候はいわれまでぐし奉れ、これは北方のいひ置かれたる詞を傳へ言ふにて、住吉の地までまゐるが故に、もし内侍が來り給は、住吉まで御供して來れの意にて、まかるにこそその次に「あれ」といふ語を省けり。あれとは、住吉の地を指し、ぐしは、具しにて、元來此の詞は物を具備するより出で、人の上にもいふ、妻うちぐし、親うちぐしなどいひて、伴ひて連るゝをいへば、此所も俗言にオツレ申シテ來レといふ意なり。と仰せおかれて候へば、まで、其の者の詞なり。人あまた出でとりこめ奉るは、多人数出來りて、内侍の輿を中に包み、四方より圍みたるをいふ。

いご心えぬここにこそ、住よしまでは、はるくごいかでゆきなん、御こしをかへせこのたまはすれば、青侍ごも御こしをかへしなごしければ、たゞ住吉までいそぎ給へごひきたつるに、いかにもかなふまじければ、引ごむるを、ささないはせそとて、三人ごもにうちころしてけり。

「5」ところえぬことにこそより、御こしをかへせまで内侍の詞なり、ことにこそ

の次に例の「あれ」といふ語を省けり、「いとこゝろえぬこと」とは、前にいへる詞を聞ききて、甚だ心得がたく不審なる事なりとなり、住吉までにははるくといかゆきなんは、住吉までといひては道も甚だ遠し何ぞ行く事を得ん行き難しとなり、但しゆきなんは、ゆかんといふべき所なり、御こしをかへせは、内侍が乗居る輿を吉野の方へ返し戻せと命じたる詞なり、但し内侍自らの詞に御こしといへるは少しいかいなれば、次にある詞よりふと混じて此所へも御といふ字の入りたるが、但し當時の内侍の言にはかくはいはざりしを、後に此の事を記せるものよりふと如此かきたるかも知りがたし、のたまはすればは、内侍がいひたればなり、青侍ども御こしをかへしなんとしければは、其の命令によりて輿を昇きたる青侍等後の方へかつぎかへさんとしければなり、たゞ住吉までいそぎ給へといひきたつるには、彼の多くの人数等が返さじとして、一向に住吉へ向へて急ぎ行き給へといひて強ひて輿に住吉の方へ向けてやらんと、手をかけてつれゆかんとするなり、いかにもかなふまじけれと引とひむるを、青侍等は何分にも住吉の方へやる事は能はずと押へ停むるにて、かなふまじは、其の意には應じ難しとなり、但し此所もまじけれといふ辭は、どゝのはず、けれを削りて可なり、さなはいはせそとては、青侍等が承引せざるを、然様なる言はいはしむる事なかれにて、彼是いひ争ふは、面倒なり、殺して輿を奪へといふ意なり、三人どもにうちころしてけりは、其の

青侍を三人どもに皆切殺しすてたりにて、けりといふ歎息辭をそへたり。君はいとおそろしく、鬼にとられたまへること、ちし給ひて、たゞなきになかせたまへり。物のあはれをもわきまへぬものゝふごも情なう、こよひ住吉までいそぎなん、殿もそれまで出むかひおはせん、なごいひのゝしりて、石川といふ所までいてゆきけり。

「君はいとおそろしく鬼にとられたまへる心ちし給ひては、内侍は甚だ恐れ感ひて鬼の爲に奪はれたる如き心もちにてなり、たゞなきになかせたまへりは、一向に聲をあげて泣きてのみ居たりにて、たゞなきは他事なく泣くのみなるをいふ「物のあはれをもわきまへぬものゝふごも」は、物に感じて情を察するなどの事は更に知らぬ武士等にて、内侍が泣き居るも更に頓着せざるをいふ、情なうは、其の者どもが無情にも、こよひ住吉までいそぎなん殿もそれまで出むかひおはせんは、其の者等が口々にいふ語にて、今夜中に住吉まで此の輿を昇きて早く行かん主人公にも其所まで出向かひて侍居たまふべしにて、殿とは師直を指せり、いひのゝしりては、多人數の者ども口々にかまびすしいひつゝけたるなり、石川といふ所までいてゆきけり、石川は河内國石川郡にて其所に石川といふ川もあり

即ち千早山城赤坂城なども此の郡中なり、いでゆきは出で行きか或は率ひて行きけりにて、「は」の誤ならんもしりがたし。

たてはき正行が吉野殿へめされてまゐるにゆきあうて、其ほど過しなると、かたはらなる木蔭に立ちしのぶを、こゝろもこなく思ひて、立ちこまりて事のさまをこひけるに、局がたの住吉にまうでさせたまひけるといふに、さてはこて過ぎなんとするに、内侍のなきたまふ聲をきゝて、おして御輿のほごりに立ちよりてこへば、かうくゝの事になんこのたまはするに、いかさまあやしければ、奏しなはんほどは皆めしこれこて、残らずからめられにけり。はちを思へるもの三人四人ありて、ぬきあはせたゝかひけれごも、つひにうちころしぬ。

「たてはき正行」は、楠正行、たてはきは、帶刀にて官名なり、よし野殿へめされてまゐるにゆきあうては、吉野の皇居に召されて参向する人数に行き遇ひてにて、あうては、あひてを音便にいへるなれば、あふてと書くはわるしさて、吉野殿へ参るは

正行の一群にて、夫に内侍の輿を昇きたる者等が行き遇へるなり、其ほど過しなんどかたはらなる木蔭に立ちしのぶは正行の一群が通行する間を避んとして傍にある木蔭に入りてかくれ居たるなり、心もどなくおもひて立ちこまりて事のさまをこひけるには、正行が其の様子を見てあやしくおぼつかなく思ひて立ちこまりいかなる人の何方に行くなるぞと尋問したるなり、局がたの住吉にまうでさせ給ひけるといふには、輿を昇きたりし者等が是は吉野宮の女房の人にて住吉神社へ参詣し給ふなりと答へたになり、但し給ひけるといふ詞はよくかなはず、給ふなりとあるべきなり、さてはこて過ぎなんとするには、正行が其言を聞きて然らば仔細もなしといひて行き過ぎんとするにあり、内侍のなき給ふ聲をきゝては、一應は行き過ぎんとしたるが、輿の中にて泣く聲の聞こえたるを聞き答めて、おして御こしのほごりに立ちよりてこへば、人々の制するを、強ひて輿の側に立ち寄りて、いかなる事なるかを尋問しければなり、かうくゝの事になんどのたまはするには、内侍が答へて云云の事なりと、此の時の次第を語られたるをいふ、かうくゝは如此々々にて、北の方高安にてあはんどいひたるを以て出来たりしに、途中にて此の人々の強ひて亂暴に奪ひ誘ひ行かるゝなりといふ事を、短簡に陳べたるを略していへり、なんの下に、あるといふ語を含めたり、いかさまあやしければ、従者が答には局がたの住吉に参詣するなりといひたるも、其

の様子は何分にも疑ふべき點を以てなり、奏しなんほは皆めしとれとての
こらずからめにけりは一應吉野宮へ奏聞して、其の實否糺して後、ともかくも計
らふべければ、それまでの間は從者一同を捕へよといひて、悉く繩をかけて縛り
たりとなり、はぢを思へるもの三人四人ありては、其中にさすがに廉耻ある者三
四人はありて、ぬきあはせた、かひけれどもは、刀劍を抜き向かひて戦ひけれ
ども、つひにうちころしぬは、遂に其の者どもを殺したりとなり

吉野へ参りて、事のよしを奏し奉れば、梅が枝をすかして、こはせ給
へば、はかりつる事を申しけるに、侍ごもは皆きらられて、梅が枝は尼
になしたまひて、かゝるありさまを、北の方へよくく啓せよとて
かへされけり、

「吉野へまゐりては、正行が吉野宮へ参上して、事のよしを奏し奉ればは、途中にて
内侍興を見て、停めて同伴したる事狀を天皇へ申し上げたるになり、梅が枝をす
かしてとせ給へばは、元來梅が枝が使に來れるより發りたる事なるが故に、梅
が枝を責め、いろくどだまして詰問したるをいふは、はかりつる事を申しけるに
は、遂に梅が枝が白狀して、師直が依頼によりて、行氏卿の北の方が計略に出でし

事情を申し立てたるをいふ侍どもは皆きらられては、正行が捕へて來りし男等は
悉く逆殺せられてなり、梅が枝は尼になし給ひては、梅が枝は女なるを以て、命は
助け尼となしけり、かゝるありさまを北の方へよくく啓せよとてかへされに
けりは、其計略破れて男どもは皆刑せられたる事狀を、行氏卿の北の方へ篤とい
ひ聞かせよといひて、梅が枝は京都へ歸し給へりとなり、啓すといふ詞の非なる
事、前にいへるが如し、

正行なかりせば、いこくちをしからましを、よくこそはからひつれ
こて、内侍を正行に賜はんと、みこりのありければ、かこまりて
こても世にながらふべくもあらぬ身のかりの契をいかに結ば
ん、と奏して辭しにけり。その時はこゝろえがたくおぼえしが、後に
思ひあはされて、いこをしみあひにけり、

「正行なかりせばいこくちをしからましを、此の時に正行が行遇ひたればこそ
内侍を取返しなれ、もし正行が無かりしならば、内侍は師直の手に落ちて遺憾な
る事なるべきに、よくこそはからひつれば、正行が處置その當を得て、満足に思食
すと賞したまへるなり、内侍を正行に賜はんとみこりのありければは、其の賞

の爲に辨内侍を正行に下賜ふべしとの勅言ありければなり。かしこまりては正行が恐れ入りて次の歌をよめりとなり。とても世に云云」といふ詞は元來とてもかくてもと相對する詞にて、とにかくになどいふ類なれば必ずかくといふ詞をそへいふきを後に略して、とてもとのみいふことゝなれり。然れども其の意はやはりとてもかくてもの意にて、俗にドノミチといふが如し。それより遷りて、俗に到底然る事はあらじといふやうの場合に、つかふ事とされるなり。此の歌の意も、とにかくに世には長く生存して、在り難く思ふ我身なるに暫時の間のただかりそめなる如き夫婦の契りは何ぞ結ばん、結ぶも無益なりといふ意なり。と奏して辭にけり。右の歌をよみて奏聞し、内侍を賜はる事を、辭退して受けずなれりとなり。その時は心得がたくおぼえしが、其の當時にては正行の意の何ゆゑなる事明らかならず、人々不審に思ひけれとなり。後に思ひあはされては正行四條暇にて討死したる時に到りて、前の歌の意はじめて明らかにて、いとをしみあひにけり。は、あたら忠臣をうしなひし事を、人々甚だ惜しみ合ひたりしとなり。但し、いとをしみは、いとほしみの誤にて、其の情を察してあはれみかなしみたりしをいへるにはあらざるか。

此の一條につきては別に評語を加ふべき事なれど、正行が清潔なる志操は今更にいふまでもなく、師直が武將たるにも似ず色を好む癖あると其の存智に長

二條關白殿にありける右馬允行繼といひけるは、いぬる八幡の戦にいかなることありけん。かへらせたまひて御勘氣ありければ、をさなき子ひとり女房を、むつ田の里にしたしきものゝありけるにあづけて、高野の山にのぼりて髪おろしけり。

「二條關白殿は太政大臣兼基公の二男にて名は師基公、光明臺院と稱す。ありけるは其の殿に仕へて在りけるなり。右馬允行繼の父祖は詳らかならず、いぬる八幡の戦とは、足利義詮の申請によりて、南北一たび御和議の事ありける時、後村上天皇八幡の田中法印の坊を皇居と定めたまひ、専ら御征討の御準備ありけるに、正平七年五月に及びて遂に南方の軍利なくして、再び大和國に行幸ありし時の事なり。いかなることありけんかへらせたまひて御勘氣ありければ、右の八幡の合戦の時に際して、何事か行繼が主君の爲に、不實なる事にてもありしとおぼしめて、芳野へ歸りて後勘當せられ、暇を出されけるをいふ。をさなき子ひとり女房

じたりしを見るべく、又その暴威に人々を恐怖したりしありさま、行氏卿の室も我が身の利欲の爲に、我が子に等して辨内侍を欺き圖らんとせし、心の淺薄なるをさましきなど、慨歎にたへずといふべし。

とを云云は行繼が出家せんと思ひ立ちたる故に、幼兒と妻とを他人に預けし事なり、むつたの里は、芳野山の麓なる六田村なり、髪おろしけりは、頭髮を剃り落し僧形となれるをいふ。

三年ばかりありて、わが庵に來りて、あめしづくごなきけるを、いかにご問へごもいらへもせて、心のゆくかぎりなきて、おきなほり、いひけるは、諸國修行の心ざし侍りて、高野を出侍りしに、さすがに過しがたくて、六田のあたりをよそながらも見なましごおもひて、そのほごりをさすらひ侍りしに、あたらしき塚の前に十あまりなるわらはのふししづみでなげき居けるを、あはれなるさまの見すぐしがたくて、いかにごひ侍りければ、父は三年ばかりさきに世をのがれて、いづちごもなく出たまひ、御音づれも候はぬを、母君のあけくれなげきたまひしあまりに、御心みだれてすぎつる夕ぐれのほごにまぎれ出させたまひて、川淀のほごりへ身を沈めたまひし

を、人々のなきがらを尋ねて、このつかにこめさせ給ひて候へごも、したしかりつるもうごくて、御あごをごふべきたよりもなく候へば、一かたならぬかなしさにかくて候ふなり。

三年ばかりありては、行繼が出家して後三年ほど過ぎて、わが庵に來りては、此の書の作者松翁の庵へ行繼法師が來りてにて、わがとは記者自身よりいへり、あめしづくごなきけるをいかにごへごもは、行繼法師が甚しく涙を流して泣きたるを見て、松翁が何の故ぞと問へごもなり、あめしづくごといふ詞は、今俗にもいふが如く、當時の俗言にて、雨にぬれて袖も何も皆雫にぬれたるが如き形をいふなり、いらへもせては、其の返答をも爲すして、心のゆくかぎりなきておきなほりいひけるは、自ら満足するほど十分に泣きて、然後頭を擧げて行繼が曰くにて、おきなほりとあるにて泣く間はひれ俯して、形をも繕はざりしを知るべし、諸國修行の心ざし侍りて高野を出侍りしに、佛道修行の爲に回國せんと思ひ立ちて高野山を出たるをいふ、さすがに過しがたくては、妻子を預け置きたる六田村をよそに見て通り過ん事は出來難くてにて、さすがにといへるは、一たび僧となりたる以上は、妻子に意を遣すべき理なれども、尙といふ意よりいへり、よそながらも見なましと思ひては、妻子の在る六田村の邊を、遠方よりにも見んと思

ひて、其はとりをさすらひ侍りしには六田村の近邊をゐるきなをせしにて、さすらひは、俗言にウロツクといふが如し、あたらしきつかの前には、新設したりと見ゆる墓塚の前に、十あまりなるわらはのふし沈みてなげき居けるは、十歳餘とみゆる童男が俯伏して泣き居たるにて、沈むといふ語は何にても其の物に深く入る形容にて、泣き伏したる形の甚しきをいへり、おはれなるさまの見すぐしがたくては、其の形のいかにも哀憐なるが賦止し難く思ひてなり、いかにと、ひ侍りければは、其の童男の泣き居る事状を、何故の事なるぞと問ひければなり、父は三とせばかりさきに、より童男の語る詞にて、いつちともなくは、その行く處を告げず漠然たる事、御おどづれも候はぬを、其の後文通もなきを、母君のわけくれなげきたまひしあまりには、母君が毎日毎夜歎きて居給ひしその憂ひの甚しさになり、御心みだれては、遂に精神狂亂して、すぎつる夕ぐれのはせにまぎれ出でさせたまひては、去にし日の薄暮の頃の、くらきに混して家をうかれ出でなり、川よどのはとりへ身をしづめたまひしを、六田川の川淀の邊へ身を投げ入水せしをにて、六田川には川淀といふこと歌にもよめり、水の淀みて深き處なり、人々のなきがらをたづねてこのつかにこめさせたまひて候へどもは、其の母の遺骸を探り出だして村人等が此の塚に埋めてくれたれどもにて、人々の下、たづねてへ係る語、こめは、命語にて中へ入れたる謂なり、したしかりつるもうとくては、

以前は親しかりし人々も今は疎くなりてにて、かりつるの下に人といふ語を省けり、御あををどふべきたよりもなく候へばは、死後を吊ひ佛事を修すべき便宜もなきが故になり、一かたならぬかなしさにかくて候ふなりは、母の死にたるが悲しきのみならず、父がゆくへもしらすまた死後を吊ふべき事もえせず、種々の悲しさに如此泣いてのみ居るなりと告げたるにて種々悲しき事のあるを、一かたならぬかなしさといへり。

御經をよみてたびてんこ、いひしおもかげの見しこゝちしければ、あまりかなしくおぼえて、いかにめぐり來にけんこ、くやしきまでにおもひ候ひながら、こゝろづよく、經をもよみ、念佛手向けて、草の蔭には、いかゞ思ふらんこ、おしはかるにも涙にむせび、のこしおきける童のさまを見るにも、たへがたく、めも、たげられ候はざりしを見て、日もくれにければ、いざわがやごへといざなひ候ひしほどに、行方のこゝろもこなく侍りて、ゆき候ひしに、

「御經をよみてたびてんは、續經して給はらんと童が行繼法師に請ひたるにて、た

びは給ひを訛れるにて給へをたべともいへり、おもかげの見しこゝちしければは、其の童の顔を見るに見覚えある顔にて、全く我子なる事を知りたればの意、おもかげといふ詞は現物に非ずして、空影の眼中に浮かび来るにもいへど、又實物の顔面の事をもいふなり、いかにくりに來にけんどくやしきまでにおもひ候ひながらは、何故此所へ巡回はし來れるぞ、此所へ來らずは如此悲しき目には遇はざらんものをと、今更此の六田村へ來りし事を悔しき位に思ひつゝなり、心づよく經をもよみ念佛手向けては、心中の悲哀を自ら應へ耐忍して墓前に向ひ續經し、また佛への祈念をも法の如く行ひて、草の蔭にはいかい思ふらんとおしはかるにも涙にひせびは、墓中に在る亡妻の心に、今邂逅にわが此所に來り思ひかけずして續經念佛するを何と聞くらん、嬉しと思ふかあはれと思ふかと、其の意を察するにつけても、唯落涙の外なく悲しさの停め難きさまなり、のこしおきけるわらはのさまを見るにもたへがたくは、其の亡妻が跡へ遣し置いてある童男の形を見身上を考ふるにも、たゞ悲しさ極まりて耐忍のなり難きをいふ、めも、たげられ候はざりしを見ては、右の如く行繼法師が、悲歎に沈みてうつふしたるまゝに顔をも得上げずして居たるを、其の童が見てにて、めは眼もたげは、持上を約束したり、日もくれにければいざわがやせへといざなひ候ひしほどには、童が法師を慰めたるさまにて、既に日没にも及びたる事ゆゑ、今夜は我が宅に宿泊して、明

日何方へも向ひ給へ同伴せんとて誘ひたるが故ににて、我宿への下に來給へといふ語を省けり、行方のこゝろもどなく侍りてゆき候ひしには童の行く方がおぼつかなく心に係りたればその童の誘ふにまかせて其の家に行きたりしにて、行方といふ詞には母をも失なひ貧しきさまに聞こゆれば家の内のさまも如何ならん、又今後のありさまもいかにして日を送るらんと、不安心に思ふなごの事こもれるなるべし。

すむべくもあらぬほどにあれはてゝ、昔さふらひしつかへ人もいかになりぬるにや、たゞひごりのみすむなる、したしき人はおはせぬにやこゝへば、まづしくなりゆくまゝとはず侍り、むかしつかひし女の、このあたりのにのこりて、朝夕のいごなみをしてあたへぬるばかりにてこそ候へ、こ夜もすがらかたりけるは、みな我身の上の事なりけり。

「すむべくもあらぬほどにあれはてゝは、其の家は破れそこなはれて、住居し難き位になり居てなり、昔さふらひしつかへ人もいかになりぬるにやたゞひごりの

みすむなるは、當昔は奉公せし男女もわりしと、其の者ともはいかになりぬるならん、誰も家には居ず、この童た一人ばかり住居してある事よの意にて、いかになりぬるにや、の下にわらんと、いふ語を省けり、但し、いかにとあれば、かといふべきをにやとあるは、誤なり、又すむなるといふは、上に「ぞ」の係りなければ、すむなりといふべき所なれど、なるといへるは、變格にて、此の下に事よなど、いふ歎息辭をそへて聞くべし、したしき人はおはせぬにやと、へばは、童に對ひて、誰か親しく世話をする者はなきかと、よそながら問ひたるなり、まづしくなりゆく、いとどはす侍りは、其の親しく世話すべき者なきにもあらねど、家の貧困によりゆくに從ひて、其の者等も寄附かずなれりにて、浮薄の人情頼むべからざる事のみならず、昔つかひし女のこのあたり、にのこりて朝夕の云云は、昔從婢にてありし女一人、此の近傍に残り住み居て、其の女が朝夕の食物を運び持ち來りくる、のみにて、其の他には誰も來り訪ふ者なしの意にて、朝夕のいとなみとは、食事の事なり、夜もすがらかたりけるは、みなわが身の上のことなりけり、は、右の如くおはれるなる物語を、童が終夜したるを聞くに、悉く我が身上に關係したる事どもにてありけりと、大に行繼が自身の過失を悔い歎きたるなり、後來の事をよく考へ、如此困苦を妻子に與へざるやうにすべきを、必竟不行届なるより、從者にも見放され、家事困難を極めたるなれば、其の歎辭を聞くは、即ち我が身を責めらるゝに等

しくて、童の方にも夢も知らざる事ながら、行繼は聞くに堪へずと悲めるなり。
 夜もあけなんごしければ、かの女のきたりなば、見忘れぬこともや、
 あらましと思ひて、はか所にて經をよみてん、かへりこむほごに立
 よりなんごいひて、たちわかれ侍る

「夜もあけなんごしければ、終夜いろく」物語をなして、もはや曉近くなり、夜明の近くなりぬればなり、かの女のきたりなば見忘れぬこともや、あらましは、前に童のいへる朝夕の食物を持運ぶ女が來たらば、行繼が顔を見覚え居て、事の露はるゝ事、或はわらんの意は、か所にて云云は、此の家を去らんとして、童のどゝひる事、あらんと思ひて、偽り言へるなり、たちわかれ侍るは、立ちわかれ侍りさど、ありたき所なり。

この心のうちをおしはかりたまへ、かしこかたるに、ごもに袖をぬらし侍りて、げにもかゝるほだしは候はじ、ゆくへしられず出でたまふごも、玉の緒のたえたまはぬほごは忘れたまはじ、後の世をさまたぐるにぞ、あらん、ぐしたまへ、このへ奉りてん、心安く後世ねが

ひおはせよかしこいひければいさうれしげにてかへりけり。

「この心のうちをおしはかりたまへかしは行繼が右の如く歎きかなしむ心の中を推量しくれよと松翁に對していへり。どもに袖をぬらしは松翁も諸共に涙を流したるなり。げにもかゝるはだしは候はじは、少し解しかたけなる詞なれど、今行繼が言を聞きていかにも尤なり。これほど苦しき世のはだしはあらじといへるにて、かゝるはかばかりのといふ意なるべし。はだしは出家して佛道を修する心の障りとなる物をいふなり。ゆくへしられず出たまふとも云々は、よしや今後行方を定めずいかなる山に入りいかなる所に隠れ居るども、このはだしありて心を安んずる事能はずては、とても佛道を十分に行ふ事はなりがたかるべく、死せざる以上はこの念を繼つ事能はざらん。然ればこの一事、貴僧の爲には後世を願ふ一心の妨害をなすなるべしとなり。ぐしたまへどのへ奉りてんは、其の童男を同伴し來りたまへ、われよく取計らひて殿へ奉らんといへるにて、ぐすとは具の意にて、人を從へ連るゝをいへり。どのとは、二條殿の事なり。心安く後世ねがひおはせよかしは、童男はわれ引受けて二條へ奉り、どもかくも其の一身を安からしむべければ、貴僧は此の一事に念をおかず、安心して専ら佛道を修したまへど、松翁が行繼にいへるなり。いさうれしげにてかへりけりは、右の言を聞きて、行繼

法師は實によるこびたる趣にて、庵を出て去りたりとなり。

何ごかたばかりけんやがでくして來りけるを、ありつる事をけいして、ごもなひつれば、いさふびんにおぼして、御身近うめしつかはれて、このごろは右馬允行朝ご名のりて、むらなき剛のものにてありけり。

「何ごかたばかりけんは、いかなるさまにいひて童男をつれて來ることになしけるか、其の計らひ方は知らざれど、いさふ意にて、童男には行繼も實父なることは願はさいりしなれば、同伴することは容易くはなし難からんと思ひしに、といふさまの詞なり。やがてくして來りけるを、間もなくその童を行繼がつれて來りたるをなり。ありつることをけいして、ごもなひつれば、行繼が悲しみて語りし事をも、松翁より殿下へ申上げて、その童を伴ひ參りければなり。けいすといふ言は、啓の字にて皇太子皇后宮の外には申すべき言ならず。關白殿下へ對しても尙かくはいふまじきとなれど、此の書には此の法甚だみだりがはしく、他の所々にも多ければ是非もなし。いさふびんにおぼして御見近うめしつかはれては、殿下も其の情實を聞きたまひ、慙然なるものに思食し、御側近く召仕ふ者となした

まひてなり。このころは右馬允行朝と名のりては、年月を經過したる後の事にて、元來以上の事は過去をかたるにて、此の頃といへるが、この書をもものしつる頃を指せり。右馬允は父の稱を襲ひたるなり。ひらなき剛のものは、比類なき武勇者の謂にて、「ひらなき」といふ詞は撰集抄にも見えて、「ひら」は群にして世間一般の人を指し、其の尋常の群を離れ抜け出ですぐれたるを「ひらなき」といへるなるべし、即ち抜群出群の義なり。

此の一章、當時亂世の常なきありさま、武者の出家して佛に歸せる情實おもひやられ、父子たまくめぐりあひたるも、其の實を告ぐる事能はず、涙を吞みて袖をはらひ、つれなく家を出でたるありさま、又從者の浮薄なる人情など、實に然ぞありけんと思ひやらるゝ物語なれば、抜き出で、いさゝか評釋を加へつ。

つれく草

本居 豊 穎

をりふしのうつりかはるこそ、ものここにあはれなれ。

「をりふし」は時節、うつりかはるは轉變なり。ものことには其物々々につきて各といふが如し。あはれは感情の動く状をいふ。こそと係りて「なれ」と結びことに力を入れていへり。此一句は、一章の大意を先づいへるにて、所謂大綱にて次條に其細目をいへり。さて結尾の文に、また「あはれなれ」といひて、遂にこの首句に照し應じたり。

ものゝあはれは秋こそ、まされと人ここにいふめれど、それもさるものにて、今一きは心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ。

「ものゝあはれ」は、諸物につきる感情といふことにて、すべて「もの」といふは一事一物にかぎらず、濶く言ふ言なれば、形有る物も、形無き物も、此中にこもれり。秋こそ、まされと人ここにいふめれど、春夏秋冬の中にては、感情の深きは秋にありと、世

の人皆いふ如くなれとの意にて、この人ことにいへるは、ひろく世上一般の人をさしたる言なれども、白樂天詩句に、大抵四時心總苦就中腸斷是秋天といひ、萬葉集なる額田王の歌に、秋山吾者どあり、其他にも秋の感情深きをいへる言どもあるを思へる中に、拾遺集雜下なる、春はたゝ花のひとへにさくばかりものゝあはれは秋ぞまされるとある歌、此所の引用には適切なり、それもさるものにては、秋はあはれなりといふも、一理ある事なれば、勿論のことにてといふ意、今一きは心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれは、兼好の思ふ所にては、秋の感情よりは、今一段勝りて、心も浮立つ如く思ふは、春の景色なりといひて、此次に、春のけしきのすぐれたるこまをいふ、是又大綱の文なり。

鳥の聲などもこの外に春めきて、のどやかなる日影に、垣ねの草もえ出るころより、やゝ春深くかすみわたりて、花もやうくけしきだつほどこそあれ。をりしも雨風うちつゞきて、心あわたししくありすきぬ。青葉になりゆくまで、よろづにたゞ心をのみぞなやます。

「鳥の聲などもこの外に春めきては春になりて小鳥の囀る聲樂しげにのどか

なるさまをいふ、この外は物語文などに多き詞にて、今俗にいふも同意なり、尋常の事の外の義なるべし、意外存外なといふが如し、春めきはいかにも春らしきさまをいふにて、是また俗に言ふと異ならず、萬葉集の歌に、冬木成春去來者不喧有之鳥毛來鳴奴といひ、古今集に、百千鳥さへづる春とよめるが如く、春になれば小鳥の樂しげに囀る者なれば、如此いへるなり、のどやかなる日影に垣ねの草もえ出るころよりは、日も漸次に長くなりて、ゆるやかなるに、若草の生出る頃よりにて、もえは草の萌すをいふ、やゝ春深く霞みわたりて、花もやうくけしきだつほどこそあれのやゝは漸にて、やは彌の意なれば、彌々といふ語なり、次のやうやうは、やゝの音便にて、やゝとはいふを再重ねて、漸々次第にといふ意の詞なり、春深く霞みわたりての深くは、春と霞と雙方に係れる言なり、花もやうくけしきだつとは、春深くなるまゝに、花もほそなく咲出づべき色を顯すをいふ、ほどこそあれは、其時其間こそ然は有れといふ詞にて、あれといふ語の上には、數語を省きたる詞にて、此所にては前文に、春の日ののどかにをかしきをいへるをうけて、花も漸々咲出づべき其頃こそ、樂しくもおもしろくも思ひてあれ、やがて間もなくといふが如き意味なり、をりしも雨風うちつゞきては、花既に咲出たりと見て、よろこぶ其をりもをりといふ言にて、しもは例のこと更に取出で、いふ辭にて、其時に限りてあやにくに、雨風のさわがしき日のみあるを歎く意なり、心

あわたいしくちりすぎぬは花を見る間もなく、急ぎて花は散り果たりにて、あわ
たしといふ言は何にても急迫に忙しきをいふ、青葉になりゆくまで、よるづに
たい心をもみぞなやますは、花散りて櫻の梢も青葉さし、夏のけしきになりゆく
に至るまで、種々の心を勞し、物思をなす事なりの意にて、業平の歌に、世の中にた
えて櫻のなかりせば春の心はのどけからましとよめるが如く、春は始終櫻花の
爲に心をつくして、安き日なきは、これ櫻花を賞翫する熱度の高き謂にて、かくの
如く苦しむ中に、言語も及ばぬ風味あるを陳べて、春の感情深きをいへるなり。

花橘は名にこそおへれ。なほ梅のほひにぞいにしへの事もたち
かへり、こひしうおもひ出てらるゝ山吹のきよげに藤のおぼつか
なきさましたるすべとおもひすてかたき事多し。

「花橘は名にこそおへれ」は昔を忍ぶ事は、橘に多くいひ慣はして、懐古は橘に高名
なれど、いふ意にて、次の梅のことをいはんとして、先づ如此ことわれり、なほ梅の
香にそ云々は橘よりもやはり梅の方が懐古の感情を引出す物なりといひて、是
亦春を賞する一證とえたるなり、たちかへりといふ詞は、一たび去りたる所へ、又
立歸るより出で反覆といふが如く、數回同じやうにするをいふ、さて梅が香に昔
を思ひ出て忍ぶといふは、業平の月やあらぬの歌もわり、また古今集なる色より

も香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅そもといふ歌もあるを、新今
古集の頃の人々多く、月やあらぬの歌を本歌として、梅が香に昔を忍ぶといふ意
の歌よめるを思へるなり、山吹のきよげに藤のおぼつかなきさましたるは、山吹
の花と藤の花とのおのゝ其體は違へき、それゝに賞すべき所あるをいふ、藤
の花におぼつかなきさまといへるは、いかなる意なるか、少し明かならぬを、山吹
の黄色にて、判然たるにむかへて、反對に藤は薄紫にて、其色も鮮明ならざる上、
葉がくれて咲くさまをいへるなるべし、さて此きよげにといひ、さましたるとい
ふ詞は、枕草子などに多くある例にて、此下に數言を省きていひ、さしたる詞なり。
すべて思ひすてがたき事おほしは、春の中にある草木の花の類、其他にも賞すべ
き事のすくなからぬをいひて、春をよしといひし前文を結べるなり。

灌佛のころ、祭のころ、若葉の梢すゝしげに名けりゆくほごこそ世
のあはれも、人の戀しさもまされ、人の仰せられしこそげにもさ
るものなれ。

これよりは又夏のすてがたきをいふ灌佛のころ、祭のころ、若葉云々は、三事各別
にて、それゝに興あるをいへるなり、灌佛は四月八日にて、釋迦の生れたる時、天

龍降りて水をそゞげりといふより起りて、此日禁中にて其式ありしなり。祭は賀茂祭にて四月の中の酉日に行はる。京都にて諸社の祭は多くあれど、單に祭といふは賀茂祭なり。山どののみいへば比叡山川どののみいへば賀茂川の事なると同例なり。世のわはれも云々人の仰せられし云々は誰の言を指したるか詳かならず。仰せられしと敬語を以てするしたれば、兼好よりは尊敬すべき人の言と見ゆ。げにさるものなれは實に然ることにて勿論となり。

五月あやめふくころ、早苗さるころ、水雞のたゞくなご、ころぼそからぬかは。六月のころあやしき家に、ゆふがほの白くみえて蚊やり火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかじ。

五月の中にてあやめふくと、早苗とると、水雞のたゞくと、三事をかぞへいへるにて、前文に同じ、ころぼそからぬかはは、反語にて心細しなり。さて心ぼそしといふは、わはれなる謂にてはめたるなり。あやしき家は賤民の住居のさまなり。あやしは奇怪といふことなれども、上等人の眼より見て、賤家の見苦しきを奇異とするより出たり。蚊やり火ふすぶるのふすぶるは、京坂邊にての俗言にクスヘルといひ、東京の俗言にイブスといふに當れり。此所にては、蚊やり火たくと云ふ意なり。六月祓は大祓なり。これらの事委しく解釋を加ふれば、いふべきことあれども、

此文につきては、それまでには及ばざらんと、思ひてすべて略せり。以上夏の中に、てあはれにおもしろく思へる事どもをいへるなり。

たなばたまつるこそなまめかしけれ。やうく夜さむになるほど、雁なき來るころ、萩の下葉いろづくほど、わさ田かりほすなど、こりあつめたることは秋のみぞ多かる。

これより秋をいへり。たなばたの事も今更に注せずとも、よく人々のわきまへたらんと略す。なまめかしといふは、なまめくといふ語より出で、かしは其形容をいふ言なり。なまめくは女の艶色を以て装ひ、外面をとりつくらす形をいふ語にて、男にてもそれに似たる状あるをいふ。七夕の祭をなまめかしといへるは、主として女の多く集りて行ふ故なるべし。やうく夜さむになるほどは、漸々秋更て夜の寒くなりゆく頃にて、雁なきて來るころと、萩の下葉色づくほどと、わさ田かりはすとの三つ各別にて、前文の夏の條に種々をかぞへたると同文法なり。さて萩の下葉色づくといふは、古今集の歌に、秋萩も色づきぬれば、さりとす我ねぬことやよるはかなしき夜をさひみ衣かりかねなくなべに、萩の下葉もうつろひにけり。秋萩の下葉色づく今よりや、ひとりある人のいねがてにするなどよめる歌

によれり、わさ田は早稻田なり、とりあつめたることとは、あはれにものかなしきことの数多くあつまる謂にて、此詞は源氏物語の夕顔の巻に、しろ妙の衣うつさぬたのおとも、かすかにこなたかなたに聞わたされ、空とふ雁の聲とりあつめてしのびかたき事多かりとある文によれるなり、秋のみぞ多かるは他の時よりも、秋ばかりに多しとなり。

また野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくれはみな源氏物語、枕草紙などにこそふりにたれど、おなじ事また今さらにはいはいはじともあらず。おぼしきこといはぬははらふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝあぢきなきすさびにて、かいはりすつへきものなれば、人の見るべきにもあらず。

前條に秋のあはれなる事をもあけて、秋のみぞ多かる、一たびいひとぢめたれど、又一思ひ出たるさまに、野分の朝の事をいひて、尙他にもあるをさのみは、うるさきやうなれば次の文にてことわれるなり。元來一年間に、あはれにもをかしくも思ふ事をならべ舉げて評せるは、清少納言の枕草子の發端の文にありて兼好が今かくいへるも、枕草子にならへるなり。さて又折ふしの景色を書きつら

ぬるは、紫式部の長所にて、源氏物語の中にをり、景色をいへる段の文章、實にこまやかにて、これは又清少納言も及ばざる所なれば、今茲に此二書の事をいひてことわれるなり、おなじ事又今さらにはいはいはじにもあらずは、前の二書に既にいひ盡したれば更にいふは、愚なるが如くあれど、たとひ同じ事にて、之を忌避けていふ事は、すまじと定めたるにもあらざれば、いへりとの意なり、おぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなれば、とは心に思ふ事は、何にても言に發すべし、之を言に發せず心中にばかり蓄へ置く時は、腹中に溜り滞り鬱結して、悪しとの意なり。元來此文は大鏡之序に、おぼしき事はぬは、げにぞはらふくるゝこと、ちぞしけるどあるをとりてかけるなり、おぼしきこといふ詞は古く鬱悒をおぼしきこといへる語ありて、其義かとも思はるれど、尙然らず、思食などはおぼしにて、おぼしき事とは心に思はるゝ事といふ意なり、又はらふくるといふ言は、和名抄に痕満也、波夏不どありて、世に痕満といふ病をいへり、これは語例までにいへり、筆にまかせつゝあぢきなきすさびにて、とは今此所に書記したるは、全く筆にまかせたるからにて、何の益もなきなぐさみわざにての意なり、あぢきなきは俗にニガニガシといふが如く、何の味もなくつまらぬ事をいふなり、すさびは手すさび口すさびなぞの、すさびにて、何心もなく遊びがてらに爲すわざをいふ、かいはりすつへきものなれば、搔破棄べき物なれば、かきを音便にかいといひ、やふるをやること

もいふなり、かきはすべて手を以てするをいひて、かいさぐる、かいひく、かいのどふなどの詞多し、人の見るべきにもあらず、此書ははかなき一時の筆すさびにて、世の人の手にふれ、讀見るべき物にあらざれば、かゝる事をも記したるなりと、兼好の謙遜していへる文なり。

さて冬がれのけしきこそ、秋にはをさくをこるまじけれ。みぎはの草に、紅葉のちりごどまりて、霜いさあろうおけるあした、やり水よりけぶりのたつこそをかしけれ。

これよりは冬のさまをいふをさくは物語文に多き詞にて、源氏物語の玉小櫛に、俗言のアマリといふ語、よく當れりといへるが如くにて、此所も秋にはあまりおどらずといふ意なり、やりみづは庭に水を引き入れて、流し遣るさまにつくり構へたるをいふ。

年のくれはて、人ごごにいそぎあへるところぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、さむけくすめる廿日あまりの空こそ、こゝろばそきものなれ。

年のくれはて、人ごごにいそぎあへるとは、十二月の末二三日間のさまにて、年

の終の事と年の始の準備とにて、人々の多事繁忙に、奔走するをいへるなり、またなくは又外に似る物なくの意にて、物の勝れたるをいふなり。然るに此多事繁忙なるを、是あはれなりといへるは、尋常人の心には、甚解し難き奇異の見なれど、兼好閑人の心より愛したるなりと、文段抄にいへるや可ならん。但し次の文に、公事ども繁く、春のいそぎにとり重ねて、云々とあるを合せ考ふれば、其多事繁忙なる中に、自然風流優美なる事もまじるを、おもしろく思へるもあるべし。すさまじきものにして云々の、すさまじといふ詞は不興又は殺風景といふ意にて、俗言に勢の強きさまにいふは謔なり。さて十二月の月をすさまじきものといふ事は、源氏物語あけまきの巻に、世の人のすさまじきことにいふなるは、まはすの月夜とあり、河海抄には、枕草子すさまじきもの、一條に、まはすの月夜とあるよしをいへり。さる本もありしにや、今は異本どもにも此言はみえず。

御佛名荷前の使たつなごぞ、あわれにやんことなき、公事ごもしけく春のいそぎに、ごりかさねて、もよほしおこなはるゝさまぞいみじきや。

御佛名は、十二月十九日より廿一日まで三箇夜、或は一夜の事もあり禁中に諸僧を召れ行はるゝ行事にて、三世諸佛の名を唱ふるを以て佛名といふ。延喜式江家式次第公

事根源等に委し、荷前の使は十二月に定めらる中に、十段八段に幣帛使の發遣あるをいふ、是亦其委しき事は、前の三書に就て知るべし、荷前はユサキとはいはず、ノサキと讀む例なり、元來荷前といふ事は、萬葉集の歌に東人之荷向サキ、乃荷之緒ノサキ、爾毛云々とある如く、諸國より貢獻する、常年のみつき物の初荷の謂にて、其物の中より取分けて、陵墓へ供へらるゝ義なるが故に、荷前の使といへり、さて、たつは發なり、やんごとなきは、貴きなり、公事どもしけくは、内侍所御神樂其他十二月に行はるゝ義式の多きをいふ、公事もコウジとはよますクジといふ例なり、春のいそぎは正月の準備、とりかさねは十二月の義式の多き上に、正月の準備を加ふるをいふ、いみじきやは此所にては、恐れ敬ひたるさまにて、やは歎辭なり。

追難より四方拜につづくこそ、おもしろけれ。つごもりの夜いたうくらきに、松ごもごもして、夜は過ぐるまで、人の門たゝき走りありき、何事にかあらん。こころしくのゝ若りて、足を空にまごふが曉かたより、サすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりもこゝろほそけれ。なき人のくる夜さて、たまゝつるわさは、此頃都にはなきを、あづまのかたにはなほする事にてありしこそ、あはれなりしか。

追難は十二月三十日の夜行はる、之をなやらふとも、おにやらひともいふ、方相とて四目の假面を被りたる者を、殿上人桃弓葦矢を以て射る、是も委しき事は、延喜式江家次第公事根源等を見るべし、四方拜は正月一日の曉の寅の時、天皇屬星の名を唱へ給ひ、天地四方山陵等を拜し給ふ御式にて、昔のさまは是も前の三書に委し、明治の大御代となりては、屬星などの事は廢せられたり、さて追難より四方拜につづくといへるは、江家次第に追難後供、御湯、鶏鴨掃部奉仕、御裝束、於清凉殿東庭云々とありて、卅日の夜は御寢の間もなく、四方拜の事になればなり、松ごもごもしては、松明にて之を松の火ともいふ、人の門たゝきはしりて云々は、今俗のカケトリといふ者のさまにて、他の用事もあべく、繁忙なるさまなり、足を空にまごふとは、足も地につかざる急忙の狀にて、足を空にして惑ふといふ意なり、曉方よりさすがに音なくは、然ばかりさわかしかりしも、曉の頃よりは鎮靜したるをいふ、年のなごりもこゝろほそけれは、其物音の聞ゆる間は、今年の残りたる心ちせしも、既に其さへ絶えぬれば、一年に別れ果てたるやうなるが心細く思はるゝなり、なき人の来る夜とては、報恩經といふものに、一年間に六回亡靈の來る時あるよしを説きて、即ち十二月晦日午時、來正月一日卯時歸とある是なり、七月十四日には年末の方はやめて、七月のみとなれるがごとし、枕草子にもゆづり葉の條に、

十二月のつともりにも、時めきてなき人のくひものにも、敷くにやど、あはれなるに云々とあり、あづまの方にはとは、此頃關東には年末の靈祭あるよし、聞及びてかけるなり。

かくて、あけゆく空のけしき、きのふにかわりたりとは、みえねど、ひきかへめづらしきこと、ちぞする。大路のさま松たてわたして、はなやかにうれしげなるこそ、あはれなれ。

此一段は前にもいへるが如く、元來枕草子の發端に、四季のさまをいへるに基づき、けしきのこまやかなるさまは、源氏物語の詞つきにならへるが如し。さて枕草子には、をかしといふ詞を多くつかひて、一種の體をなせるが如く、此章にはあはれといふ詞をくつかへしいへるは、ことさらに構へたるならんと思へど、こそと係りて、れと結べる言の多きは、いさゝかこの人のくせなるがごとし。

花はさかりに、月はくまなきを、のみ見るものかは。

此の一段は、専ら感情風韻といふもの、事を論じ、人情に雅俗の別あるをいひたり。即ち、前回到評釋したる第十九段のもの、あはれといふも是れにして、其の意は一なる中に、此の段は一層適切にいへるが如し。花と月とを對へ、さかりとくま

雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ、あらぬも、なほあはれに情深し。

なきとを對へて、下ののみ見るものかは、といふ語は、其の二事を受けたる文なるが、正しくいふ時は、さかりにのを省きて、花はさかり月はくまなきとあらば、下のをにて受くる意明かなれども、こゝは花の事と月の事を連らねいへるが故なり。さて、のみとある詞、最も力ありて主眼なり、見るものかは、は反照にて、見る物ならんや、見るものに非ずなり、固より、花は盛りを賞し、月は明らかなるを翫ぶは論なき謂なれば、のみといひて、其の他に見るべき點あるをいへるなり。さて、此の一句は大綱にて、次條に其の理由を陳べたり。

これ、月花に直接に對はずして、月花を愛する情の深きをいへり、たれこめて云々とは、古今集なる、たれこめて春のゆくへもしらぬ間に、まらし櫻もうつろひにけりといふ歌の事なり、なほは例のヤハリの意にて、右の如く、現に月をも花をも見ざるも、其の情は共に深しとなり。

さきぬべきほこの梢、ちりしをれたる庭、なごこそ見所おほけれ。歌のこごばかきにも、花見にまかれりけるには、やくちりすぎにけれ。

ば、ごもさはる事ありてまからで、なごもかけるは、花を見てこいへるに。おこれる事かは。

「さきぬべきほどの梢は、花のいまだ咲き出でざる間の梢にて、さきぬべきは、將に開かんとする前をいふ、ちりしをれたる庭は、花の散りて色なく、枝には既に残らぬ庭なり、此の二つは共に花を賞する方よりは、不満足の時なり、然るを、なごこを見所多けれど、却りてよしとしてほめたるは、情を盡くす方より、感深きをいへるなり、歌のことばがきは、はしがきども、はし詞どもいふものなり、花見にまかれりけるには、やくちりすぎにければ、野にても山にても、花見に行きたるに、既に落花後にて、花の無き時の事、さはる事ありてまからでは、朋友などの花見に誘はれし時、故障有りて得行かぬ時にて、右やうの時に遺憾に思ふ情を、歌によむをいふ、花を見てといへるにおとれる事は、はし詞に花を見てといひて、正しく花を見たる歌のあるよりは、却りて前なる二種の如き、遺憾なるはし詞して、花を見ざる意の歌ある方、風情ありておもしろしといへるにて、前條の雨夜に月を懸ひ、病に引籠り居たる間に、花盛りを空しく過したると、全く同意の感をいへるなり。

花のちり、月のかたぶくを、またふならひは、さる事なれど、ここに

たくなゝる人ぞ、この枝かの枝ちりにけり、今は見どころなし、などはいふめる。

「花のちりと、月のかたぶくとは二事にて、落花月没を惜しみ慕ふ習慣は、人情の常にて、勿論然るべき事にはあれども、それを評する人の言に、雅と俗との別あるをいふなり、ことにかたくなゝる人とは、殊にすぐれて頑愚の人物といふにて、いさゝかも雅意のなき俗物といふが如し、この枝かの枝ちりにけり、今は見所なしは、前にいふが如き俗物は、花の散りたるを見て、無造作に見るに足らずといひ放つをいふなり、故に、花の散るを惜しみ月の傾くを慕ふ主意は、各別は無きも、雅意ある者は右の如く冷淡にいひ放つ事は、せぬものなるに對して、愚俗者の風韻なきをいへり。

よろづの事はじめをはりこそをかしけれ、男女の情も、ひこへに逢見るをばいふものかは、あはでやみにしうさをおもひ、あだなる契をかこち、長き夜を獨あかし、遠き雲居を思ひやり、あさちが宿にむかしを忘のぶこそ、いろ好むこはいはめ。

「よろづの事はじめをはりこそをかしければ、何事も其の盛時は却りて風情のな

きものにて、始と終との不完全なる際が、感情深きものなりといへるにて、即ち前なる花ならば、未咲き出でざる前と散りたる後と、月ならば、未見えざる時と傾きたる空とに感情は深き謂にて、發端の花は盛に月はくまなきをのみ見るものは、どいへるに應じたり、さて、かくいひおきて、男女の間の情にいひ及ぼせり、男女の情もひとへに逢見をばいふものは、即右の發端の文と同一意にして、男女の間の情は逢ひ見る事が主要なるは勿論にて、逢はんと思ふ爲にこそ戀の情はあれ、これ花は盛りを賞し、月は明かなるを既ぶと一なれど、感慨の情の深く、歌などによみても、味のあるは却りて意の如くならざる時の、慨言にある理をいふなり、わはでやみにし云云、わたなる契云云、長き夜を云云、遠き雲居云云、あさちが宿云云の五條はいづれも男女の間にして得逢はず、獨りにてその不幸を歎く種類なり、いろ好むとはいはれは、好色家の風情ある場合は右の類にあるなれば、單に逢ひ見るをのみ樂みとするは眞の好色家には非ずといふ意味なり。

望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、曉ちかくなりて、待出たる、いご心深う、青みたるやうにて、深き山の、杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあ

はれなり、椎柴、白かしなごの、ぬれたるやうなる葉の上に、さらめきたる、こそ、身にしみて、こゝろあらん友もがなご、都こひしうおぼゆれ。

これよりまた立ちかへりて月の事をいへり、望月のくまなきをば、満月のいさゝかも曇り無きをにて、千里の外までながめたるは、其の明月を海上または廣野なごにて遙かにひろく見渡すをいふ、曉近くなりて待出たるは、宵の中より月の出づるを待ちたるに、月出遅くしてやうやく曉更になりて、東の山のはに月の出でたるを待ちつけたる事にて、此「待ち出でたる」といふ詞の下に、かといふ辭をそへて聞くべし、青みたるやうにて、深き山の杉の梢にみえたる木のまの影は、即ち前文の遅く出づる月のけしきにて、深山の杉林の、青色にして、奥深きを、遠く望みたるさまなり、うちしぐれたるむら雲がくれのほどは、又別にて、これも亦月をあらはには見ず、かすかにみたるけしきなり、またなく、わはれなりとは、前にいへるが如く、あらはには月を見ずして、かすかに其光りの漏るゝを見たる類が、却りて比類なく、感情ありとなり、椎柴、白樫などのぬれたるやうなる葉とは、深山、幽谷にある樹木類の、さら／＼として、月光に照合ひたるが、雨霽なごにぬれたるが如く、みゆるをいふ、身にしみては、その月夜の景色の、物づく、俗に「ツットム」といふは

せに感じたるをいへり、心あらん友もがなど都懸しうは、たゞ獨身にて見るは惜しく、同感の朋友もあれかしと、都に在る人々の事をそゝるに思出で、慕ひたる山里人の情をいへり。

すべて月花をばさのみ目にて見るものかは、春は家をたちさらでも、月の夜は閨のうちながら思へるこそ、いさたのもしうをかしけれ。

「すべて月花をばさのみ目にて見るものかは」とは總じて月花を愛翫するは、目に見るのみに非ずして、心に思ひて之を味はふにあるものなりといふ意にて、目に見るものかはといふ詞最も烈しく極短なる語勢なり、春は家を立去らでもは、花の事にて此の詞の下に、花を思ひといふ言を入れて聞くべし、月の夜は閨の中ながらもは、前の花のことにいへると同意なり、思へるこそ、その詞は花と月との二にかゝれり、いとたのもしうをかしければ、花月に關せる情厚く深切なるを賞し、これをおもしろき事とせるなり。

よき人はひとへにすけるさまにもみえず、興ずるさまもなほざりなり、かた田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ、花のもこには

ねちより立より、あからめもせずまもりて、酒のみ連歌して、はては大なる枝こゝろなくをりごりぬ、泉には手足さしひたして、雪にはかりたちてあごつけなご、よろづの物よそながら見る事なし。

「よき人は、貴人にて、次の田舎人に對せり、ひとへにすけるさまにもみえずは、純一に其物を好むやうにもみえずにて、興ずるさまもなほざりなり、は其物を見ておもしろがり悦ぶ形容も、等閑冷淡なるやうにみゆるをいふ、かた田舎の人は、片よれる田舎の俗人なり、色こくよろづはもて興ず」とは、萬物を愛する形容が、あらはに厚かましきにて、色こくは俗に「シッコイ」といふが如く、正直に熱心なるにはあれど、風致に乏しきをいへるなり、花のもとには「より」をりとりぬまで、皆其の田舎人のしわざをいふ、ねちより立よりは、強ひて無理に、花下に分入り近づきさまをことさらに悪口を以ていへり、あからめもせずまもりては、目を放たず花を見つめをるをいふ、貴人なごの花を見るは、遠く之を望み居て、近くも立ちよらずと見ては、さしも花を愛せざるが如くみゆる中に、其の情は却りて深きが、田舎人の行爲と反對なるをいへるなり、泉には手足さしひたしては、夏の納涼雪にはお立ちてあごつけは、冬の雪見のさまにて、これ亦、田夫野人の卑俗なる行爲をいひて、前の花見の事の類例を挙げたるなり、さて、此の下に、賀茂祭を見るさまに、京人

と田舎人との差別大にことなる事をいひ、又それより人世の無常を観ずる事を陳べたれど、今は之を略す。
上件の事どもは、最初にもいへるが如く、人情の雅致風韻といふ物を主として論辨したるにて、表面よりいへば、花の盛、月の明、男女の和合、花月の宴會、皆これ人の好む所にして、これに反するは正しき道に非ず、清貧を樂しむといふが如き一種奇異の好事家の類にて、あらはにこれをいへば、俗にいふ負惜みに過ぎるが如くなれど、よくよくこれを味はふれば、敢て然らず、既に宜長の玉の小櫛にもあはれといふ事を論じおけるが如く、人情といふ物は、今日の所謂理想的にして、法律以外に存する人道最も貴重すべき物なり、其の人情の切實なる感を養ふ方よりいへば、此の愛好の論旨大に風味あるを覺ゆ、依りて道德の爲にも、間接ながら其の利益を興ふべし、讀者果していかなる感あるか、請ふ之を質さんとす。

源平盛衰記

(宇治川の先陣)

落 合 直 文

源平盛衰記は、作者詳ならず、葉室大納言時長の著なりともいへり、全篇を通讀するに、優美悽慘雄壯文章の素として、一の備はらざるものなく、實に鎌倉時代の散文の精粹といはざるべからざるものなり。

木曾義仲都にて狼藉斜ならず。兵衛佐大に驚き給へり。
木曾と平家と一になり、九國、四國、南海、與力同心せば、天下を鎮めむこと、たやすかるべからず。これ頼朝のいたす先、義仲を追討して、逆鱗をやすめ、たてまつり、その後、平家を亡すべしとて、六萬餘騎を差上す。これ兵を起すに於て鎌倉殿の侍所にて評定あり、合戦の習敵に向ひ、城を落すは、案のうちなり。大河宇治河をを前にあて、兵を落さむこと、ゆゑ、しき大事なり。宇治河先陣のなみな都に近き近江國には、勢多橋、これ大向ふものその流の末に、山城國には、宇治橋、これ堀手のつら一の難所あ

り。定めて橋は引きぬらむ河は深くして流荒しなべての馬伏生の渡すべき川にあらずその上河中に亂杭逆茂木打ち水の底に太綱張り流しかけぬらむ良馬下なるあまたの名馬はこれ共を支度して宇治勢多を渡して高名高綱の宇治河先陣のあるべしこそ議せられける。

一大段いくさ
評定をいする。

兵衛佐は源朝朝のことなり。○逆鱗は龍喉下有逆鱗徑寸人有纓之則必殺人とあるによれるものにて天子などの宸怒にいふ語なり。こゝは後白河法皇の御憤りをいへるなり。○侍所は諸士の宿直待衛のところをいふなり。○ゆゝしき大事は容易ならぬ大事といふにおなしゆゝしは思ひ思ひの約にても思ひ憚る意なりしがやゝ轉じては非常または重大などの義にも用ゐるなり。○橋は引きぬらひは引き落しゝならむの意なり。このころの詞なり。○なべての思は普通の馬尋常の馬の義なり。○亂杭逆茂木は菱勢樓竹東樂堂と合せ稱して要害の六具といふものにして共に人馬の進行を妨ぐるものなり。亂杭は杭を不規則に立てなればその杭と杭との間に綱などを結びつゝけてあるものなり。逆茂木は鹿岩または鹿角岩ともかきて棘木などの如きものをたてなればおくなり。

かゝりければ大名小名黨も高家も面々に其用意あり上總國住人介八郎廣常は磯いふ馬を引かせて参りたり。下總國住人千葉介常胤は薄櫻いふ馬を引く。武藏國住人平山武者所季重は目槽馬毛馬毛にて引く。同國澁谷莊司重國は獅丸子毛にて引きたり。畠山莊司次郎重忠は秩父鹿毛大黒人妻高山葦毛毛にて引きたり。相摸國住人三浦和田小太郎義盛は鴨上毛白浪毛にて引きたり。伊豆國住人北條四郎時政は荒磯毛にて引きたり。熊谷次郎直實は權太栗毛毛にて引きたり。大將軍九郎御曹司は薄墨青海波毛にて引かれたり。同蒲御曹司は一霞月輪毛にて引かれたり。このあまたの名馬は生是等は皆曲進退の逸物六鈴沛艾の駿馬強きことは獅子象の如く早きことは吹く風の如し。重きを揚げむとて先輕きをされば越後越中の境なる姫早川と利根川と駿河國には天龍川大井川などいふ大河をわたしし馬ごもなり。まして宇治勢多を思ふに物の數にやこそ各々勇み申しける。馬を

つれもの勢に代ふ、これの合戦は馬を
つれもの勢に代ふ、これの合戦は馬を

大名小名はもと名田所有の多少に區別せる名にて、こゝも將軍の家臣の守護地頭等を所帯の大小によりて稱せしなり。○黨も高家もは黨は氏族より起れる一の團體なり。高家は門閥の家がらなり。薄櫻精毛、鹿毛、草毛、鴨上毛、栗毛などは、皆馬の毛色を以て名づけたるなり。そのうち、精毛は霞毛、または油馬におなじ。和名抄に、辨色立成に油馬は精毛馬也云々とあり。また、鴨を精毛と訓す。爾雅に、驪白の雜毛は鶉なり。同疎に、毛色黒白にして、腹に雜色ありて相錯れる物を鶉といふとあり。鹿毛は驪馬のことなり。毛詩の註に、赤身黒鬣を鶉といふとあり。草毛は芙蓉なり。和名抄に、芙蓉は蘆のはじめて生ずるなり。俗に草毛といふは、これなりとあり。爾雅の注にも、芙蓉は青白にして、芙蓉の色の如しとあり。鴨上毛は、鴨の上毛に似たるよりの名なり。鶉毛、鶉毛など、よく鳥の毛色を以て名づくるなり。栗毛は、皂毛ともかきて、鹿毛よりはやく、黒き馬をいふなり。○磯荒磯などは、共に馬の名なれど、毛色にあらず。海邊などにて生れしより、かく名づけたるものなるべし。○獅子丸は性質の獅子の如くなるより、名づけたる者なるべし。○薄墨、青海波、一霞、月輪などは、毛色よりいひたる名なるべけれど、いかなる馬なりしかさたかならず。試にいひむに、薄墨は、前の簿櫻など、ひとしき名にて、薄黒き馬にてもありしならむ。一霞月輪は、白き班などのある馬にてもありしならむ。○上總國住人介八郎廣常は、東

鑑によるに、壽永二年の冬、既に誅せられたり。こたひのことは、元暦元年のことなり。こゝに出だせるは誤ならむ。○三浦和氏は、和氏は三浦より別家したものなれば、本家の姓を合せて稱するなり。例へば、物部氏より出てたるものを、引田物部、または中臣氏より出てたるものを、中臣智宜などいへるが如し。○九郎御曹司は、義經にて、蒲御曹司は、範頼なり。曹司は、曹子ともかきて、部屋の名なり。それより部屋住のものを御曹司といひしなり。蒲は、三河國の地名なり。範頼が生れし所なれば、蒲冠者とも、蒲曹司ともいふなり。○習曲進退の逸物は、進退屈伸自由の馬をいへるなり。逸物は、他にすぐれてはやく馬をいふなり。逸足などいひたる例あり。○六鈴沛艾駿馬は、はね跳りていさむ馬をいへるなり。駿馬は、漢語抄に、土岐宇萬、日本私記に、須久福太留宇麻とあり。馬の美稱なり。○物の數にやは、種々の大河を渡し、馬をもなれば、宇治勢多は、物の數にもあらじの意也。

この中に、佐々木梶原馬に事をぞ闕きたりける。梶原を始めて佐々木とせり。兵衛佐殿には、をりふし、秘藏得ておもしろし。御馬三匹あり。生駿、磨墨、若白毛。こぞ申しける。陸奥國三戸立の馬、季衡が子に元能冠者が進ぜたるなり。太くたくまじきが、尾髪あくまで足りたり。

この馬、鼻強くして、人を釣りければ、異名には、町君に附られたり、磨墨のしるすれ生。駿。こは、黒栗毛の馬、高八寸、太くたくまじきが、尾の前ちと白かりけり。當時五歳、猶もいでくべき馬なり。これも、陸奥國七戸立の馬、鹿笛を金焼にあてたれば、少も紛るべくもなし。馬をも人を食ひければ、走る馬は能く生。駿。と名附けたり。次に生駿のうま梶原源夫、景季、佐殿の御前に参りて、君も御存知ある御事に候へども、推参夫。景。季。佐。殿。の。御。前。に。参。り。て。君。も。御。存。知。あ。る。御。事。に。候。へ。ど。も。推。参。し。目。に。見。る。か。如。弓。矢。取。る。身。敵。に。向。ふ。習。は。よ。き。馬。に。過。き。た。る。こ。こ。な。し。健馬に乗りぬれば、大河をも渡し、巖石をも落とし、蒐くるも引くたやすかるべし。力は樊噲、張良か如くつよく、心は、將門純友が如くに猛けれども、傍に人なきか如く思ひ居る乗りたる馬弱ければ、自然の犬死をもし、永き耻をも見る事にはへり。されば、生。駿。を。下。し。預。り。て。今。度。宇治河の先陣を勤めて、木曾殿を傾け奉り候はゞ、やと傍若無人に憚る所なく申したり。景季の言をわらしてそが佐殿や、案じ給ひけるは、我

土肥杉山に七人隠れ居たりしに、梶原に助けられて、今世に出てつることも、忘れがたく思ふなり。頼朝の心をくわしむ賜はばやとおぼし召しけるが、また案じて、洗吟やべき蒲冠者も人してこそ所望申しつれ、景季が推参の所望頗る狼藉なり。また、これほどの大事に、馬に事かけたりと申すを、賜はでも如何あるべきと、かく案じて宣ひけるは、頼朝の心をくわしむ景季慥に承れ、この馬をば、大名小名、八箇國のものごも内外につけて、所望ありき。就中、大將軍にさし遣す、蒲冠者、まひらに、まかり預らむといひき。然れども、源平の合戦未だ、落居せず、木曾追討のため、東國の軍兵、大概上洛す。知らぬ、平家と木曾と一に成りて、大なる騒となりなば、頼朝もうち上らむ、その時の料にと思ひて、誰々にも賜はざりき。唯高綱のみ是は、生。駿。にも。相。劣。ら。ず。も、磨墨、誠に逸物なりければ、笑を含み、畏りて罷り出で、黒漆の鞍磨生

鞍の黄旗輪のを置き、舍人數多附けて、氣色してこそ引かせたれ。思ひあか
れんか見よか如し。明日の辰の始に、近江國住入佐々木四郎高綱、佐殿の館に
早參して、所存の生障を請ふはそ
の生障もなる所存ある體と覺えたり。忠實の情めてつべし兵衛
佐宣ひけるは、いかに、御邊は、この間は近江に在國と聞けば、志あら
ば、軍兵上洛に附きて、京へぞ上り給はむずらむと、相存するに、いつ
下向ぞと問ひ給ふ。先づつ問をせしめて
その志を試みる高綱申しけるは、その事に侍り、去
年十月の頃より、江州佐々木莊に居住のところに、かゝる騒動を承
れば、誠に、近きにつきて、京へこそ打ち上るべきに、軍の習命を君に
奉りて、戰場に罷り出づることなれば、再び、販參すべしと存すべし
にあらず。今一度見參にも入り、御暇をも申さむため、これ所存
の一なり又、いつ
くの討手にむかへども、慥の仰をも蒙らむ料に、これ所存
の二なり正月五日の
卯刻に、佐々木の館を打ち出で、三箇日の程に、鎌倉に下着し侍り
し。念きたる狀、言はれど明なり。下の馬、かつは、下向せずして、自由の京上りも、
は難せぬ。扱じぬといふな伏せたり。

その恐ありと存じ、これ所存
の三なり旁の所存によりて、罷り下れり。あり、何の
れか容れらむ志は、かやうにはこび奉りたれども、一匹持ち侍りたる馬
所存のむれは、馳せ損じぬ、親しき者といふ、知音と申す人々、面々に打
ち立つの間、誰に馬一匹をも尋ね乞ふべしとも覺えねば、そのまこと
さるより出つならむ如何仕り侍るべきと心勞して、大名小名既に上りぬ
れども、今までは、かくて候ふなりと申す。生障を請はむの意いはれざるし。
兵衛佐殿は聞きあへず、下向今に始めざる志、神妙々々、間を迫り出す。
抑も、木曾朝威を輕じ奉るによりて、追討のために、軍兵をさし上す
宇治勢多の橋、定めて引きて侍らむ。宇治川の先陣渡されなむやと
ありければ、これ頼朝の高綱
に望むこころ高綱申しけるは、近江生立の者にて候へば
間近き宇治川、深さ淺さ、淵瀬までも、委しく存じ知りて候ふ。彼の手
に向ひ候はゞ、宇治川の先陣は、高綱と申す。こゝに望む高綱の一身に集れり
佐殿は、去る治承四年八月下旬の頃、石橋の合戦に、大庭三郎に追ひ

落され、遁れかたかりしに、殿原兄弟返り合せて、禦矢射て、頼朝が命を助けられき。その時は日本半分、こそ思ひしかとも、世未だ落居せず、さしたる事なし、相構へて、今度宇治川の先陣勤めて、高名し給へ必ず、相計ふべきなり。君の恩海の如し。君の恩海の如し。頼朝、随分泌藏の生、暖御邊に預け奉る。直に仰を蒙る。この一言はじめて。高綱は、今世の御大恩、希代の面目、家門の勝事、何事かこれに如くべき。高綱は、今世の御大恩、希代のご思ひければ、畏り入りて、馬を賜はりて、出でむとするところに、高綱は、今世の御大恩、希代の面目、家門の勝事、何事かこれに如くべき。佐殿宣ひけるは、この馬、所望の人あまたありつる中に、舍弟蒲冠者も申しき。殊に、梶原源太、直参して、まひらに申しつれども、しもの事あらば、乗り出でむずれば、さて、賜はざりき。その旨を存ぜられよ。と仰せければ、君と臣との情な。高綱いさゝかもそごろかず。座になほりて畏り、にほれし涙は、言さ共。宇治川の先陣、勿論に候ふ。この一言、大注。以下、下文、若その、高綱若し、軍以前に死す、と聞き召さば、この言を待てり。

先陣は、はや、人暗に景季に渡されけり。と思し召さるべし。軍場にて存命と聞き召さば、宇治河の先陣、高綱渡しけり。と思し召されよ。文下の嫌ふまじ、河端にても、河中にても、引き組みて勝負を決すべし。と申し定めて出でにけり。○三、大段頼朝、高綱と景季とに、磨墨と生、暖とを賜ひしことをし。

生、磨墨、若白毛とぞ申しける。陸奥國三戸立の馬云々の申しけるの下に、脱文あらむかなにとなれば、こゝは、三匹の馬のうち、宇治河先陣に必要な磨墨と生暖との素性を叙するところにて、生、の方には、黒栗毛の馬高八寸云々これも陸奥國七戸立の馬云々とあるに、磨墨の方にさることをかゝざる理なきのみならず、文章上より論するも、若白毛のことか磨墨のことか、突然にて更にわからねばなり。磨墨とは、〇〇毛の馬にて、高〇寸云々など、生、のところにかゝけたるが如き文字ありしか落ちたるならむ。〇三戸七戸は、共に陸奥の地名なり。生暖は、信濃の産なりといふ説も見ゆめれど、いかゝあらむ。〇町君は、遊君のことなるべし。人を釣り込むよりかくいひしなるべし。〇猶もいづくべき馬は、年まだ若かければ、猶

も力の出て來べき馬といふこゝろなり。○鹿笛を金燒にあてたれば、馬はもと
燒印をあつるが例なり。生は鹿笛の形の燒印をあてたるなり。○佐殿は、兵衛佐
殿を省きていへるなり。蒐くるは、かくるとよむなり。前へかけることなり。○梶原
に助けられては、景季の父平三景時に助けられしをいふ。○まひらは、眞平にて、ひ
たすら懇願することなり。○落居すは、落ちつかず、落着せず、平定せぬをいふ。○氣
色しては、威張るさまなり。○いかに御邊のいかに、問ひかけの詞、御邊はそなた
などいふにおなじ。○軍兵上洛につきて、京へぞ上り給はむすらむは、鎌倉軍の上
洛につきて、近江より直に京へ上るならむといふことなり。○仰をも蒙らむ料に
の料は、ためになぞいふほどのことばなり。○佐々木の館を打ち出て、の佐々木
は地名にて、佐々木の莊なる館をうら出て、の意なり。○自由の京上りは、君の許
可を得ずして、私に都に上いるいふ。○面々に打ち立つの間、間は、場合などをふ
こゝろ。○今まではかくて候ふなりは、今日まで猶ほ出發せず、かく躊躇し居ると
なり。○渡されなむやのやは、わたされなむや否やといふ意のやなり。○大庭三郎
に追ひ落されは、石橋山にて、大庭景親のために破られたることなり。○殿原兄弟
は、高綱の兄弟なり。太郎定綱、次郎經高、三郎盛綱、高綱は、四郎なり。○日本半分とこ
そ思ひしかは、日本半分をも與へて、その勢に酬いむとこそおもひしかといふな
り。○相搦へては、心してなり。○相計ふべきは、充分に賞與すべきをいふなり。○舍

弟浦冠者も申しきは、浦冠者も所望を申しきの略なり。○そゝろかすは、すゝろか
すのすゝのそに轉じたるものにて、物にあわてぬさまをいへるなり。○敵をさらふ
まじは、敵はたれにてもさらふまじ、それを相手に勝負を決すべしとなり。

由井濱に打ち出で、聞きければ、大勢は、大抵、昨日、夜部に、謙倉を出
でたりといふ。さては、駿河國浮島原の邊にては、追ひつきなむと思
ひて、十七騎にて打ちて、殿原殿原とて、稻村、腰越、片瀬川、砥上原、八松
原馳せ過ぎて、相摸河を打ち渡り、大磯、小磯、酒匂宿、湯本、足柄、越え過
ぎて、急ぎ馳りてりたまし引き懸け、引き懸け、打つ程に、その日は、二日路を
一日路に、黄瀬河宿に着きにけり、喜び勇めるさま、見尋ぬれば、案に違は
ず、大勢、駿河國浮か原に扣へたりといふ。果して思ひし正月十日餘の事
なれば、富士の裾野の雪げに、富士の河水増りつゝ、東西の岸をひた
した、れ輒く渡すべき様なし。九郎御曹司、の大將、擧手兵どもに、この川の
水増りたり。如何すべきと宣へば、口々に申すやうは、宇治勢多を渡

さむ故實のためにも先づこの河を渡して見るべきなれ。されば馬
 筏を組み渡し候ばやと申す。その言やまたしからむ。蒲御曹司の大将宣
 ひけるは、軍の評議をば、土肥次郎に申す合すべし。こころ、佐殿は仰
 ぜありしかば、彼を召せて召されたり。この事にて、範頼と義経といかに
 の人となりは知られなむ。土肥殿、この河の水出たるをば、なにかすべき。宇治勢多のならし
 に、馬筏を組み渡して試みばやと申す者多し。相計られよと仰せ
 ければ、實平畏りて申しけるは、敵をだに目に懸けたらば、馬筏にて
 も急ぎ渡すべし。この河は、渚近くして、水の早き。こゝ征矢をつくよ
 りも猶早し。一引き引き落されなば、馬も人も助かるべからず。敵に
 人馬を損するははかりず。佐殿も、木曾、定めて宇治勢多の橋は引きたむ。謀
 定の軍評。富士川深き
 その河を渡すべし。こころ御評定はありしか。謀定の軍評。富士川深き
 流に、馬をも人をも失ひては、何の詮かはあるべき。敵に逢ひて命を
 ば捨て、徒に水に流れて、身を失ふべきにあらず。これは、雪げの水

なれば、急ご減る事あるべからず。明日、水に心得あらむ者を以て、瀬
 踏させて閑に渡すべきなりと申せば、この議然るべし。こころ、老成の
 一言、軍
 議立とるに
 さたまり。大勢雲霞の如くに、その邊に下り居たり。承平、高綱、生隆を討ち、
 さむの伊勢、○四大段、
 土川の平議をしるす。

殿原殿原とは、前に出發せる人々を呼びつゝ追ひ行くさまなり。○雪げは、雪ざ
 えの約なり、雪止けのことなり。○故實のためにもは、經驗といふにおなじ。このこ
 ろの詞なり。○敵をだに目にかけたらば云々は、敵なきにさることせむは、無益な
 りといふ意を裏面にさかせたるなり。○渚は、水陸の界にて、波うちぎはをいふな
 り。瀬踏は、瀬の淺深を踏み試むることなり。

梶原源太は磨墨に優る馬もやあらむと思ひて、暗に生隆大名の中を
 廻りて、馬ごもを見るに、九郎御曹司の青海波七寸、蒲御曹司の月輪
 七寸二分、和田小太郎の白浪七寸五分、畠山の秩父鹿毛七寸八分、此
 等を始として、大名小名五十四、三十四、五十四、引かせたり。されど
 も、磨墨に優る馬なし。いかに生隆に勝る馬ありむ。源太、大によろこび、一重あがりた

る所に居て、引き廻し、引き廻し、愛し居たり。得思ひや、あまりの嬉し
 さに、人かほめよかし引出物せむと思ふところに、喜びて狂ひ、村山黨
 の大將に、金子十郎家忠此山を伏せたり、折節、こゝを通りけり。招き寄せ
 て、いかに金子殿、この馬何法の馬にて候ふぞ、御覽ぜよといふ。自言
おもしろく、金子は、元より勇み狂したる男なり。金子の一人にて、重なり、打ち見
 て、誑れ笑ひ、これは、佐殿の磨墨にや、御邊親父梶原殿、御内には一人
 にて御座す。されば、御邊この馬場は、給ひにけり。この程の馬をば、
 よしともあしとも、中々詞を加ること沙汰の外に侍り。過譽よく、景季
 只時のきら、餘所の人目こそうらやましく候へ。こほめたりければ、
阿映の言よく、源太、大に悦びて、この客ありて、小櫻を黄にかへしたる鎧に、大
寫し得たり。刀一振り取り、副へて引く。の主客よき、狂一、對。源太は、舍人三人附けて、摩れ
 よはたけよ、飼ひいたはれさて、他事なく、これを愛しけり。扱つ、懸きを
きな伏す、佐々木四郎高綱は、生暖に黄覆輪の鞍磨墨の馬、白轡二引兩

の手綱結ひて、舍人六人附けて、浮島原を西へ向けて、そ引かせたる。
 原中宿を過ぎ、平々たる春の日なれば、生暖斜ならず、勇み身振して、
 三聲四聲嘶きたり。鐘をつく如くなれば、遙に二里を隔てたる、金子
 の浦へぞ響きたる。勇みは、やれるさま、島山此山を伏せたり、これを聞きて、こはいか
 に、生暖の鳴音のするは、誰人高綱をよ、の賜はりて、將て來たるやらむ
 といふ。この主ありて、この客あり、半澤六助申しけるは、是程の大勢の中に、數
 千匹逸物も多く侍り。何の馬にてか侍らむ。いまた、全大様の大事こ
 覺え候ふ。その上、生暖は、蒲殿、梶原などの申されけれども、御免なし
 と承る。さては、誰人か賜るべきといへば、この批評、重き高綱の人々げに
 もと思ひて、あざ笑ひてぞありける。これまた、輕きをしる、島山重忠は、一
 度も聞き損はずまじ。人になびたば、ずは知らず、一定、生暖が音なり。只
 今思ひ合せよ、といひも、果ねば、生暖、高綱をよび出したさむなり、生暖は、疑問をひ
おもしろ、妙なり、いはいむか、東の方より、舍人六人引きもためず、白泡かませ

て出て來たり數千の馬、匹類の色さてこそ、**島山**をば、**神**に通じたるや、
 びごも申しけれ眞に名智の才源太は、**磨墨**ほめ變して居たるころ
 を舍人ごも生唆引きてぞ通りける。ゆゝしく見えつるたりて、ぞ見相
 磨墨も勝る生唆にあひたれば無下にうてゝぞ見えたりける源太
 賜はるかよきついでさて、院へ進せらるゝか、ご思ひて、失望の極、疑問
 賜の性情あらは、**郎等**を以て、その御馬は、何方へ参り、如何なる人の馬ぞ
 ご問はす。舍人、これは、佐々木殿の馬ご申す。佐々木殿ごは誰ぞ。三郎
 殿か四郎殿かご問ふ。四郎殿の御馬ご答ふ。問答のさま源太、口惜き事
 にこそ。景季再三所望申しつるに、御免なき馬を、高綱にたびけるこ
 この遺恨さよ。眼のうらたは、血佐々木にたぶ程ならば、先の所望に附
 けて、景季に賜ふへし。景季に賜はぬほごならば、後の所望なり。高綱
 に賜ふへからず。想言大將軍たる人の源平の大事を前に拘て、あし

くも偏頗し給へり。類別にのぞみて、高綱に一是程の御氣色にてはいか
 でもありなむ。千世を榮ゆへき世の中にあらず。思へば、**電光**朝露の
 如くなり、いつ死なむも同じき事。心持はたぬ日比は、佐々木に宿意
 なし。時に取りて、日の敵なり。高綱さる剛者なれば、左右なくよもせ
 られじ。互に引き組みて、落ち重なり、腰の刀にて指し違ひ、耻ある侍
 二人失ひ、鎌倉殿に大損ごらせ奉らむ。これ鎌倉武士の本色高綱、景季二人は一
 人當千の兵をやご思ひて、相待つころに、佐々木いかてかかくこ
 は知るべきなれば、十七騎にて、さむくつろけて、歩せ來たり。三軍の
 源太は最後ご思ひつゝ、**磨墨**に乗り、太刀も持たず、刀ばかり三軍の
 指したりけり。遙に佐々木に目を懸けて、**眞横**に歩せ塞く。怒れ、み
 高綱、是を見て、郎等ごもに申しけるは、こゝにひかへたるは、**梶**
 原源太ご覺へたり。あの景色を見るに、馬の立てやう、人を待つ様、た
 事ごは覺へず。生唆故に一定、高綱に組まむご思ふ意趣あらむ。鎌

倉殿の意せよ。この事にこそ。別（別）に臨みての照應なからざるへ偶然ならず。組み
て落つるものならば、指違ひてぞ死なむ。死（死）はもその分なり。但、梶原、
佐々木公の馬を論じて、命をすてむこと、人目實事面目なし。（死）は
れこ、さゝやきてうち通らむとするところに、（危）源太うち並びて
いひけるは、いかに佐々木殿、遙に見参し奉らず。（先）つ久綱のあの御馬
は上より賜はりてかさいひかけて押並ぶ。（答）にむりて引き高綱につこ
さうち笑ひて申すやう、（敵）の怒を和く。實に久しく見参し奉らず。（答）これ
去年十月のころより、近江に侍りつるが、近につきて京へうちものば
るべきに、暇申さては、その恐あり。（願）朝に對し。また何方へ向へこの仰を
蒙らむと存じて、三日に鎌倉へ馳せ下らむさうつ程に、只一匹持た
りつる馬は、疲れ損じぬ。さては乗り替なし。いかゞすべきと思ひ煩ひ、
（敵）の怒を和くる手段なり。御廐の馬一匹申し預らばやと存じて、内々伺

ひきげは、磨墨は、御邊の賜らせ給ひけり。生暖は、御邊も蒲殿も、再三
御所望ありければ、御許なしと承る。さて、高綱なごが賜らむこと
叶ひがたし。（お）また敵の怒を和くる手段なり。中々申さむも尾籠なりと存し
て、心勞せし程に、由井濱の勢汰にもはづれぬ。さてまた、馬なしとて
留るべき事にもあらず。如何せむと按する程に、抑も、是は、君の御大
事なり。後の御勘當は、左右もあれ。盗みて、乘らむと思ひて、御廳の小
平次に心を入れ、盗み出だして夜にまぎれ、酒匂の宿まで遣はして、こ
の曉引うせたり。（ひ）かたなり。只今にや御使走りて、不思議なりといふ
御氣色にやあつからむと閑心なし。（川）の先陣を思ふかためならむ。若し、御
勘當もあらむ時は、然るべきやうに、見参に入れ給へとぞ陳したる。
（この）ひさ言にて景季の源太誠と心得て、怒りやすきものは、解け。げにげに佐々木
殿、輒も盗み出だし給へり。この定ならば、景季も盗むべかりけり。正
直にては、よき馬は、儲くまじかりけりと誑言して、打ち連れてこそ

上りけれ。淨盛殿にはれて、さやけき月み空にのりけるかこさし。○
五、大段佐々木と桐原さのみちすからの間答をしるす。

青海波七寸、月輪七寸二分とある寸尺は馬の長なり、馬のたけは四尺を定尺とす。四尺に一寸あるを一寸といひ、二寸あまるを二寸といふなり。○一重あがりたる所は、一段高きところといふにおなし。○時のさらのさらは、綺羅といふ文字より出でたれを、轉じては、光榮または名譽なといふところ、に用ゐるなり。○小櫻を黄にかへしたるは、青地に櫻を白く染めて、その上に黄色を施したるなり。○黄覆輪の鞍は、金覆輪、白覆輪などの如く、鞍の前後の輪の山がたよりつまさまで、黄にて伏輪したるをいふなり。○太刀一振取り副へて引くは、引出物にて、褒美に與ふることなり。一定は、必定といふにおなし。○いひも果ねばは、果ぬといふてゝるなり。古今集に、天の川あさ潮白浪たどりつゝ、渡りはてねば、明けぞしにける。とあるは、てねばもおなしことなり。○白泡がませて出て來たりの來たりは、來といふ動詞にたりといふ助動詞のそはれるなり。さりとたりと合併して、今や一の動詞となり來るといひてさるやうなり。たれば一言しおくなり。○ゆゝしくみえつる野墨もは、いらく見えつる磨墨もといふにおなし。○うてゝぞみえたりけるのうてゝは、歴字のたりて他におされてよむるこゝるなり。○よき次とては、このたびの上洛をよきついでとして、院へ奉るかとなり。○日の敵なりは、時にとりて今

日只今の敵なりといふことなり。さる剛者は、然るべき剛者なり。○左右なくば左右なくなり、とかくの論なくといふことなり。○耻ある侍は、耻辱を知る有爲の侍なり。○人目實事面目なしは、人目に對してまことに面目なしとのこゝる。○心あれば用意こそあれといふこゝる。○尾籠は不敬のこゝるなり。今も西國などにては、よくいふなり。左右もあれは、ともあれは、ともあれかくもあれといふことなり。○開心なしは、しつ心なしにて、安心安堵せぬことなり。○此定ならばは、かゝることならばといふにおなし。

大手搦手尾張國熱田社より相分れて、宇治勢多へ向ひけり。大手の大將軍は、蒲冠者範頼、相従ふ輩には、武田太郎信義の間大勢の人名あり余は畧す。家に郎等打ち具して、三萬餘騎、海道上りに、宿々山河打ち過ぎて、近江國勢多長橋に着きにけり。客これ搦手の大將軍は、九郎冠者義經相従ふ輩には、安田三郎義定、あこれ間また大勢人名を始として家子郎等、相具して、二萬五千餘騎、伊勢路を回りて、攻め上る。と聞えたり。これ大手搦手都合して、六萬餘騎の兵なり。旗鼓のいさましき陣伍のい

そ。さる程に、この間に、伊勢國の郡、大段敵味方の

大手は正しくは追手とかくなり、城砦の表門の稱なり。その反対は搦手なり。敵を
表より追ひ込めて裏にて搦むる意よりして追手とはいふなり

九郎義經はらに注す。伊勢國より伊賀路にかゝりて攻め上りけるが、
音にきこゆる鈴鹿山の麓關を通るにも、去年の白雪村消えて、谷の
氷も猶殘れり。この間、優美なる筆して途中の事。今日、甄原、和泉河、河風寒くう
ち過ぎて、柞森を弓手になし、高倉宮朝の兵をおこし、はたせるなり討れ
させ給ひし、光明山の鳥居の前を妻手に見て、山城國宇治郡平等院
の北の邊、富家の渡に着き給ふ。大段搦手の事

音にきこゆる鈴鹿山は、名高き鈴鹿山の意なれど、音の字は鈴に縁を取りしなり
○今日、甄原和泉河は、今日こゝにて見るといふことをきかせたるなり。みかの原
わきて流るゝ、いづみ川、いづ見きとてか戀しかるらむといふ歌の地名は、即ちこ
ゝなり。○平等院はもと源融の別庄にてありしが、宇治關白頼通これを領してこ
ゝりはじめて寺とはなしたり。

元暦元年正月廿日、大手搦手、宇治勢多に着く。九郎義經

また入る。河端に推寄せ見給へば、橋板を破り取りて向の岸に垣楯
に搔き櫓に搦へたり。水は深さ増して、底見えす。その上、亂杭、逆茂木、
隙なく打ちて、大綱小綱引き張りて、流し懸けたれば、鶯鴨などの水
鳥も轍くくゝり通るべし。こも見えざりけり。まづ敵の備をしるす、これ鎌
倉平評定に應ず。この間、人家

方を下知し給ひけり。矢立の硯を取り寄せて、宇治河先陣高綱を伏
剛者こを、次第を明々に注して、鎌倉殿へ見參に入るべし。こ仰られ
ければ、軍兵各勇を成して、忠を抽てむ。こぞ色めきける。この間、平山武
者所、季重の橋

次郎重忠これ高綱の客なるもの、この人進み出て、申しけるは、事新し。この
川は近江湖の末、今始めて出て來たる川にあらず。春立つ日影の習
水椀先陣熊谷次郎直實父子、されども、いまだ川を渡すものはなかりけり。佐
木根原をせま、いかゞあるべきと評定さまく、なりけるに、島山庄司

にて、細谷川の氷解け、比良の高根の雪消えて、水のかさは増すも、水の減ることあるべからず、足利又太郎忠綱も、高倉宮の御謀叛の御時は、渡せばこそ渡しけめ、鎌倉殿御前にて、さしも評定のありしは、これぞかし始めておごろくべきここにあらずかねての馬生暖をせまり、用意そのことなり、重忠わたして見参に入れむといふこと、ろに、高綱殿をせまりいたすなり、平等院の小島崎より、武者二騎、蒐げ出でたり、千軍馬聲たねて、四梶原源太と佐々木四郎となり、百萬の軍勢、目を景季のよりさきなるも、装束には、木蘭地の直垂に、黒革威の鎧に、三枚兜の緒をしめ、滋藤の弓の中を取り、二十四差したる中黒の矢負ひ、練鐔の太刀を佩きて、鎌倉殿より賜ひたる磨墨といふ名馬に、黒塗の鞍おきて、騎りたり、高綱次に後なるは、褐の直垂に、小櫻を黄に返したる鎧に、鉄形打ちたる兜に、笛藤弓の真中を取り、二十四差したる石打の征矢、頭高に負ひ、噴物造の太刀帯ひて、これも鎌倉殿より賜ひたる

生暖に黄覆輪の鞍おきて、ぞ騎りたりけるそのいさましきなにかたさ、誰か先陣と見るところに、源太颯と打ち入りて、遙に先立ちけり、あさなるものは高綱、高綱いひけるは、いかに源太殿御邊と高綱と外に入なければ、かく申す、殿の馬の腹帯は、以外にゆるびて見ゆるものかな、この川は、大事の渡なり、河中にて、鞍踏み返して、敵に笑はれ給ふなごいひければ、敵を欺きさもあらむと思ひて、馬を留め、鎧踏み張り、立ち舉り、弓の弦を口にくはへ、腹帯を解きて、引き詰め、引き詰め、おめける間に、彼ははやわ、高綱さつと打ち渡して、二段ばかり先立ちたり、先なるものは後れ、源太たばかられけり、既にお安からず思ひて、是も打ち浸して渡りけるが、馬の足綱にかゝりて、思ふやうにも渡されず、手足心にし、高綱は、究竟の逸物に乗りたれば、宇治河は、やじいへども、淵瀬をいはず、さゝめかして、かねに渡し、よき馬のしるしあり、向の岸近くなりて、高綱か馬綱にかゝりて、足をささみ、除きければ、も

ことより期する事なれば、太刀を抜き、大綱小綱三筋、さき切流む向の
 岸へ打ち上り、燈踏み張り、弓杖突きて、佐々木四郎高綱、宇治河の先
 陣渡りたりや。名乗りも果てぬに、梶原源太も流渡りに
 上りにけり。源太は去り、汗をにききたりて、源太は早馬立て、いつ
 れも劣らじ負けじと馳せて行く。使者また先をあらそへり。源太が早馬
 は先立たちたりけるが、者また主人の先後をおなしくす。おもしるものは高綱の使者、使
 ないか、したたりけむ、足柄の山中にて、高綱が早馬先立ちぬ。後日の
 治河先陣と申したり。同時に、梶原が使、また來りて、景季先陣と申し
 り。右兵衛佐殿、安立新三郎清恒を召して、佐
 々木梶原生たりや。ご間ひ給へば、共に候ふと申す。先陣のしるはし、高綱
 その後は、尋ね給ふことなし。生死の間に、高綱の先陣はあきらからむ。後日の
 注進に、宇治河の先陣は、高綱と注せられけるを見給ひてこそ言

の頼朝の前にいひ、ご心ご相違なごは宣ひけれ。[はじめなる頼朝と高綱との間
 ちの頼朝の前にいひ、ご心ご相違なごは宣ひけれ。]答に應ず。このことありて全
 昔振へり。書點晴の法なり。先陣をいふは、かゝるす。

橋板を破りは、宇治橋の橋板なり。○矢の硯は、軍陣にて箆の中に入れて携ふる硯
 今の懐中硯の如きものなり。○事新しは今更、ごかくいふ事新しといふことゝるな
 り。○兼ての馬用意その事なりは、兼ての馬用意はそれかためなり。○木蘭地は、薄
 墨色にすこし黄色をおびたる色なり。○黒草威は黒に染めたる草もて、をどした
 るをいふなり。をどしは、鏡の小札は、絲または革にて綴るものなるが、その綴るを
 をとす。緒通の約といひ、そをまたをとしといひて、一の体語にしたるなり。緋威、小
 櫻威、卯花威など、皆その草絲の染色より名づけたるなり。○三枚冑は、三枚張のか
 ぶとなり。○滋藤の弓は、藤を繁く巻きたる弓をいふなり。村重藤、本滋藤、末滋藤、吹
 寄滋藤など、その巻きたるさまによりて種々の名あるなり。練鐔は、革をいくたび
 も練りて、作りたる鐔なり。○笛藤の弓は、藤を笛巻の如く巻きたる弓なり。○石打
 の征矢の石打は、鴨の羽なり。○噴物造は、いかにいさましく見ゆるこしらひの
 太刀をいふなり。○かねにわたしは、直徑に渡し行くことなり。○共に候ふと申す
 は、共に生きて居り候ふと申すといふことをは、ふきてかきたるなり。
 おのれ、好みて、戦記文を讀む、戦記文中おもしろきものおほかれど、盛衰記の右

に出づるものはなからむ。その盛衰記中おもしろきところおほかれを宇治河先陣の條の右に出づるものは、またなからむ。これこゝにこの條を評釋せしゆゑよしなり。さて、この宇治河先陣の條の文につき、そのおもしろしと思ふふしを左にいひ。

(一) 文を作るものは、まづ一篇の主意を立つるを要す。文法上命意といはれもの、やがてこれなり。この文の主とするところは、全く宇治川先陣にあり。宇治川先陣の主とするところは、全く馬匹にあり。故にその事、その物始終筆のあたりをばなれず。氣脈貫通、能く入をして、肯綮を知らしめ、またよく實境を想はしむ。全篇中、馬字は、幾字あるか、靜かにそを數へて、作者の苦心のところを知るべきにな

ひ。
(二) 文の主人公は高綱なり。その高綱は、景季をあさひきて先陣の効を遂げたり。義人か、奸物か、かの先陣のところのみ讀まば、或は奸物とも思はるゝならむ。されど、全篇をよむに、おのづから讀者をして、無二の忠臣たるやう思はしむるは、そもくゝなにぞ。そは頼朝と對話のところ、景季と、全くその性質をことなるやうに去るしるたがためなり。景季の傲謔をこまかにしるしたりと同時に、高綱の忠實すべて、かきつくして、殘さず。こはこれ、最も作者の苦心せしところなり。

(三) 文章は、變化なかるべからず。この文の八大段中、その變化のおほきは、實におどろくべきなり。ことに七、八大段に、優美なる文章を用ゐたるなど、おもしろきかぎりならずや。また、八大段のはじめに、平山武者所季重をかりきたりて、讀者を笑はしめ、熊谷次郎直實父子をかりきたりて、讀者を泣かしむるなど、いかにたぐみなる筆ならむ。變化自在神のごとしともいふべきか。

(四) 八大段に、萬軍の勢汰を馬匹に代へてまかせ、而して、六大段にいたり、大手搦手の部署のところ、にいたりて、軍勢の姓名を列擧したるなど、何等のたくみぞや。

(五) 浮島原のところ、景季の客として、金子十郎家忠を出だし、高綱の客として、畠山庄司重忠を出したるなど、讀者の最も味は、さるべからざるところなり。
(六) 生暖は、高綱の乗りたる馬なり。故にその服装は、すべて、生暖の毛色にちなみて、黄色を用ゐたり。楊の直垂、小櫻を黄にかへしたる鍔、黄覆輪の鞍、皆それなり。磨墨は、景季の乗りたる馬なり。故にその服装は、すべて、磨墨の毛色にちなみて、黒色を用ゐたり。木蘭地の直垂、黒革威の鍔、小中黒の矢、黒塗の鞍、皆それなり。その用意、實にいたれり。

(七) 八大段の結末にいたり、高綱、景季、早馬を立てしが、その早馬先後するありさま、生磨磨墨の先後とおなじやうなるさまにかけり、事小なれど、また作者苦心